

ORIGAMI

TANTEIDAN

折紙探偵団

M A G A Z I N E

定価 635円
(本体605円)

クローズアップ Close-up

ジオスフィアで作る ジオデシックドーム

The Geodesic Dome with Geosphere Modules

川村みゆき

Kawamura Miyuki

折り図 Diagrams

ひつじ 小松英夫

Sheep

Komatsu Hideo

展開図折りに挑戦! Crease Pattern Challenge!

リュートを弾く天使

An Angel Playing the Lute

川畑文昭

Kawahata Fumiaki

つまみおり Information

第13回折紙探偵団

コンベンションレポート

The 13th Origami Tanteidan Convention Report



通巻 105 号

日本折紙学会 (JOAS) の理念

The Purpose of Japan Origami Academic Society

第一章 名称と目的

第一条 会の名称

1. 本会の名称は日本折紙学会とする。
2. 本会の英語での名称は、Japan Origami Academic Societyとする。
3. 本会の略称は、JOASとする。

第二条 会の目的

1. 本会は、折り紙の専門研究と折り紙の普及の促進、ならびに、それらを通しての広く国内、外の折り紙愛好家との交流の促進を目的とする。
2. 第一項の折り紙の専門研究とは、折り紙の創作、折り紙の創作技術の研究、折り紙に関する批評・評論、数学研究、教育研究、歴史・書誌研究、知的財産権等の研究、工学・商業デザインの研究等を意味する。
3. 第一項の折り紙の普及とは、折り紙の社会的認知度の向上活動、折り紙愛好者層の拡大活動、折り紙に関する人材の育成と発掘等を意味する。

規約第1章より抜粋

Chapter 1: Name and Purpose

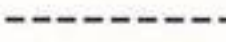
Article 1: Name

1. This society is to be called Nihon Origami Gakkai in Japanese.
2. This society is to be called Japan Origami Academic Society in English.
3. The abbreviated name of this society is JOAS.

Article 2: Purpose

1. The purpose of JOAS is to promote studies of origami, diffusion of origami, and both domestic and international association of all origami-lovers.
2. The studies of origami mentioned above includes designing, designing techniques, criticism, mathematical studies, educational studies, history, bibliography, studies of the intellectual property rights, studies of industrial and commercial design, and so on.
3. The diffusion of origami mentioned above includes widening appreciation of origami, expansion of the community of origami-lovers, scouting and rearing the origami talent, and so on.

●折り方の約束記号 SYMBOLS FOR FOLDING

 谷折り線 Line indicating valley fold	 山折り線 Line indicating mountain fold	 手前に折る Fold paper forwards	 後ろへ折る Fold paper backwards	 折り筋をつける Making a crease line	 段折り Pleat fold
 裏返す Turn paper over	 引き出す Pull out	 図の見る位置が変わる Rotation	 図が大きくなる A magnified view	 見えないところ A hidden line	 押す、押しつぶす Push paper in
					 切る Cut

表紙解説

リュートを弾く天使

作:川畑文昭(P.34)

An Angel Playing the Lute
by Kawahata Fumiaki (P.34)

■コンベンションで見せていただいたとき、心の中で「やられた!」と叫んでしまった作品。左右非対称構造から、人物のみならず曲面的な楽器までもが巧みに導き出されています。最近では蛇腹人物造形に、力のこもった作品が数多く登場するようになりました。非常に楽しみでもあり、また焦りを感じる(笑) 今日この頃です。

(解説:北條高史) Comments: Hojyo Takashi

ORIGAMI TANTEIDAN
折紙探偵団
MAGAZINE
CONTENTS

No. **105**



An Angel Playing the Lute : Kawahata Fumiaki

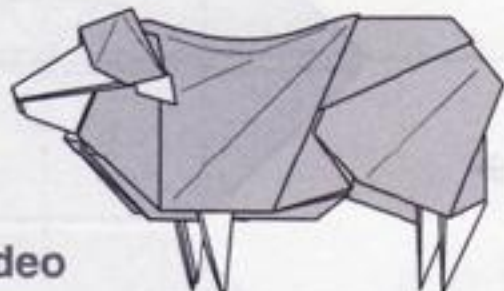
クローズアップ／Close-up

- P.11 **ジオスフィアで作る
ジオデシックドーム**
The Geodesic Dome with
Geosphere Modules

川村みゆき
Kawamura Miyuki

折り図／Diagrams and Crease Pattern

- P.22 **ひつじ**
Sheep



小松英夫
Komatsu Hideo

- P.34 **展開図折りに挑戦!**
Crease Pattern Challenge!

リュートを弾く天使
An Angel Playing the Lute
川畑文昭 Kawahata Fumiaki

カラーページ／Color

- P.20 **オリガミ・フォトギャラリー**
Origami Photo Gallery

解説・北條高史
Comments : Hojyo Takashi

折り図／Thematic Series with Diagrams

- P.4 **知子の部屋**
Tomoko's Room

にそう舟ユニット:寒桜
Twin-Boat Modules: Chinese Primrose

布施知子
Fuse Tomoko

- P.8 **おりがみ我楽多市**
Origami Odds and Ends
お菓子な箱
Sweetie Box

やまぐち真
Yamaguchi Makoto

読み物／Articles

- P.14 **過去の折り紙に学ぶ** ジョーン・ホームウッド
Learning from the Paperfolding of the Past
Joan Homewood

British Origami Society (イギリス折紙協会) の成り立ち
Birth of British Origami Society
翻訳: 羽鳥公士郎
Translator: Hatori Koshiro

- P.16 **折紙図書館の本棚から** 羽鳥公士郎
From the Bookshelves of the JOAS Library
Hatori Koshiro
『Origami from Angelfish to Zen』
"Origami from Angelfish to Zen"

- P.18 **折紙散歩右往左往** 前川 淳
Origami-Sampo to Unexpected Directions
Maekawa Jun
知られざる出雲のおもかげ
Glimpses of Unfamiliar Izumo

- P.35 **ペーパーホルダーの横顔**
Paper Folders on File
ジャン・ディン Giang Dinh
取材: 羽鳥公士郎
Hatori Koshiro

コラム／Columns

- P.7 **折り紙の周辺** 布施知子
Origami and Its Neighbors
Fuse Tomoko

- P.32 **おりすじ** 田中幹人
Orisuzi ("Fold-Creases")
Tanaka Mikito

- P.33 **折紙三昧** 前川 淳
Origami-Zanmai (This Origami and That)
Maekawa Jun

情報／Information

- P.36 **つまみおり** Rabbit Ear
第13回折紙探偵団コンベンションレポート
The 13th Origami Tanteidan Convention Report

知子の部屋

Tomoko's Room 第2回

布施 知子
Fuse Tomoko

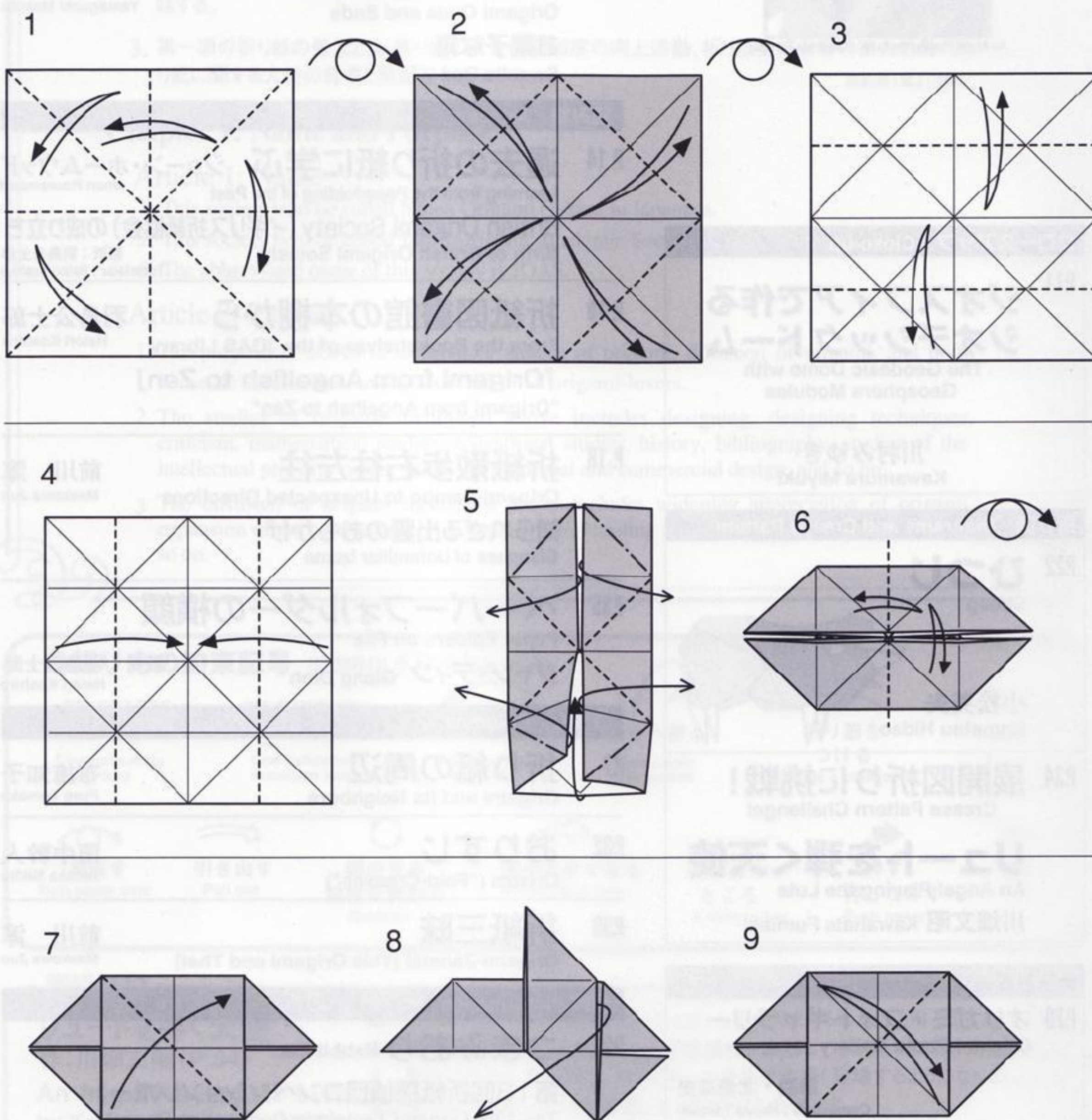
にそう舟ユニット:寒桜

Twin-Boat Modules: Chinese Primrose

伝承の「にそう舟」(風車)がユニットとして機能する作品群を見つけました。この『寒桜』は30枚組が5弁の花の集まりにも見えるので、そう名づけました。いろいろな組み方ができますが、30枚組が作りやすく見栄えもします。

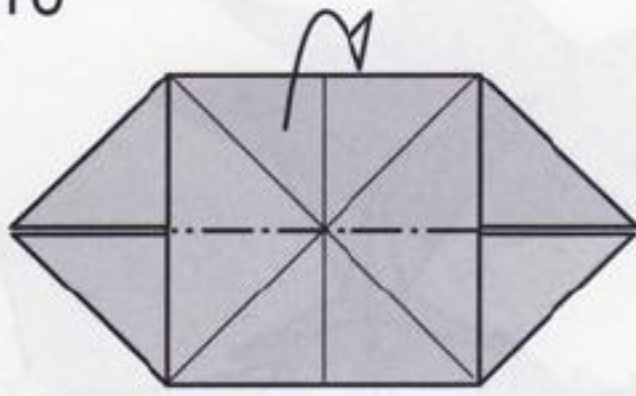


用紙: 15 × 15cm または 7.5 × 7.5cm もかわいい

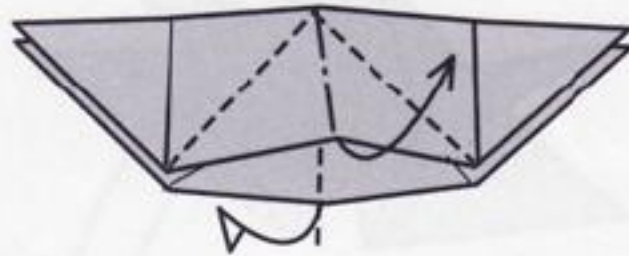


▶ 標準タイプ ◀

10

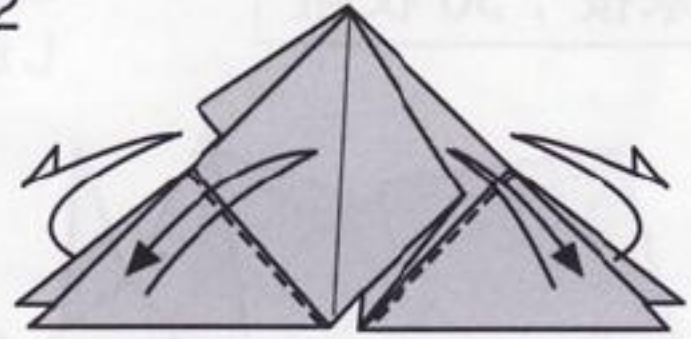


11



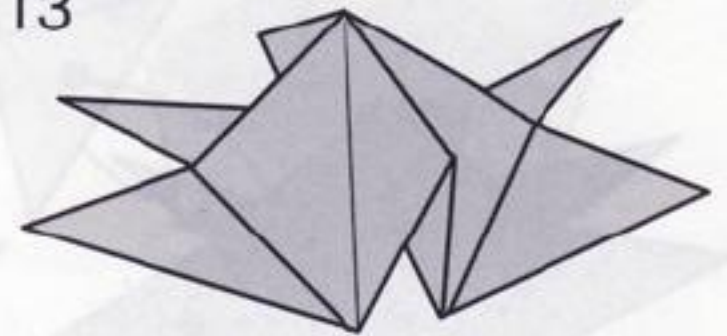
中を割って開き4つのかどを下に集める

12



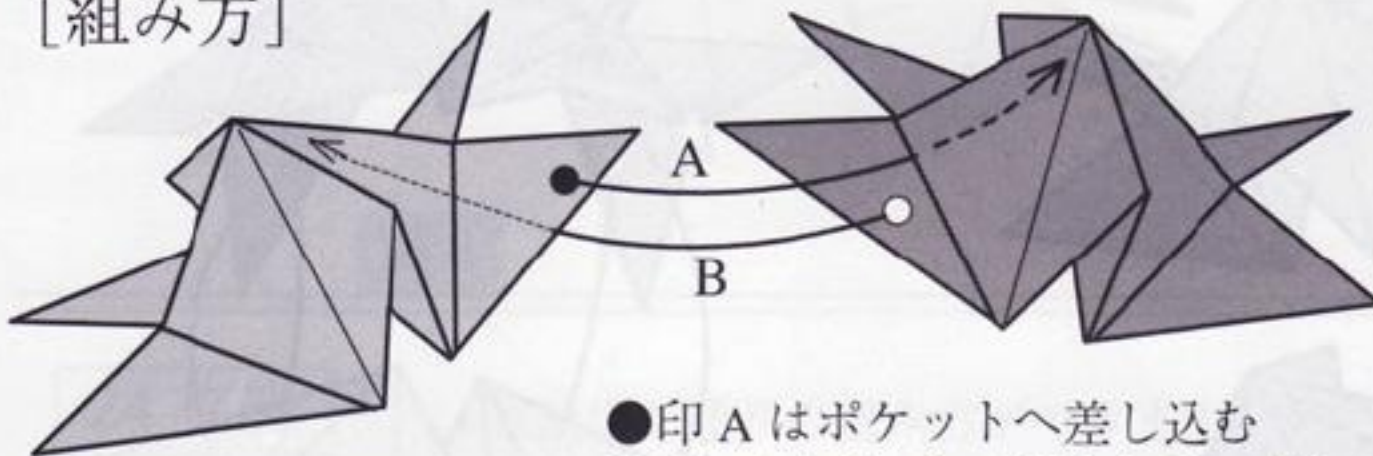
4つの三角の折り線をつける

13

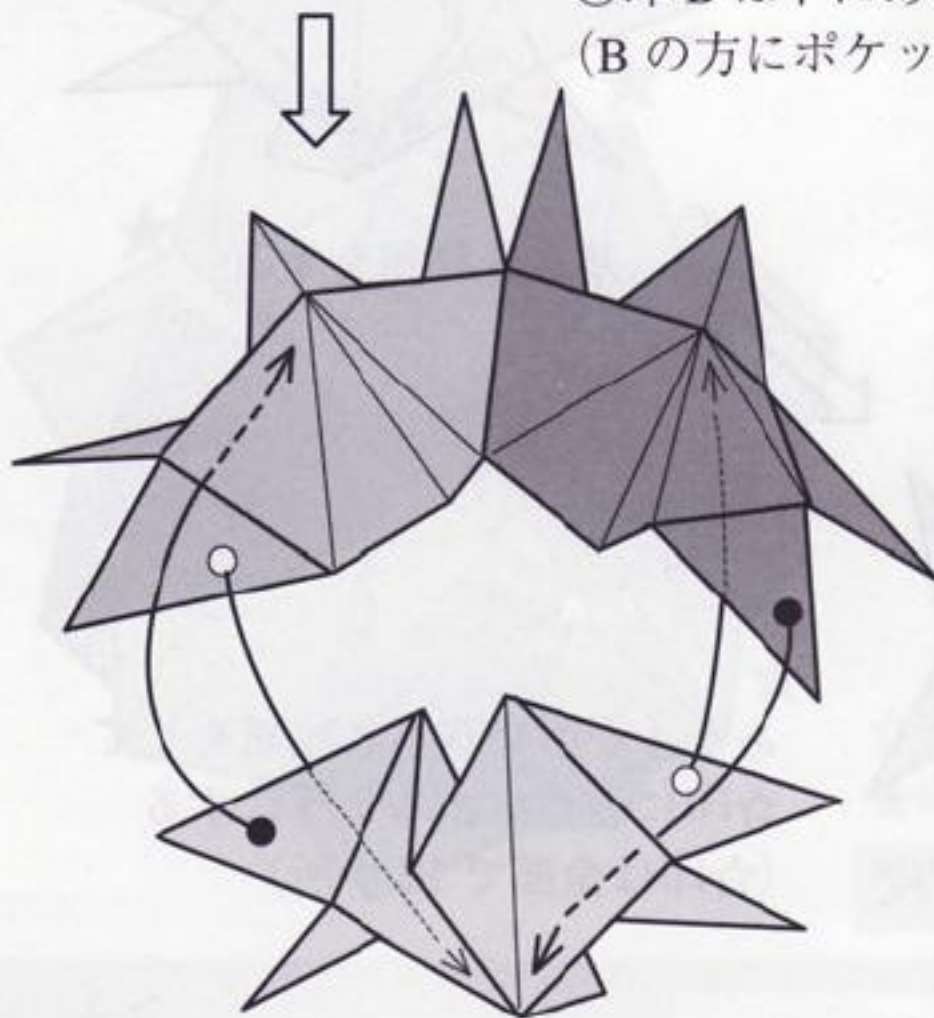


ユニット完成

[組み方]

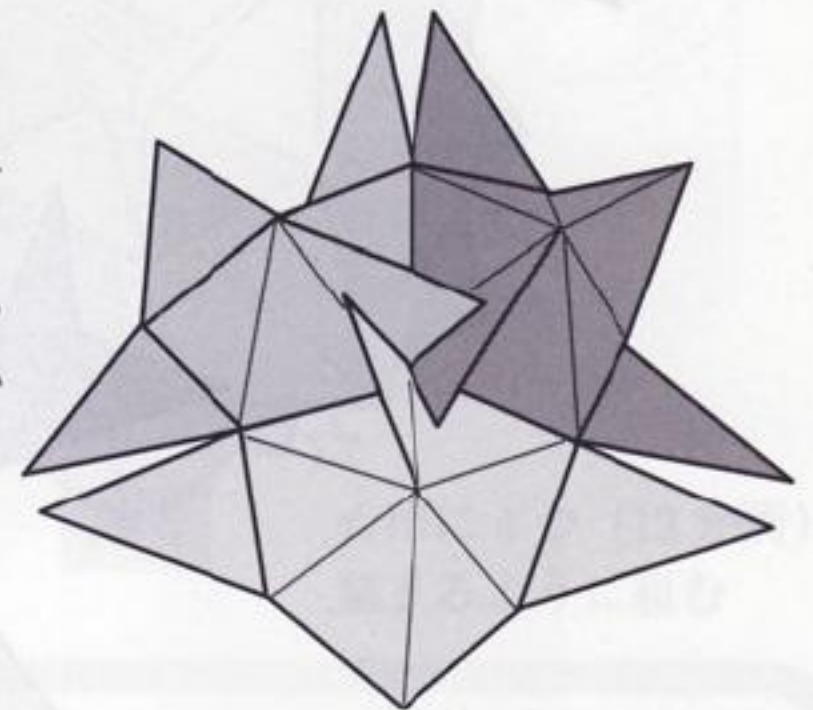


●印 A はポケットへ差し込む
○印 B は下にあてがうように差し入れる
(Bの方にポケットはないが、この作業で丈夫な組み方になる)

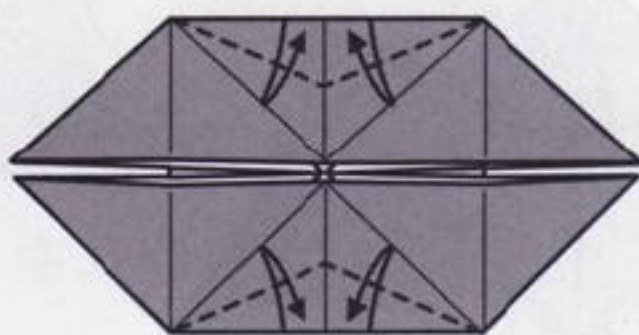


3枚を同じ要領で組む。
中に出てくるひだは、同一方向に倒す。
不安定なようだが、いくつか差し込んでいくとしっかりする。

基本3枚組

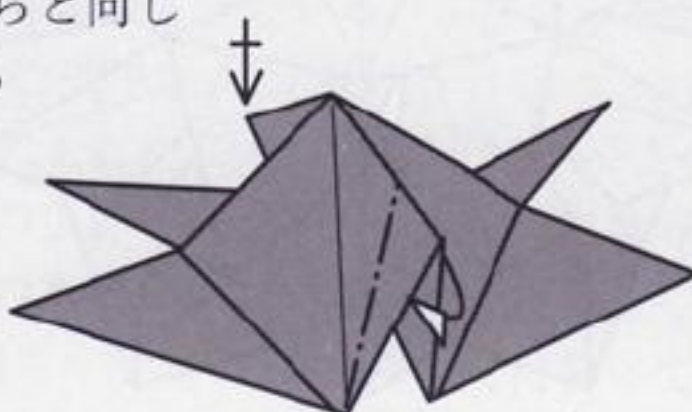


▶ 中割りタイプ ◀

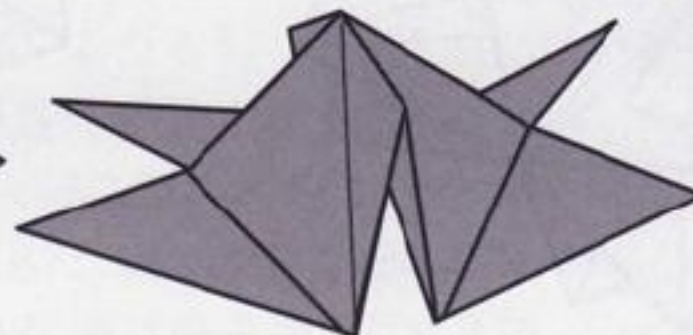


9でさらに図のような折り線を入れる

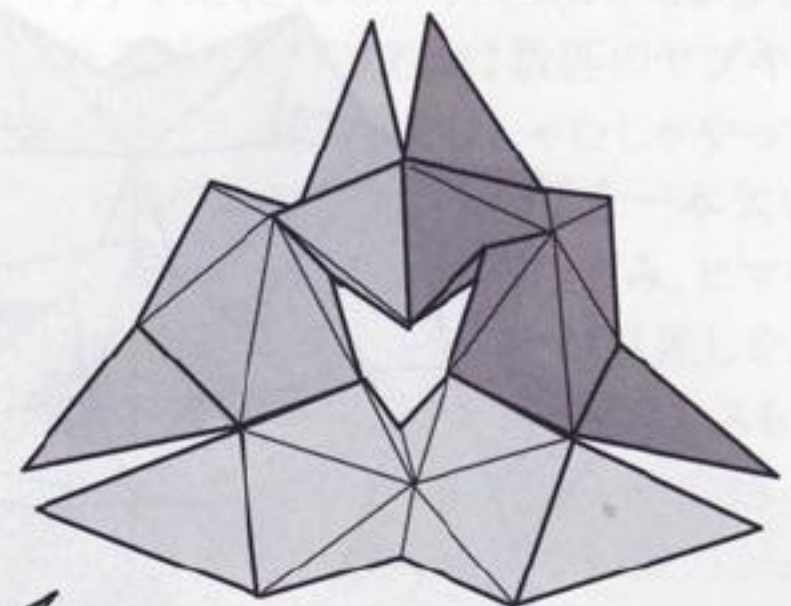
以下10からと同じように折る



中割り折り



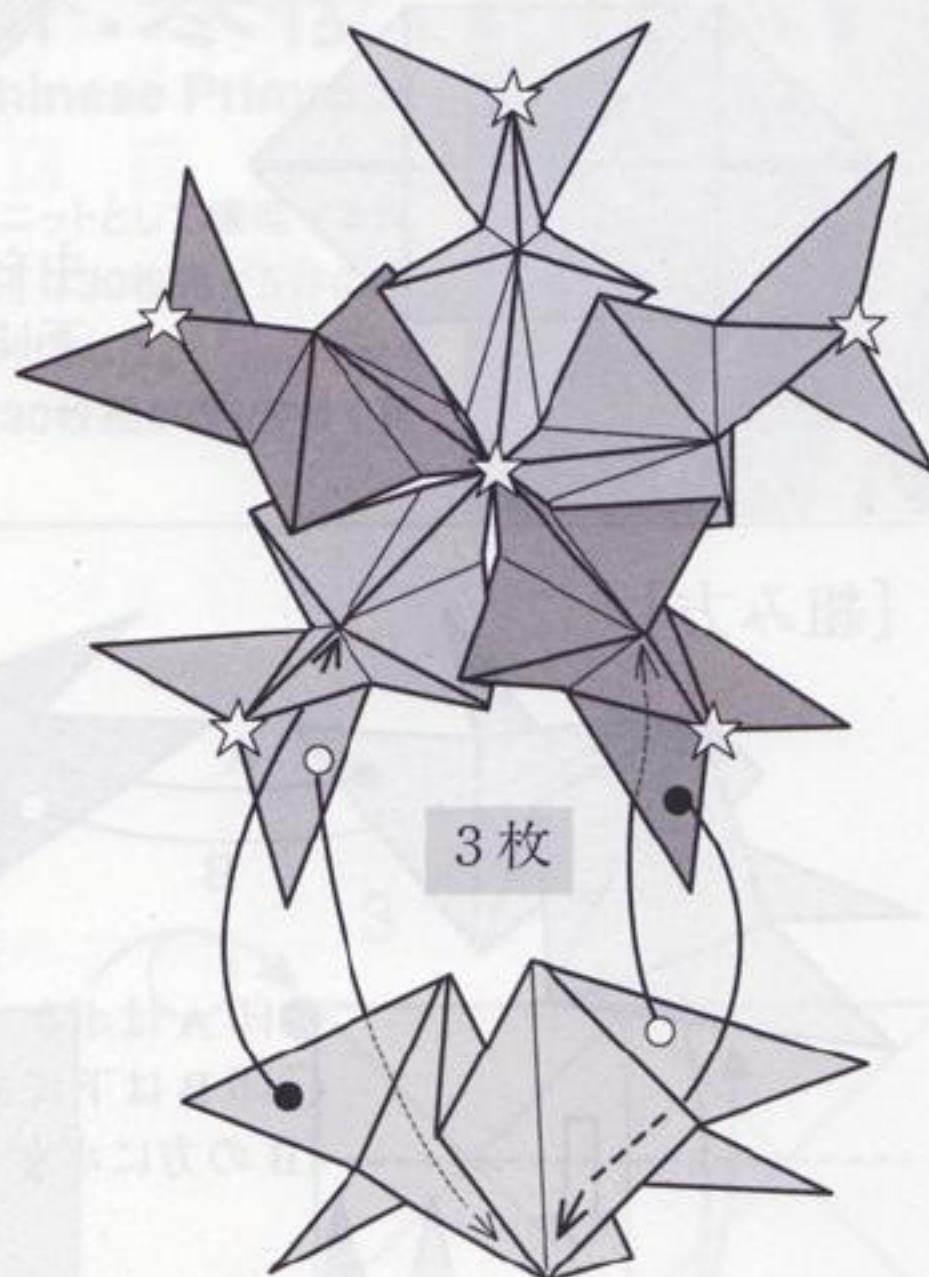
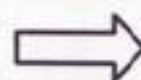
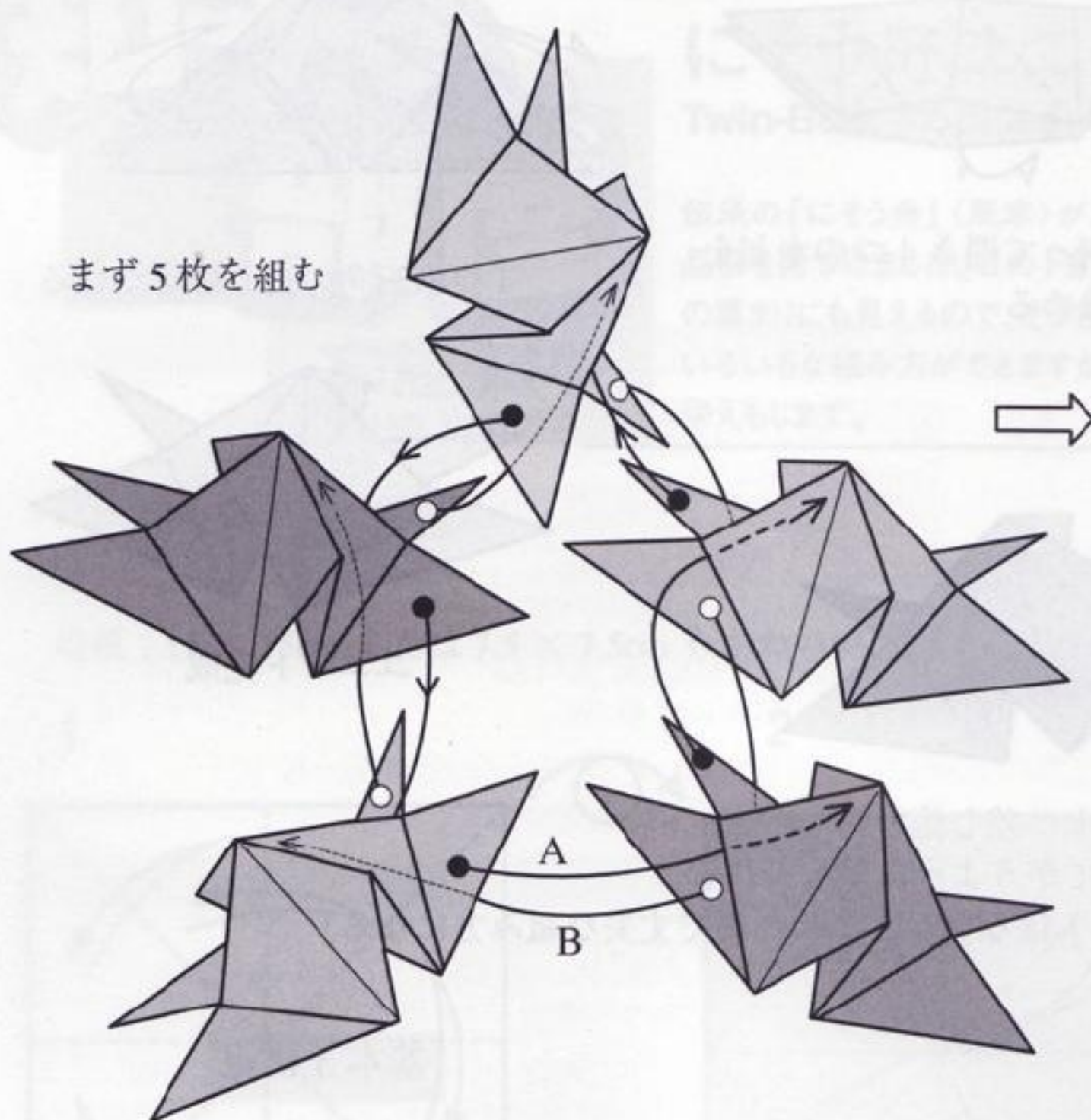
基本3枚組：中割り



寒桜：30枚組

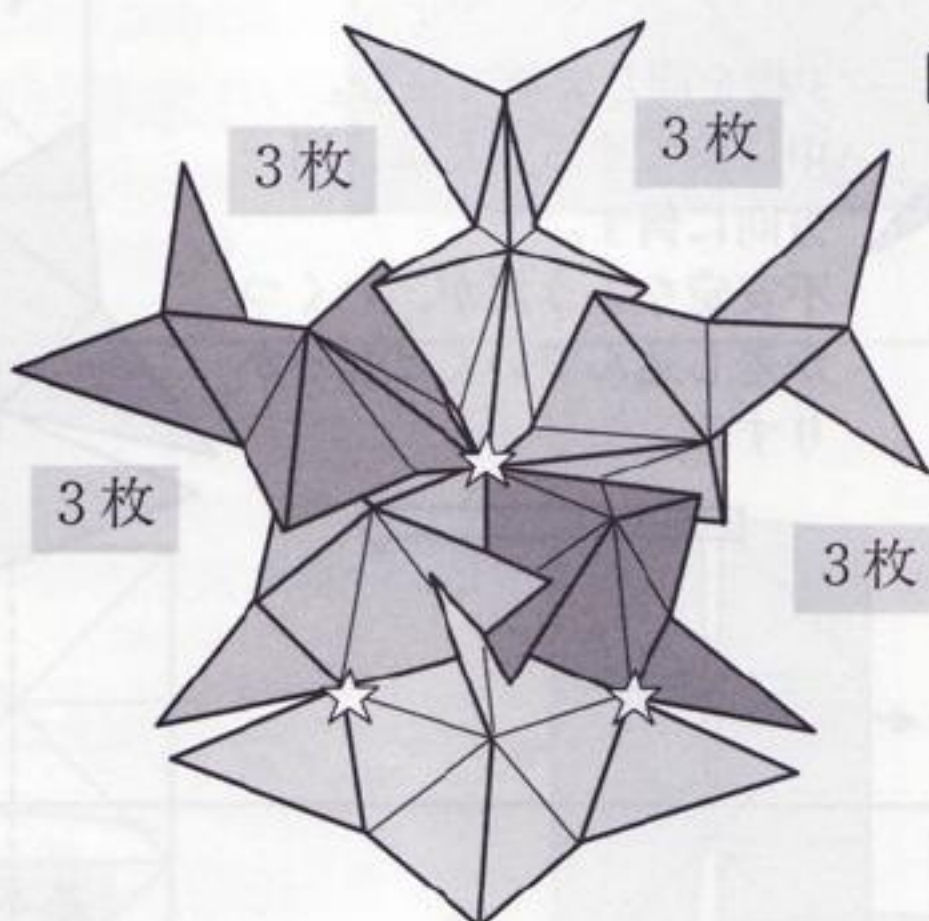
このユニットは12枚組,24枚組,90枚組などいろいろもできます。
しかし単独で組みやすく丈夫なのは30枚組です。

まず5枚を組む



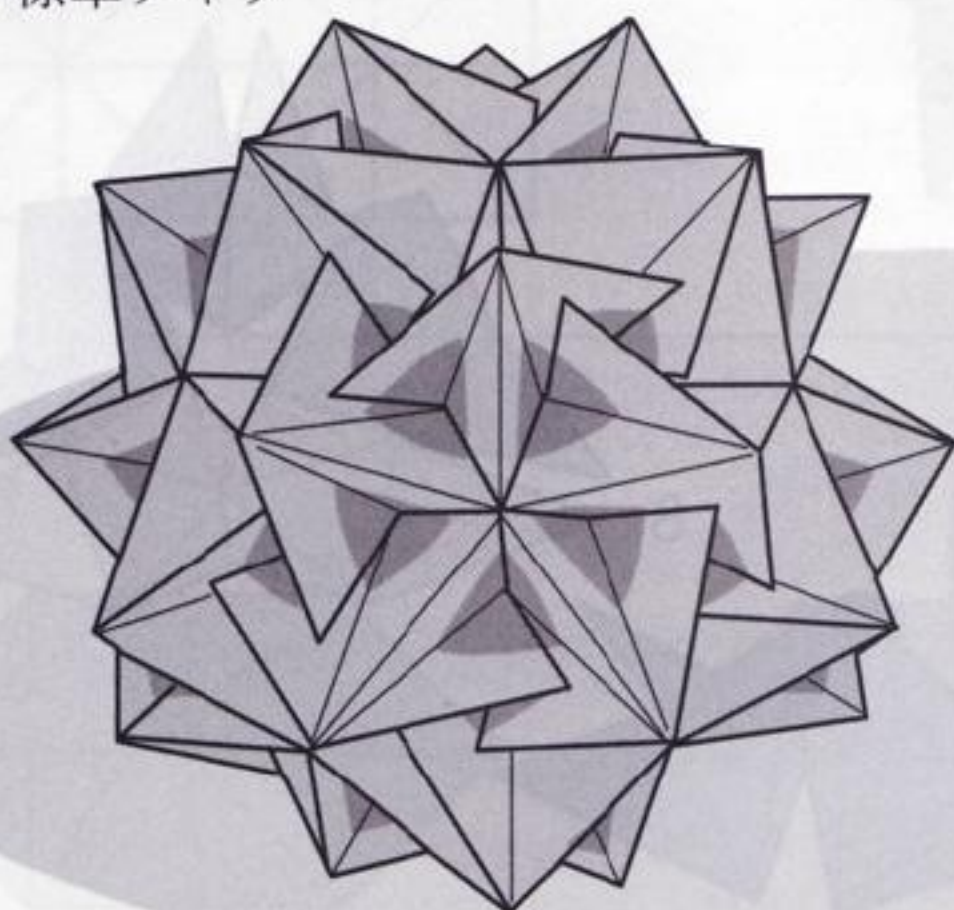
3枚

基本3枚組をする

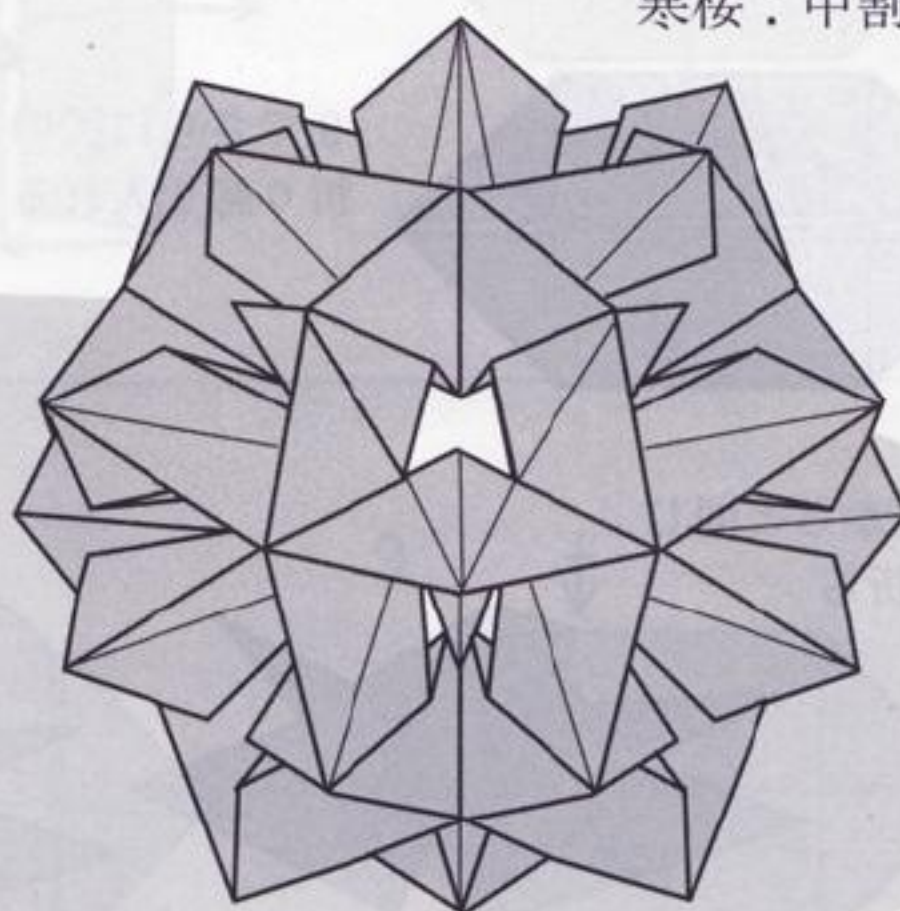


あと4か所で基本3枚組をして
☆印に5つ集まるようにする
(☆印は全部で12か所)

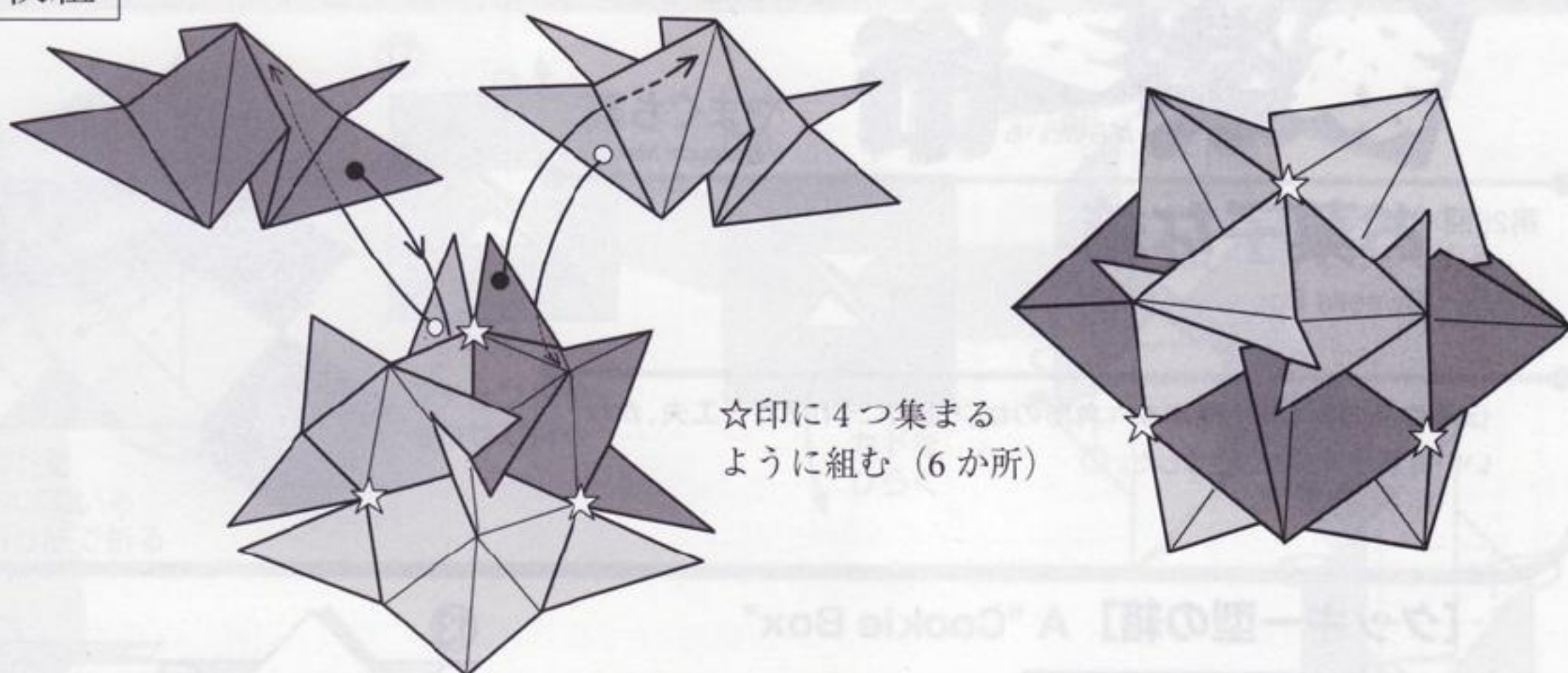
寒桜：標準タイプ



寒桜：中割りタイプ



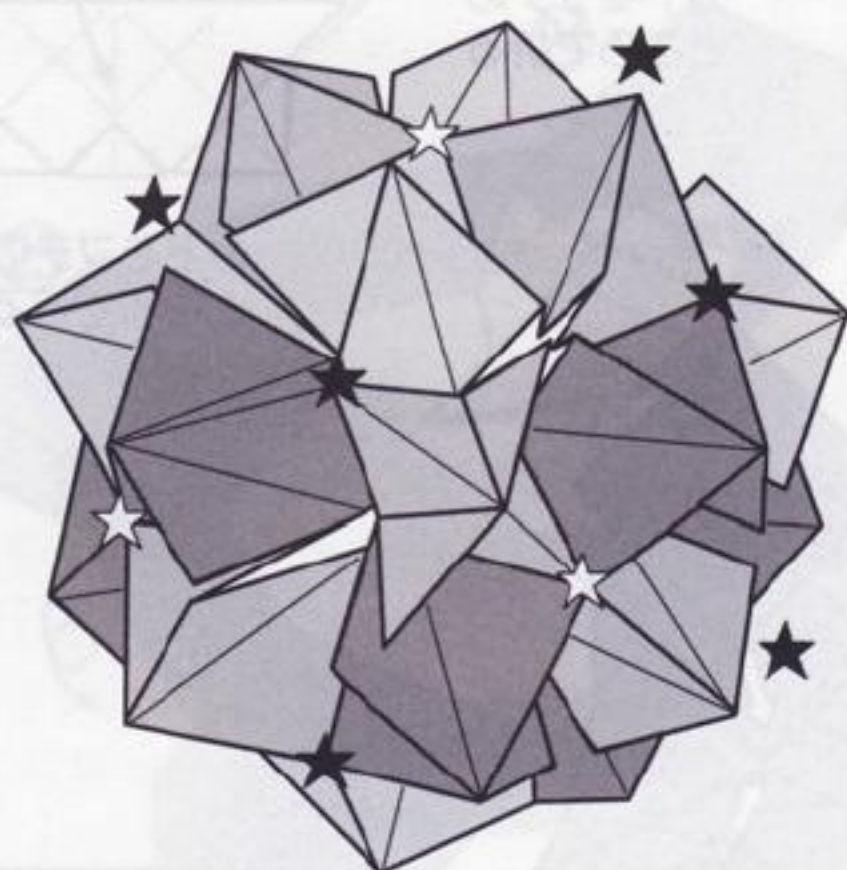
12 枚組



☆印に4つ集まる
ように組む (6 か所)

24 枚組

24 枚組は 2 通りの組み方ができます。



☆印に4つ (6 か所)
★印に3つ (8 か所)
集まるように組む



☆印に4つ (12 か所)
集まるように組む

折り紙の 周辺

第25回

虫の深み

Spellbound by Insects

Origami and
Its Neighbors

布施知子 Fuse Tomoko

世の中には2種類の人間がいる。すなわち虫が好きな人と、嫌いな人と。というのは、たしかフランス文学者で筋金入りの虫好きで知られる奥本大三郎さんの本にあったと思う。同じことが折り紙でも言えそうだ。虫の折り紙が好きな人と、嫌いな人と。折

り紙の動物作品には省略や修正があり、たとえ精密に設計されたものでも、何かしら詩情のようなものを感じる。それが作者の個性でもある。それにひきかえ、一部そうでないものはあるにせよ、昆虫折り紙は形に対する挑戦。どこまでも写実を追求している。ときには息苦しいほど執拗に。技術の鍛錬と写実に折り紙はなぜ虫を選んだか。カドが多くバランス的にも奇想天外なものが多いからだろう。虫は折り紙に愛されている。虫が嫌いでも折り紙の虫は好きという人もいるだろう。

ここ数年趣味の昆虫撮影にうつつを抜かしていることは、再三このエッセイに書いてきた。庭には虫寄せの花木を植えている。夏は豪華絢爛に咲き誇

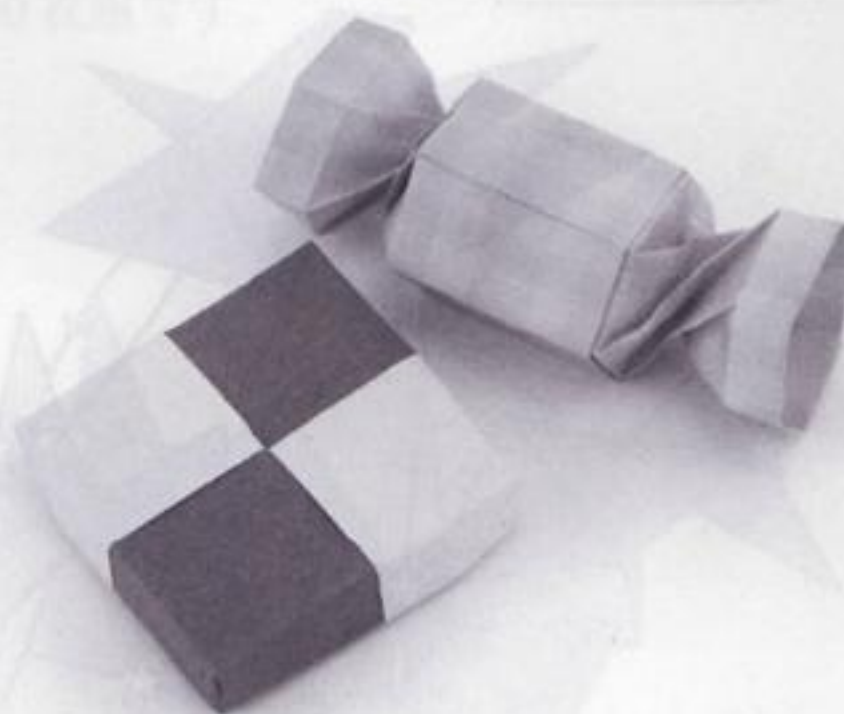
り、色であふれる。今年の夏はたいそう暑かった。ミウガはジャングルのように茂り、ウドは大木となり、その花にはもうすぐたくさんのハチやヒョウモンが群れるだろう。ダリアには数匹のヤブキリが憩って、花びらをむしゃむしゃやっている。ワレモコウには前足を一本欠いたナナフシが静かにたたずみ、ヒマワリの葉影ではフキバッタが日差しをよけている。アンバランスもバランスもうむを言わせぬ形。色。動き。一步踏み込むと深入りせざるを得ない魅力が虫にはある。

虫を見てたまげ、折り紙で虫の形へ挑戦する者たちを見てまたたまげる。虫の深み、折り紙の深み。たまげることばかり。

第26回 **お菓子な箱**

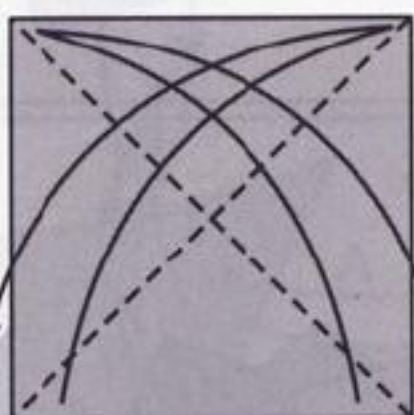
Sweetie Box

伝承作品の重ね箱と簡単な六角形のねじり折りにそれぞれ一工夫、かわ
いとお菓子の箱ができました。



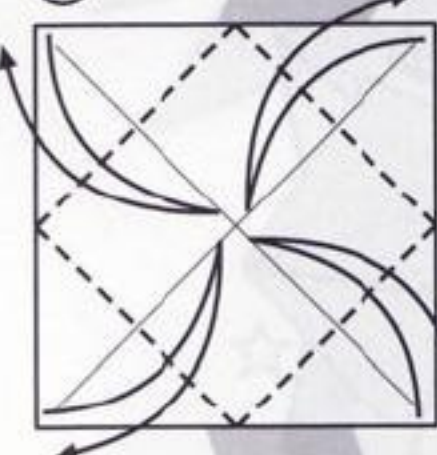
【クッキー型の箱】 A "Cookie Box"

[ふた] ①



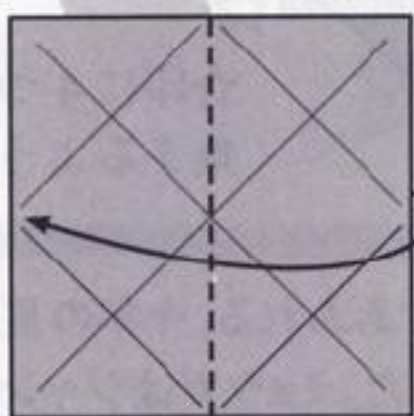
三角に
折り筋を
つける

②



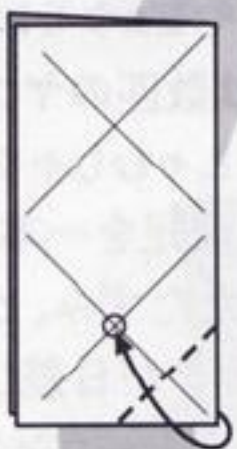
カドを中心
に合わせ
て折り筋
をつける

③



半分に折る

④



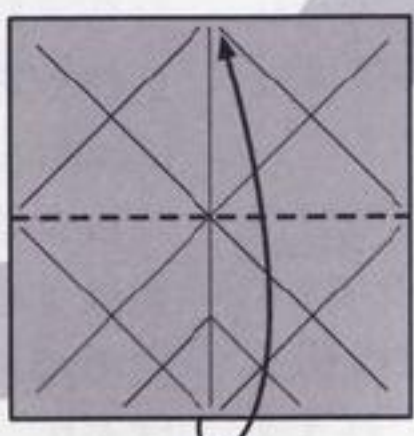
カドを
折り筋に
合わせて
折る

⑤



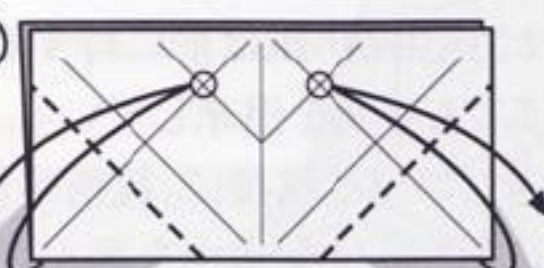
全部ひろげる

⑥



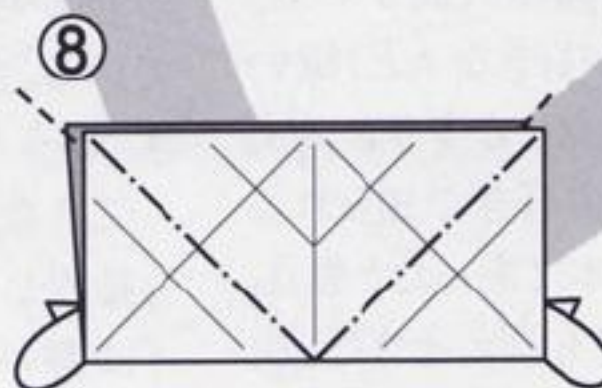
半分に折る

⑦



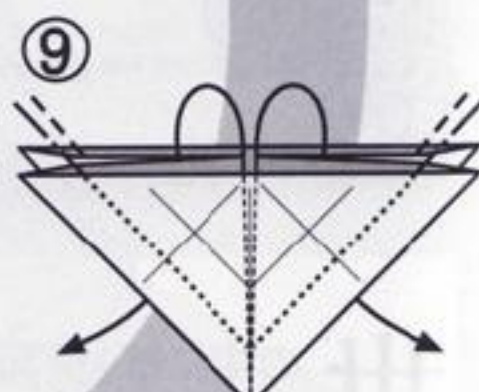
カドを折り筋に
合わせて
折り筋を
つける

⑧



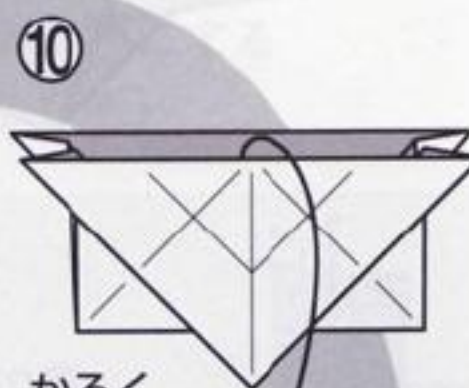
ついている折り筋で
カドを内
側に折る

⑨



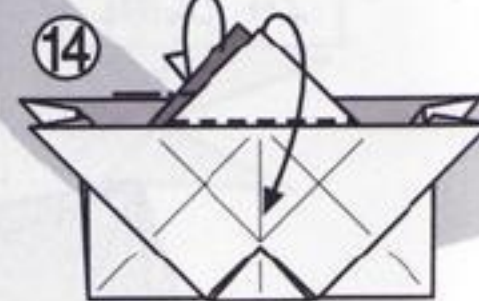
内側のカドが
外に出るよ
うに7でつ
けた折り筋
で中わり折
り

⑩



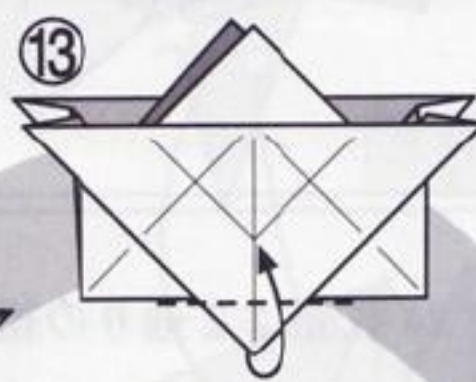
かるく
ひろげて
内側を見
る

⑪



1/4の
大きさの
紙をカド
を中心
に合わせ
ておく

⑫



平らにもどす

カドをフチの
ところで折る

⑬

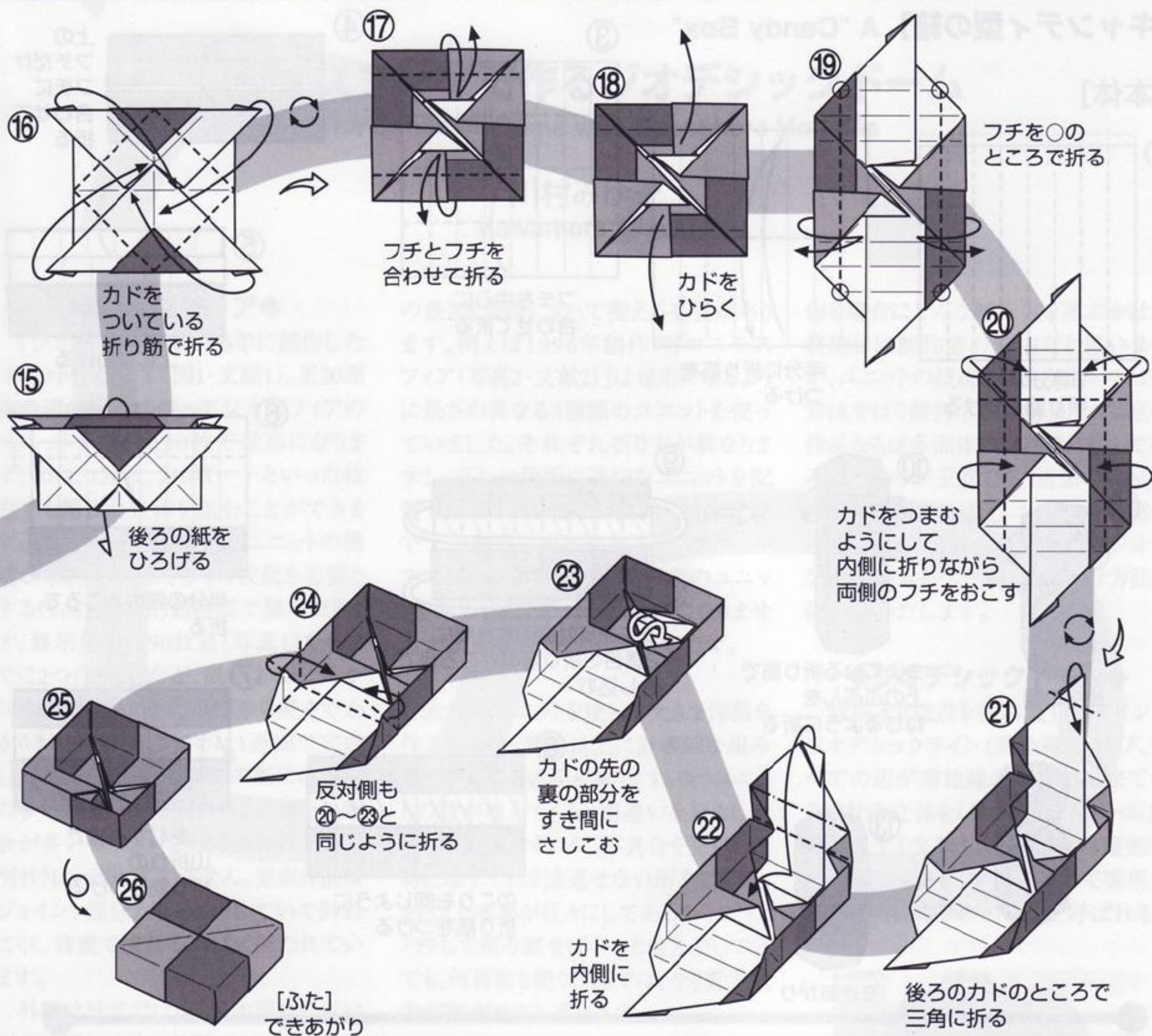


カドをフチの
ところで折る

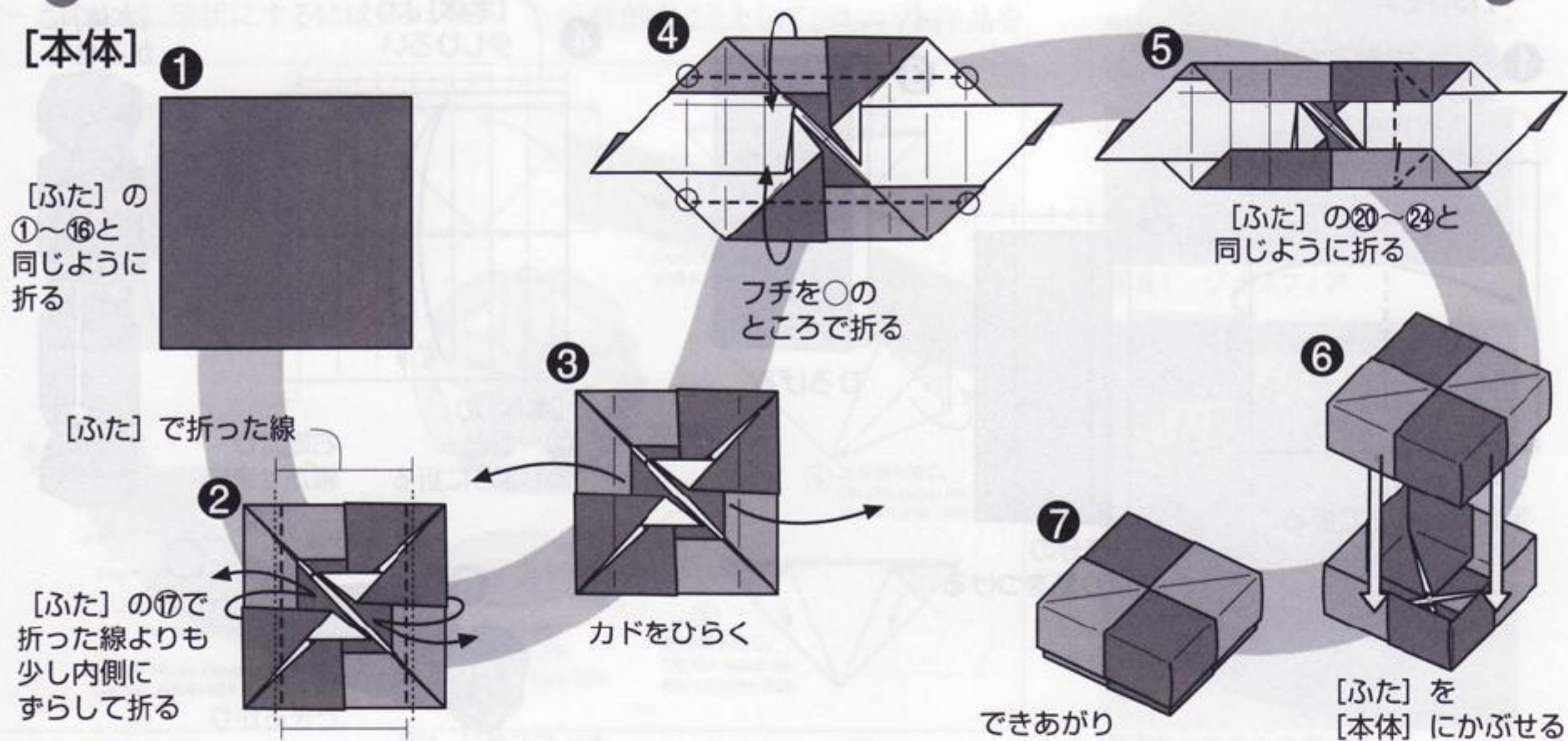
⑭



カドをフチの
ところで折る

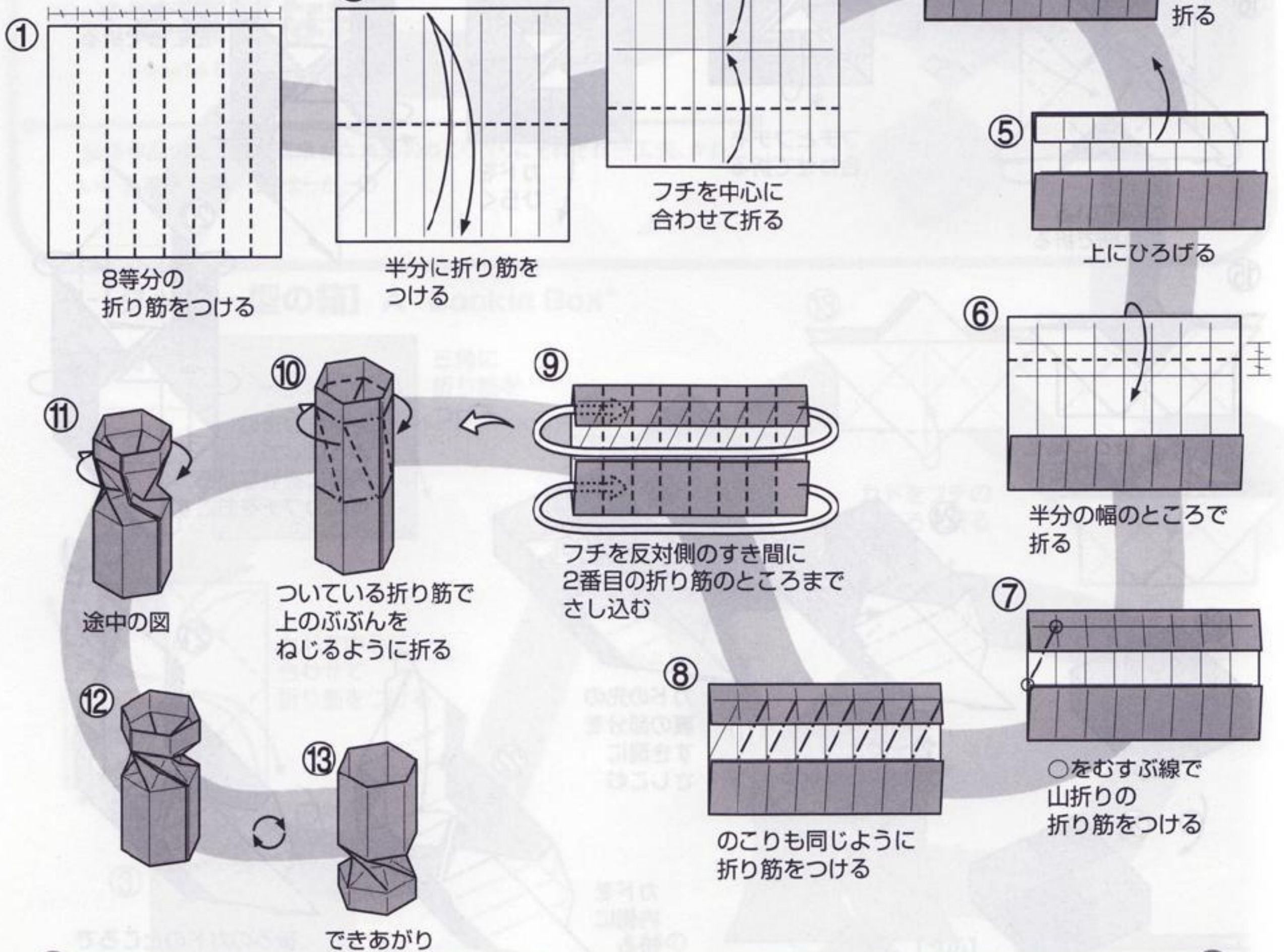


[本体]

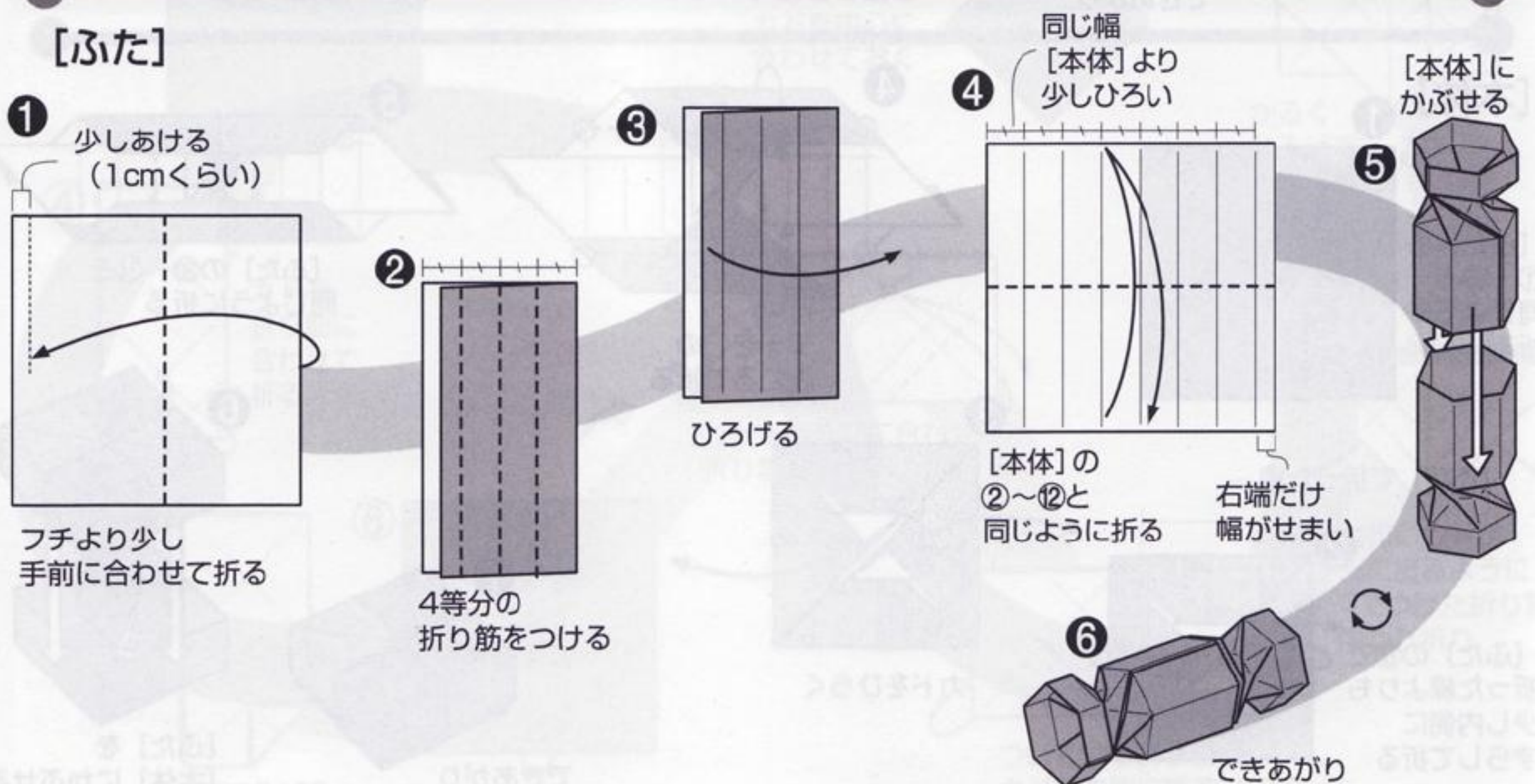


[キャンディ型の箱] A "Candy Box"

[本体]



[ふた]



ジオスフィアで作るジオデシックドーム

The Geodesic Dome with Geosphere Modules

川村みゆき

Kawamura Miyuki

◆ジオスフィア◆

「ジオスフィア」は2006年に創作したユニット作品です(図1・文献1)。正20面体の辺の配置に従ってジオスフィアのユニットを組むと30枚で球形になります。90枚、120枚、210枚……といった枚数でも閉じた立体を組むことができます。ジオスフィアの利点はユニットの構造が単純なことで、多くの枚数を必要とする作品も比較的短時間で製作できます。展示用の1890枚組(写真1)を今までに2つ作りましたが、紙を切るところから始めて最初のは朝から晩までかかりきりで3日間、2つめは1週間で完成しました。また、組み立ての際には枚数の多い作品でものり付けは必要ない場合が多いです。少なくとも1890枚組はのり付けは一切していません。完成作品はジョイント部分がしっかりしていて外れにくく、自重で潰れることなく保たれています。

外観は球状ではなく正20面体に近い形をしています。実際のジオデシックドームのように球状にするにはメッシュ

の長さを場所によって変える必要があります。例えば1996年創作の「コスモスフィア(写真2・文献2)」は球形になるように長さの異なる3種類のユニットを使っていました。それぞれ折り方が異なりますし、正しい場所に適切なユニットを配置するのに気を使うので、同じ1890枚組ですが製作に半年かかっています。一方のジオスフィアは全て同じ形のユニットを使用しますので、形は丸くはなりません。折るのも組むのも気が楽です。

大量のユニットを使って大きな作品を作る場合は、普段以上に計画的な組み立て方をする必要があります。扱うユニットの数が増えてくると間違いを起こしやすい上に気付くのが遅く、不具合を発見した時にはすでに引き返せない所まできてしまっている事が往々にしてあるからです。バラして組み直せばいいとは分かっていますが、何百枚も使う作品では、やり直す気力が削がれてしまいます。

一般的なこととして、ユニット作品を

作る場合にどんな組み方を選ぶかは最終的には制作者の自由だと思いますが、ユニットの技法と相性が良いのは通常はやはり幾何学的な構造です。立体作品ならば多面体の対称性に従って組み立てるのが王道であり近道でもあります。以下では、大量のユニットを一個の作品にまとめる方法の1つとしてジオデシックドームをベースにした設計方法を御紹介いたします。

◆ジオデシックドーム◆

球面上の2点を結ぶ最短のラインをジオデシックライン(測地線)と呼び、すべての辺が測地線の断片で出来ている球状の立体を「ジオデシックドーム」と呼びます(文献3)。アメリカの建築家バックミンスター・フラーによって実用化が進んだためフラードームと呼ばれるこ



写真1 ジオスフィア



写真2 コスモスフィア

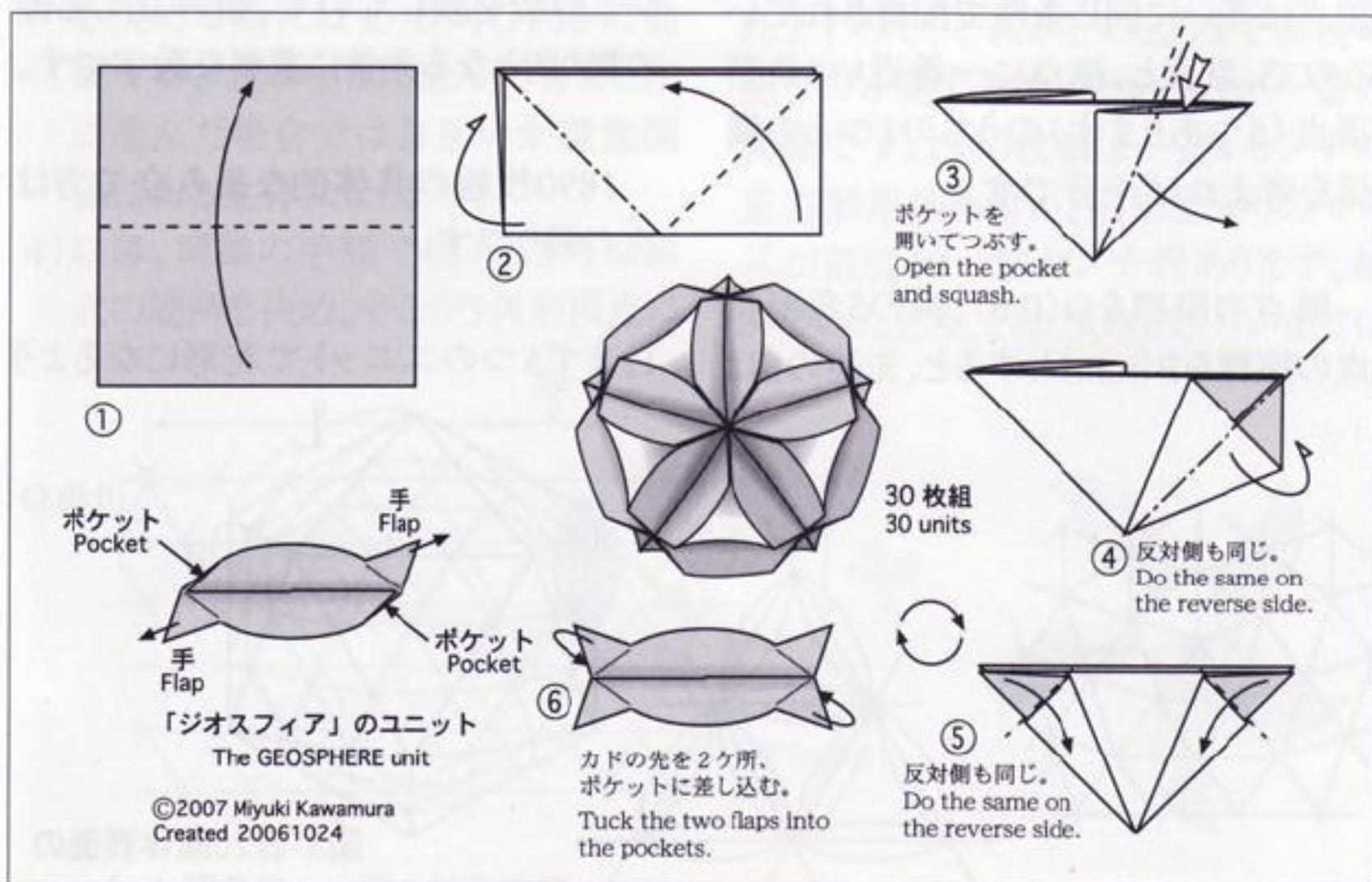


図1 ジオスフィア

ジオスフィアで作る ジオデシックドーム

The Geodesic Dome with
Geosphere Modules

川村みゆき
Kawamura Miyuki

ともあります。ジオデシックドームには表面の分割方法によっていくつか種類がありますが、ここでは正三角形に近い形に分割されている場合を扱うことにしましょう。この場合、立体の表面は三角形のメッシュで被われています。正三角形をただ敷き詰めただけだと平面になりますが、その中の1つの頂点を適当に取って、そこから放射状に出ている6本の辺のうちの1本を取り除いてから隙間を埋めるように左右のメッシュを引き寄せると、5つの三角形が笠状に集まった凸型の頂点に変わります。この頂点を「5角形頂点」と呼ぶことにしましょう(図2)。

5角形頂点はメッシュのどこにでも自由に作ることが出来ます。12個の5角形頂点を互いに対等な関係になるよう配置するとジオデシックドームと同じ対称性を持つ立体になります。この立体をジオスフィアのユニットで作るとすると、何個のユニットが必要でしょうか？ 以下で具体的な計算の方法を示します。

◆ジオデシックドームの辺の数◆

先程述べたように、これから作ろうとする立体の表面は三角形のメッシュで被われています(図3)。全体を正20面体と捉え、その一辺の長さをLとすると表面積は三角形の面積の公式を使って次の(1)式で計算できます。

$$\frac{1}{2} \cdot L \cdot \frac{\sqrt{3}}{2} L \cdot 20 = 5\sqrt{3}L^2$$

式(1)

さらに、メッシュを構成している小さな三角形の一辺をaとし、表面積を三角形メッシュ1つの面積で割ると(2)式のように全体のメッシュの数が分かります。

$$\frac{5\sqrt{3}L^2}{\frac{1}{2} \cdot a \cdot \frac{\sqrt{3}}{2} a} = 20 L^2/a^2$$

式(2)

図から分かる通りメッシュの1つの穴は3/2個のユニットでできているので、aを1とすると全体に必要なユニット数は(3)式のようにになります。

$$30 \cdot L^2$$

式(3)

具体的な数を知るためにはLの値を計算しないといけません。そこで、1つの5角形頂点を原点とする2次元の座標系をメッシュ上に導入します(図4)。計算を簡単にするため、n軸とm軸が60度の角度で交わっている斜交座標を使うことにしましょう。原点を含む全ての5角形頂点は互いに同じ条件で配置されているので、原点と、原点に一番近い5角形頂点(5つあります)のうちの1つとの関係を考えれば十分です。

原点の座標をO(0,0)、隣の5角形頂点の座標をP(n,m)とすると、先述のLは

ベクトルPの長さに対応します。ピタゴラスの定理を利用して式を整理すると(4)式、

$$L^2 = |P|^2 = (n)^2 + \left(\frac{\sqrt{3}}{2}m\right)^2 = (n^2 + nm + m^2)$$

式(4)

となり、必要なユニットの数を表す式は最終的に(5)式のような綺麗な形にまとまります。

$$30(n^2 + nm + m^2)$$

式(5)

自分でもここまでスッキリまとまるとは思っていなかったのが、結果が出たときは驚くと同時にとても嬉しかったです。

◆作品の製作◆

この結果を利用して実際の作品を作ること考えましょう。

まず始めにnとmに適当な整数をあてはめます。例えばn=6、m=3などです。これを先程の式に代入すると、全体に必要なユニット数は1890枚と計算できます。nとmは隣り合う5角形頂点間のメッシュの数を表していて、組み立てる際の拠り所となる非常に重要な数字です。

1890枚組の具体的な組み立て方は次の通りです。

1) まず5つのユニットで花形になるよう

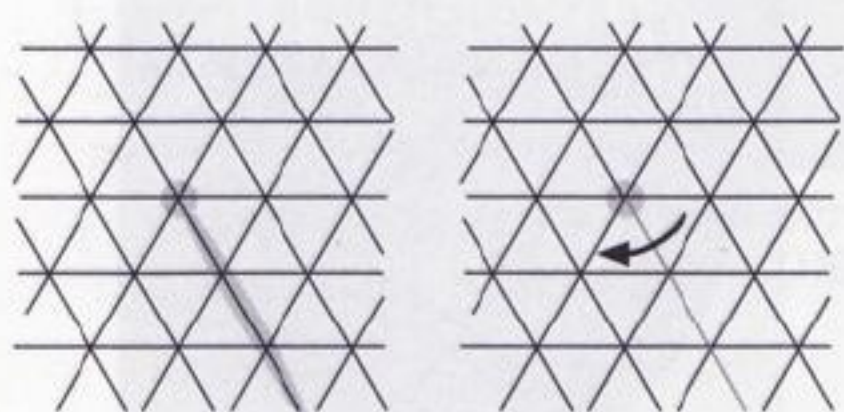


図2 5角形頂点

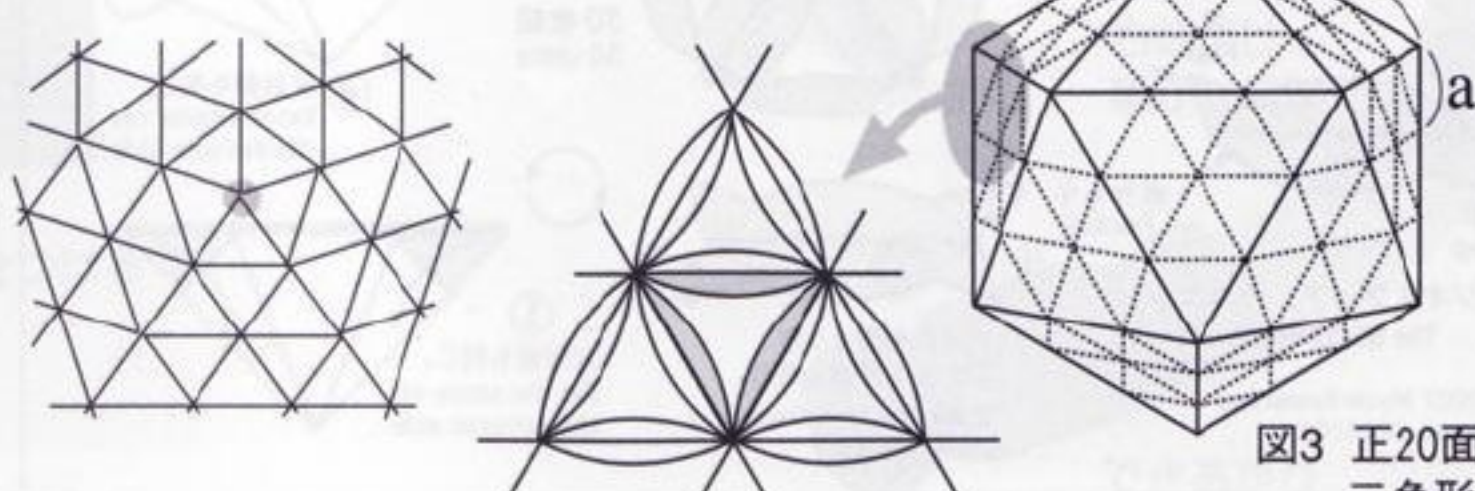


図3 正20面体表面の
三角形メッシュ

○川村みゆき(かわむら・みゆき)=
1970年生まれ。物理学修士(素粒子理論)。日本折紙学会評議員。



に組む(図5)。これが5角形頂点の形です。ここを原点としてメッシュを作っていきます。

2) 最初の5角形頂点以外の頂点はすべて6つのユニットが集まるように組んで、三角形のメッシュを作っていきます。外へ向かって笠状に大きくなっていきます。

3) ある程度大きくなったらメッシュの数を数えます。最初の5角形頂点の中心から放射状に外へ向かうラインの1つをまっすぐ辿ってユニットn個分だけ進みます。今の例では6ユニット分ですね。その点には今通ってきたラインと先へ続くラインの他に、左右にそれぞれ2方向ずつユニットが続いています。その中で左前方、または右前方に続くラインを選び、そこに乗り換えて今度はユニットm個分、今の例だと3ユニット分進みます。そうして到着した地点が2つめの5角形頂点を作るべき場所です。右と左とどちらを選んでも構いませんが、混ぜて使うことはできません。以降の10個の5角形頂点を決める際には必ず同じ向きに曲がってください。右に進んだ場合と左に進んだ場合ではお互いが鏡像関係にある立体になります。

4) 以降、同様の手順で次々に5角形頂点の場所を決め、そこが5角形頂点に

表1 ユニット数一覧

なるように
組み足してい
きます。

普通に
いけるのでは
ないかと予想して
いますが、挑戦してみたいのは1万枚超。場所と根気が最大の
問題です。

組み方から分かるように、nとmさえ決めておけば(そしてメッシュの目を数え間違えなければ)組み方に迷うことはありません。

◆これからの発展◆

個人的な興味としては、やはり巨大なものを作りたいです。

表1にユニット数を計算した表の一部をあげておきます。この表から分かることは、先述の1890枚組は無数にあるジオデシックドームの中の1つにすぎないということです。理論上は5000枚や1万枚を超える作品も可能なはずですが、もちろん、実際に製作しようとするあまりに大きなものは自重で潰れてしまうと思われるので、それがどの辺りまで実現可能なのか見てみたいというのが一番の興味です。1890枚組は一辺4センチの正方形用紙を使い、出来上がりのサイズが直径40~50センチ程あります。組んでみた感触では、3000枚くらいまでは

ジオスフィアは折り工程が少なく比較的短時間で大量に作ることができますし、のり付けが不要なので組み立てにもそれ程気をつかわなくて済みますので、ユニットビギナーの方にも取り組みやすい作品だと思います。小さなパーツを組み合わせて大きな構造を作る、ユニット作品の醍醐味を是非お楽しみください。

文献

- 1.『折紙探偵団』101号(2006)
- 2.『第10回折紙探偵団コンベンション折り図集』(2004)
- 3.『SPHERICAL MODELS』Magnus J. Wenninger (1979)

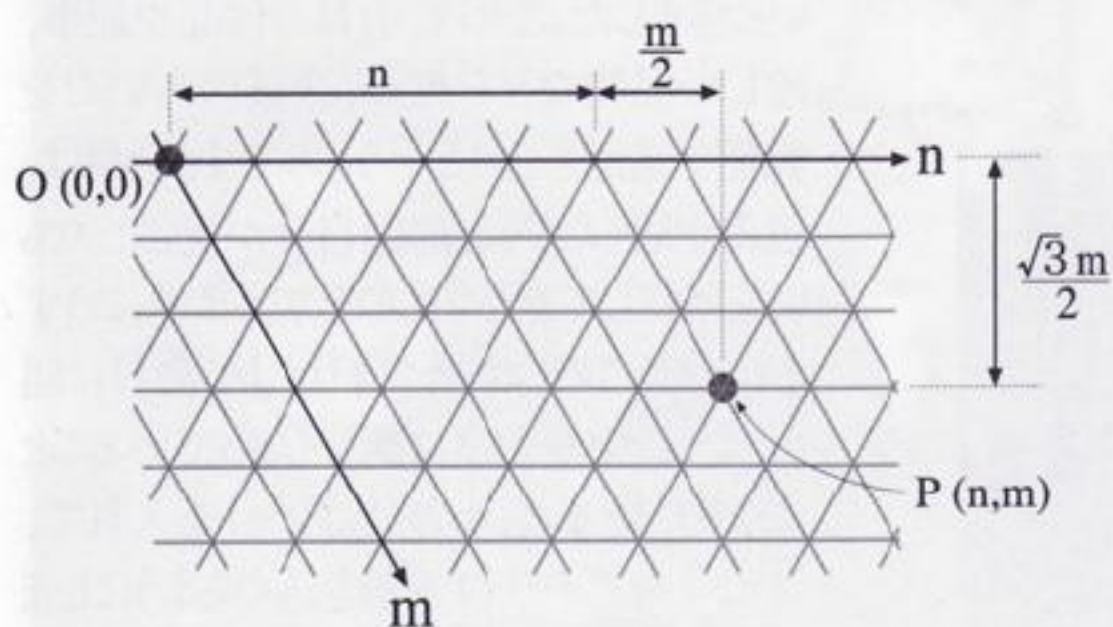


図4 斜交座標

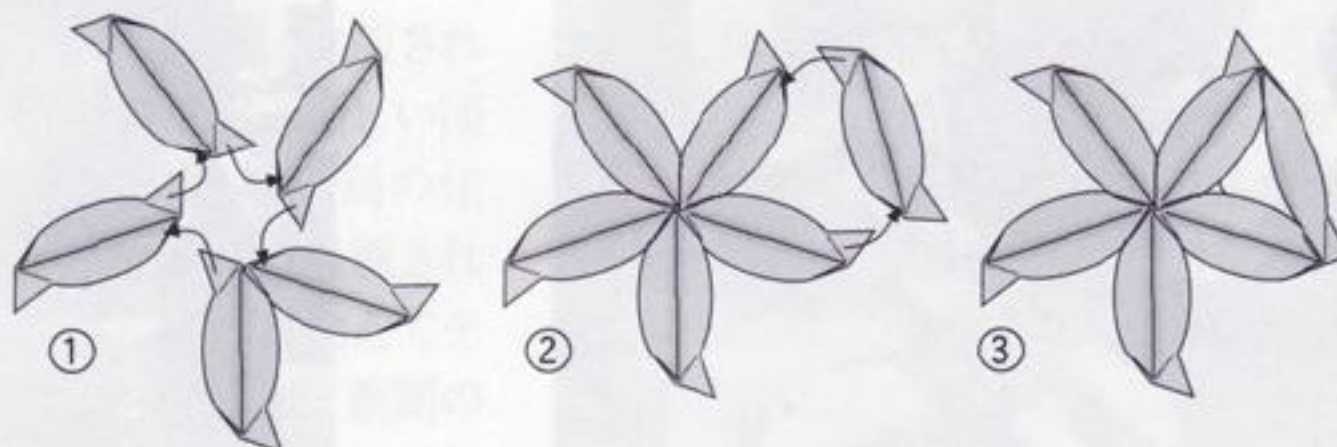


図5 5角形頂点の組み方

過去の折り紙に学ぶ 第3回

Learning from the Paperfolding of the Past

ジョーン・ホームウッド
Writer: Joan Homewood

訳: 羽鳥公士郎
Translator: Hatori Koshiro

British Origami Society (イギリス折紙協会) の成り立ち Birth of British Origami Society

この記事を書くにあたって、ジョン・スミスと、デビッド・リスターが執筆したBritish Origami Societyが制作した小冊子が大きな助けになりました。ここに謝辞を述べたいと思います。私は1969年以来BOSの会員なので、大まかなことは知っていましたが、両者が詳細な情報を提供してくれました。ただ、そのすべてをここに書こうとするなら、何ページあっても足りないのですが。

手品師のロバート・ハービンが入院中の妻を見舞ったとき、同室の空軍兵士が、マーガレット・キャンベルの『Paper Toy Making』を見て折り紙を折っていました。彼は以前から折り紙を知っていましたが、興味をひかれ、それ以来熱心に折り紙を探究するようになりました。

ある映画に手品師として出演したとき、ロバートはサイ・エンフィールドと出会いました。彼はロバートに、ポンド紙幣から折る孔雀の折り方を教え、折り紙の文献集を作成していたガーシオン・レグマンを紹介しました。するとガーシオンはロバートに吉澤章を紹介しました。1955年、ガーシオン・レグ

マンは、吉澤の作品を多数含む折り紙展を開きましたが、その同じ年、ロバートは、彼の手だけが出演するテレビ番組『Mr Left and Mr Right』で折り紙をとりあげました。おそらく、このときに折り紙が世界で初めてテレビに登場したのだと思います。

ロバートは折り紙の本を書こうと決心し、オーストラリア人のロルフ・ハリスが図を描いた『Paper Magic』が、1956年に出版されました。この本の折り図は遠近法を使って描かれていますが、中割折りや花卉折り、段折りなど、今日と同じ用語が使われています。ロバートの後の本と同様、これも日本を含む多くの国で翻訳され出版されました。

この本が、ニューヨークで長いあいだ折り紙に関心を持っていたリリアン・オッペンハイマーの手に渡りました。後にリリアンは、アメリカとイギリス両方の折り紙に対してもっとも大きな影響を与えることとなります。1957年、リリアンはロンドンに娘のロザリー・イブニンを訪れ、そこでロバート・ハービンと会いました。

1958年、リリアンはニューヨークタイムズの記事に紹介されると、その2日後にはテレビ番組に出演するよう依頼され、各局の番組に出演するようになりました。突然、origamiという言葉がニュースになり、問い合わせが押し寄せました。リリアンはOrigami Centerをニューヨークに設立し、そ

こに折り紙愛好家が集って折り紙を教えあうようになりました。それまで孤独に折っていた人たちが、リリアンやほかの人たちと連絡を取り合うようになったのです。リリアンは折り紙の本の販売を始め、折り紙愛好家はスペイン語や日本語の本などさまざまな本を入手できるようになりました。

1964年には、ロバート・ハービンが『Secrets of Origami』を、またサミュエル・ランドレットが『The Best of Origami』と『The Art of Origami』を出版しました。この3冊の本がいずれもニューヨークのOrigami Centerに言及していたため、イギリスの読者もリリアンに手紙を書き、温かい返事を受け取りました。その中の1人、アイリス・ウォーカーは、イギリスのほかの折り紙愛好家と連絡を取りたいと思い、リリアンに手紙を書いた人の住所を知らせてくれるよう頼みました。

アイリスはイギリスに折り紙団体を作りたいと考えていましたが、それを1人だけでできるという自信はありませんでした。ところが、彼女が連絡したなかの1人、シドニー・フレンチも、同じ考えを持っていました。シドニーは土木技師の仕事を引退していたので、願いを実現するだけの時間がありました。

アイリスが連絡をとった人たちは英国全土に散らばっていたため、シドニーは「折り紙郵便ポートフォリオ」というアイデアを思いつきました。これは、会員の作品や記事、珍しい品物などを集め、会員のあいだを郵便で巡回させるというものです。会員は、包みが届くたびに、前回自分が提供したものを回収して新しいものを加えます。こうすることで、この「ポートフォリオ」が会員に届くたびに、中身が常に新しくなっていることになります。また、小包にはノートを入れて、コメントやアイデアを書き込めるようにしました。シドニーは、リリアン・オッペンハイ



▲ロバート・ハービン 1970年代



▲1960年頃のリリアン・オッペンハイマー



○Joan Homewood(ジョーン・ホームウッド)は長女が5歳のときにロバート・ハービンとテレビ番組を見て、一緒に折り紙を始め、2006年から会長。子供が3人と孫が7人。

マーとアイリス・ウォーカーからイギリスの折り紙愛好家のリストを受け取り、1965年6月、そのすべてに提案書を送りました。また、ロバート・ハービンに助力を求めました。こうして、12人の会員からなる「Origami Portfolio Society」が発足しました。

1965年の11月ごろ、会の活動が始まってからまだ3か月しかたないうちに、ロザリー・イブニングがシドニーに、ロンドンにある自宅を集会所として提供してもよいと申し出、それをノートにも書きました。リアン・オッペンハイマーも、娘のロザリーを1966年4月に訪ねることになっていたもので、会員に手紙を書いて集会に招待しました。

その会には、リアンだけでなく、ロバート・ハービンも出席しました。彼はその場で、この団体の会長になることに同意しました。この集会には、ほかにもアイリス・ウォーカーやエリック・ケネウェイ、デビッド・リスターなどが参加していました。

会員の数は増えてきましたが、それにつれ

て問題も発生するようになり、ポートフォリオも2つ巡回するようになりました。1966年、デビッド・リスターが、会員の作品を1か所で恒久的に保存することを提案し、それとほぼ同時に、ジョン・スミスが、ポートフォリオのなかの折り図をコピーして会員に配布したらどうかと提案しました。これらの提案は、1967年4月、再びロザリーの自宅で開かれた集会で話し合われました。午後いっぱい折り紙を楽しんだのに加え、コレクションの設立が合意され、ジョン・スミスがそれを担当することになりました。

そこですぐにジョン・スミスとシドニー・フレンチが大まかな計画を立て始めました。ジョンは、この団体をもっと公式なものにするべきだという考えを表明し、短い規約を作成しました。このような提案は新しいものではありませんでした。会員が増えるにつれて、変化する必要が生じていたのです。

シドニーは、1967年10月28日にロンドンのラッセルホテルで開かれる会議に会員を招集しました。その場でBritish Origami Societyの設立が提案され、全会一致で可決されて、規約の草案が採択されました。ロバート・ハービンが会長に、シドニー・フレンチが議長に、ミック・ガイが事務局長にそれぞれ選出されました。また、イギリスにおける折り紙の育成に多大な貢献をした2人、リアン・オッペンハイマーとアルフレッド・ベストールが副会長に選ばれました。アルフレッドは長年にわたって子供向けの物語Rupert Annualに挿絵を描いており、いつも折り紙作品の折り図を加えていました。また、ジョン・スミスが司書に任命されました。もう1つ、この集会では新しい団体のシンボルマークを決めることが提案され、後にエリック・ケネウェイのものが採用されました。これは現在でも使われています。

ちょうどそのとき、ロバート・ハービンは新しい本『Teach Yourself Origami』の準備を進めており、まもなく出版されたときには、この新しい団体の情報と事務局の住所がその本に掲載されました。それに加えてテレビ番組や雑誌、新聞の記事によって、この団体は成長してゆきました。

そこで、会員たちに折り紙のニュースを伝えるための機関誌が必要だと思われるようになりました。当初はある若い人が雑誌を始めましたが、彼が続けられなくなって、アイリス・ウォーカーが編集長になりました。アイリスは1974年まで雑誌の制作を続け、そのころにアシスタントをしていたレイ・ボルトが編集長を受け継ぎました。

集会は1969年までロザリーの自宅で続けられましたが、会員の数が増えたので、別の会場が必要となりました。1972年まではウィーンカフェに集まり、その後、コンベンションを年に2回、4月と9月に開くようになりました。海外からも多くの折り紙作家が参加していますが、そのなかで1人だけ挙げるとすれば、吉澤章先生です。先生は1972年10月にヨーロッパ訪問の一環として訪れ、その後さらに2度来英しました。会員たちは、先生から折り紙を習ったり折り紙に対する考え方を聞いたりして、感激していました。

私たちはまた、全英各地で地方の例会を開くことを奨励しています。

British Origami Societyはボランティアで運営されています。献身的な人々、特に会計、編集、事務の担当者が多くの時間を割いています。私も11年間編集長をしていたので、この仕事がどれだけ大変かはよく分かります。私はコンピュータが使われる前に編集長になり、雑誌をコンピュータ時代に対応させました。コンピュータというのは物事をすばやくこなせるようにすることになっていますが、それを信じてはいけません。いずれにせよ、これは人生でもっとも楽しい時間でした。折り紙界で起きていることすべての最先端に身を置くことができたからです。今では雑誌が郵便受けに届くのを待たなければならなくなりましたが、インターネットもよく見えています。

エリック・ケネウェイからデイブ・ブリルまで、長年にわたって私たちが輩出したすばらしい折り紙作家たちについてお話をすれば、何年でも話し続けることができますが、彼らのことは皆さんも聞いたことがあるでしょうし、会ったことのある方も多いでしょう。折り紙がこれほどまで様々な方向に発展してきたのを、長年にわたって見続けているのは、とても興味深いことです。

写真提供:ロビン・メイシー氏(オッペンハイマー氏の写真のみホームウッド氏提供)



▲アリス・グレイとアルフレッド・ベストール 1981年

折紙図書館の本棚から

From the Bookshelves of the JOAS Library

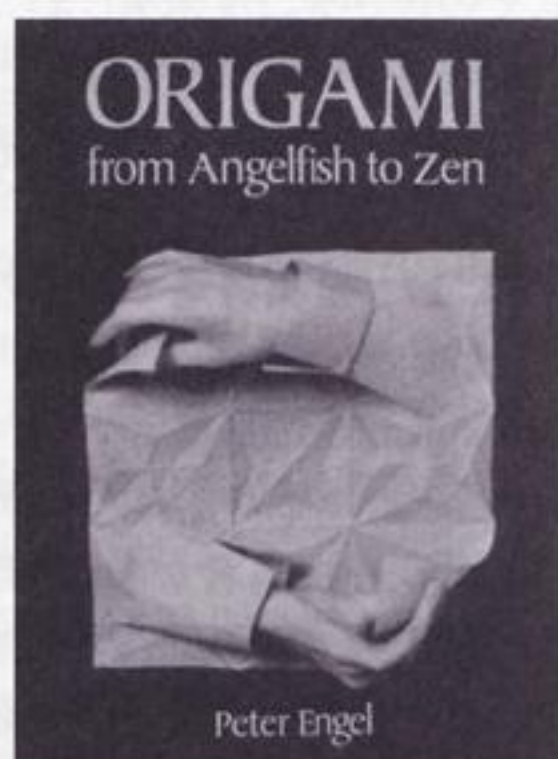
羽鳥公士郎 Hatori Koshiro

この連載では、折紙学会図書館に所蔵されている資料の中から、興味深いものを選んでご紹介しています。折紙図書館の蔵書は、折紙探偵団ホームページから検索できます。詳しくは、<http://www.origami.gr.jp/Libra/>にアクセスしてください。

3冊目『Origami from Angelfish to Zen』ピーター・エンゲル著

"Origami from Angelfish to Zen" by Peter Engel

この本は、折り紙の本としては変わっています。全体でおよそ250ページほどある大著ですが、折り紙作品の折り方を説明した、いわゆる折り図は、はじめから3分の1以上が過ぎたところではじめて現れます。そこまでのおよそ90ページにわたって、ピーター・エンゲルは、折り紙に関するあらゆることを語ろうとしています。



▲『Origami from Angelfish to Zen』表紙

この本はもともと『Folding the Universe』という題名で、1989年にVintage Booksから出版されました。その後1994年に、出版元がDoverに変わって現在の題名で出版されました。Doverは出版した本を決して絶版にしない出版社として知られており、折り紙の本も多数出版していますが、折り紙関連の本には題名に「origami」という単語を含めるように要求するようで、そのために再版にあたって書名が変わっています。

『Folding the Universe』という題名は、文字通り訳せば「宇宙を折る」ですから、森羅万象を折ってみせるというエンゲルの意気込みが感じられます。『Origami from Angelfish to Zen』にしても、AからZまでということですから、やはりこの世のすべてを折り紙で表現するという意味が込められています。

この本の前半3分の1、折り紙に関する読み物の部分は、大きく2つに分かれています。前半部は「Crossing the Divide(境界を跨ぐ)」と題されていますが、これはエッシャーの言葉から引用したものです。

1936年、エッシャーはアルハンブラを訪れ、イスラム美術を研究します。イスラム教では偶像崇拝が禁止されているため、イスラム美術では抽象的な表現が発達しました。エッシャーは、幾何学的なモザイク模様に感銘を受けながら、抽象と具象とのあいだの境界を跨いで、多角形の敷き詰めと具象表現とを組み合わせた作品を多く制作しました。

エンゲルは、折り紙もやはり抽象と具象とのあいだの境界を跨ぐものだと考えています。彼にとって、折り紙の楽しみとは、幾何学的な形をした紙を折ってできた渾沌とした形状の中に、具体的なものの形を見いだすことなのです。これは西川誠司の「見立て」論とも通じる考えだと言えると思います。

エンゲルは、聖書をもじって「はじめに正方形ありき」と書いています。一枚の正方形の紙を切らずに折るという、いわゆる不切正方形一枚折りの信条を述べたものと言っていいでしょう。もっとも、この本には長方形から折る作品もいくつか含まれていますが、折り紙作品を創作する上で、幾何学を道具として展開図から基本形を作るという考え方が明確に述べられ、実践されていることが注目されます。

その点で、この本は前川淳の『ビバ! おりがみ』(1983年)と極めてよく似ています。出版年こそ『ビバ! おりがみ』の方が数年早いですが、エンゲルは前川と独立に、現在の折り紙設計につながる折り紙創作法の基礎を切り開きました。その意味で、この本は欧米における『ビバ! おりがみ』であるといえます。

エンゲルは、4つの伝統的な基本形、鳳型基本形、魚の基本形、鶴の基本形、蛙の基本形の展開図に着目します。すると、鳳型基本形の半分が基本単位となっていることが分かります。このように、従来からの基本形を展開図という観点から分析し、それをもとに新しい基本形を作るという創作法は、まさに『ビバ! おりがみ』と同じです。

伝統的な基本形を分析したところで、エンゲルは話題を歴史に転じます。折り紙の

歴史についてエンゲルは文献をよく調べて書いていますし、吉澤章との会話を収録した部分は吉澤の折り紙思想を伝えるという点で貴重な資料ですが、現在の視点から見ると、残念ながら不適切な記述が目立ちます。「折り紙は1世紀か2世紀ごろに中国で始まった」という説や、レオナルド・ダ・ビンチが折り紙をしていたという話などが書かれていますが、これらは、今日では全く根拠のないものとして退けられています。

ほかにも、『千羽鶴折形』が「How to Fold One Thousand Cranes」と訳されているなど、不適切な記述を挙げればきりがありません。当時の折り紙史の研究がまだ本格的になっていなかったため、仕方のない部分もあります。しかし、エンゲル自身にも、本来折り紙と関係ないものまで無理やり折り紙に引きつけるという態度が見られます。安倍晴明が紙を鷲に変える様子を描いた葛飾北斎の漫画や、ペルシャ語で書かれた幾何学研究のノートなどの図版が掲載されていますが、どちらもよく見れば紙を折っているわけではないことは明らかです。

このような態度は、折り紙の歴史を研究する上では不適切ですが、折り紙作品を創作する上では大いに役立ちます。本書第2部の「The Floating Square(浮かぶ正方形)」では、さまざまなことが折り紙の観点から述べられています。

エンゲルはもともと、マーティン・ガードナーの有名な数学パズルのコラムを熱心に読んでいたのですが、同時に自分独自の新しいことを創造したいと考えていたそうです。しかし、数学パズルの分野で新しいことを成し遂げるというのは難しい。そんなときに折り紙と出会い、創作を始めます。

エンゲルは当初伝統的な基本形を使って創作をしていましたが、すぐに行き詰まります。しかしそのとき、うまくできた作品は、そうでないものに比べて、展開図がすっきりとしていて美しいことに気がつきます。そこでエンゲルは、自然の中にも同じような幾何学が現れていることに目を向けます。

○羽鳥公士郎(はとり・こうしろう)=日本折紙学会評議員・図書館担当。主に図書の管理・検索システムを構築している。本職はウェブディベロッパ/翻訳家。



なかでも、一見すると複雑な形が、極めて単純な規則の繰り返しから生じていることが強調されています。このような図形は、数学的にはフラクタルと呼ばれます。本書では、10ページほどを割いてフラクタルが解説されています。

単純な要素が組み合わさって複雑なものができるもう1つの例として、エンゲルは音楽を挙げます。音楽は1つ1つの音からできています。一方、折り紙も1つ1つの山折りや谷折りからできています。音がいくつか集まると、リズムやメロディが生まれます。折り線がいくつか集まると、中割折りや鶴の基本形ができます。そして、それらを組み合わせることによって作品ができます。

ここでエンゲルは、コンピュータで作曲をしようとする試みがあることを紹介して、折り紙の創作をコンピュータで行う可能性について考察しています。第1段階は、1つ1つの手順をコンピュータにも分かるように記述するということになるでしょう。ここでは、ジョン・スミスの折り紙手順言語(Origami Instruction Language)が紹介されています。

第2段階は、単純な要素からパターンを作り出すということになります。エンゲルは、記憶させた折り方をランダムに組み合わせるという方法を考えますが、後にロバート・ラングが開発したTreeMakerはさしずめこの段階にあたるでしょう。

第3段階では、生成されたパターンの中からよいものを選ばなければなりません。ここでは1/4ゆらぎなどが紹介されていますが、結論としては、音楽にせよ折り紙にせよ、コンピュータで要素を組み合わせただけでは無味乾燥な「生の素材」しかできず、それを作品に仕上げるのには人間の介入が必要だと述べています。還元主義から全体論へ「境界を跨ぐ」必要があるということです。

では、創作に必要な人間の営みとは、具体的には何でしょうか。エンゲルは、ジャック・アダマールやアンリ・

ポアンカレなど数学者の議論を引用しながら、ひらめきが必要だと述べています。もちろん、ひらめきは何もないところから生まれるわけではありません。要素の組み合わせをさまざまに試してみる日々の努力が前提となります。そしてそれをいったん意識の外に置くことによって、あるときにひらめきが訪れます。

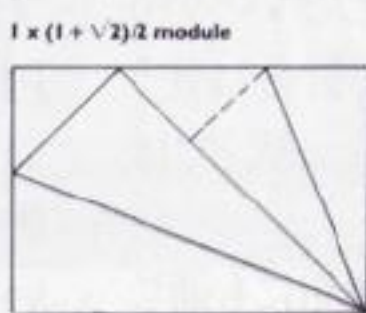
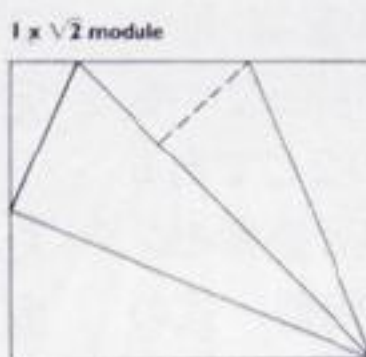
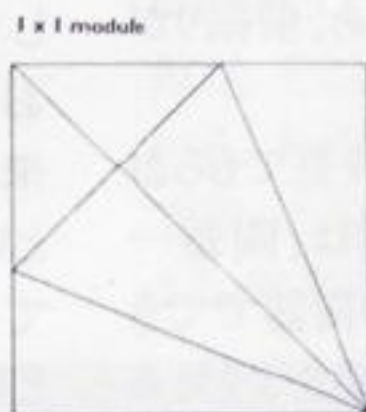
エンゲルの「ガラガラヘビ」がまさにそのように創作されました。頭の中の空間に突然正方形の紙が浮かび、それが形になるのです。エンゲルは、これがある程度普遍的であることを示すため、アメリカの主要な折り紙作家にアンケートをしています。ステファン・ワイス、アリス・グレイ、ニール・イライアス、ロバート・ラング、デビッド・シャルが異口同音に、創作の大きな部分は無意識の状態、ときには夢の中で、行われると答えています。

以上の議論をふまえて、いよいよエンゲルの「設計」技法が説明されます。先に基本単位として抽出された鳳型基本形の半分は、さらに2種類の直角三角形に分割できます。二等辺直角三角形と、1つの角が

22.5度の直角三角形です。エンゲルは、この2種類の三角形を組み合わせて、1:1、1:√2、1:(1+√2)/2の3種類の長方形を作り、これを「モジュール」と呼びます。

これをレプタイル風に組み合わせて、「カンガルー」、「タコ」、「ワニ」、「蝶」などの作品が作られています。また、意識されているかどうかは分かりませんが、「イカ」や「サソリ」には、前川作品に多く現れる、いわゆる第二次三角形も見られます。さらに、直角をはさむ2辺の比が1:√3の直角三角形がレプ3かつレプ4のタイルであることから、15度系列を使った作品(「トナカイ」と「ドル紙幣のカニ」)が含まれていることも注目されます。

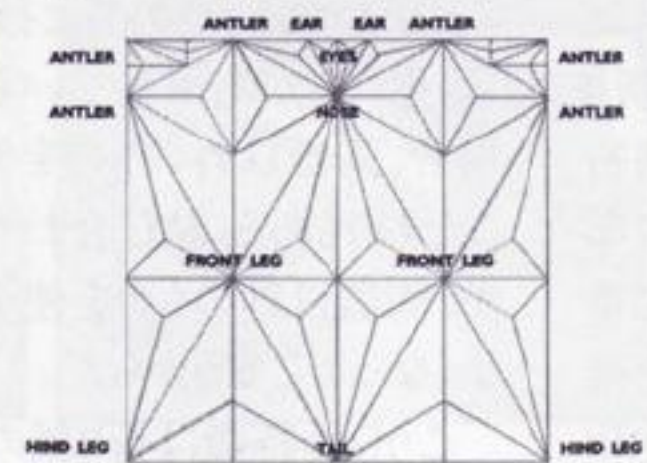
この本には24作品の折り図が掲載されていますが、そのすべてについて、基本形の展開図も掲載されています。その点でも、本書と「ビバ!おりがみ」はよく似ています。あまりに似ているので、エンゲル自身、前川に会ったときのことを「姿見を通り抜けて」と表現しているほどです。数年間の隔たりがあるとはいえ、洋の東西で2人の人物が全く独立に同じような本を出版したということには、何か不思議な感覚を覚えます。



▲3種類のモジュール



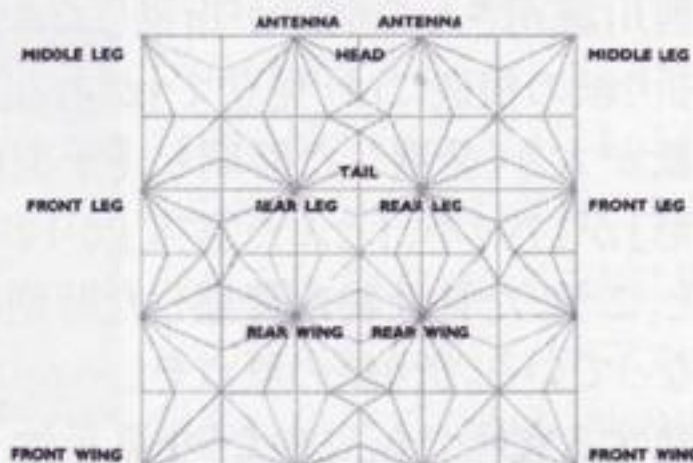
▲「トナカイ」



▲「トナカイ」の展開図



▲「蝶」



▲「蝶」の展開図

折紙散歩

Origami-Sampo
to Unexpected Directions

前川 淳

Maekawa Jun



第3回 知られざる出雲のおもかげ

Glimpses of Unfamiliar Izumo

それは魚の干物である。タラの開きの前に、トビウオの開きが三つ垂直に立っている。これが、ぱっと見には、仏像(三尊仏)に見える。タラは光背、トビウオが仏体で、貝の頭がついている。たなびく天衣(てんえ)はスルメの脚で、台座は吸物椀である。名付けて『とんだ霊宝』という見世物で、江戸後期に評判となった。本当に評判になったのかどうか信じがたいところもあるが、これを仔細に記した引札(チラシ)が残っている。当時のひとがこれをどのように楽しんだのかもわからないが、文字通り生臭いこの仏像を、ふつうの仏像のように拝んで、その拝むという行為を笑ったのであろう。じつにもってばかばかしい。むろん、ここでの「ばかばかしい」は、ほめ言葉である。

江戸の中期から後期に、珍獣、人形、軽業などの数多くの見世物が流行った。その中に、細工見世物という分野があった。貝、陶器、竹、羽、桶など、ありとあらゆる素材が使われ、その多くに「とんだ霊宝」に見られるような、いわゆる「見立て」の趣向があった。(参考文献:『江戸の見世物』(川添裕 著))

このような話から始めるのは、言うまでもなく、それが折り紙に通じるからである。西川誠司さんの炯眼が指摘したように、折り紙の根底には「見立て」がある。折り紙が大きく発展した時期も、『千羽鶴折形』が1797年、『とんだ霊宝』が1777年と、こうした見世物が隆盛した時期に重なっている。折り紙の原点をしっかりと確認する意味でも、このような見世物文化の研究は欠かせないのである! なあーん

でもっともらしいことを書いているけれど、つまりは、理屈を超えて面白いのだ。笑ってしまうのである。

そして、現代もまだまだ江戸と地続きである。その証拠に、こうした見立てをテーマに打ち出した民俗行事が、わたしの知る限り、現在でもふたつ続いている。富山県高岡市福岡地区の「つくりもんまつり」と、島根県出雲市平田地区の「一式飾り」だ。起源はともに細工見世物が流行った頃で、200年を超える歴史があるということになる。富山・高岡のつくりもんまつりは、おもに野菜を使って人物や情景をつくる。出雲・平田の一式飾りも同じ趣向だが、こちらは陶器などの器物を使う。

というわけで、7月末に、かねてより念願だった一式飾りを見てきたので、その報告を中心に、今回は、「折紙散歩・島根篇」という次第である。…ああ、前振りが長かった。

まずは、一式飾りの名作を見てもらおう。写真の「土俵入り」は、陶器一式、つまり、すべてが既製の陶器でできている。力士のつけた下がりをよく見ると、ひっくり返った稲荷の狐の置物、足や手は亀の置物、太刀持ちが持っている太刀は、徳利をつなげたものなどであることがわかる。意外性と技術と造形センス。それらがあふれている。陶器一式の場合、陶器以外のものを使わないというこだわりもある。結び合わせる針金は使うが、陶器以外のものを使うと「一式」ではなくなってしまうからだ。

こうした特徴は折り紙の理想にも通じる。折り紙は、折りたたまれた平面という



平田一式飾り 陶器一式 土俵入り
Hirata Isshiki Kazari : "Sumo Wrestlers"
Made of Crockery

幾何学的に制限されたかたちがなにかに見える、というところから始まった遊びである(と断言してしまおう)。近年ではきわめてリアルな造形もあるが、その根底には、かたちの意外な結びつき、すなわち「見立ての妙」というものがある(と断言してしまおう)。西川誠司さんが折り紙における見立ての重要性を指摘して以来、わたしは、折り紙を、「見立てと幾何学というふたつの焦点を持った楕円」としてイメージするようになっていく。見立てと幾何学というふたつの焦点がぴたりとひとつに重なったとき、それは円になり、完全な作品となるのだ。

見立ては、「比喩」とも言い換えられる。たとえば、見立てのかたまりといえる日本庭園の砂と石は、大海と島の隠喩(メタファー)である。また、上で述べた円や楕円といった表現も比喩である。見立てという言葉が示すものは、きわめて日本的・俳諧的に思えるが、それを比喩と言い換えると、その根本の感覚は洋の東西を問わないものであることがわかる。じっ

This time, I had visited and found things related to origami in the Shimane prefecture in the north-western part of Japan.

a. Isshiki-Kazari (Set Exhibits): The traditional customs since more than 200 years ago, Isshiki-Kazari is a series of displayed thematic exhibits with only using crockeries, japans, and so on. This type of coherence is reminiscent of origami which only uses sheets of paper.

b. Izumo Dome Stadium: A huge dome construct with origami-like structures.

c. Ceramic Cocotte: We can find exhibits of cocotte (pajarita) by Émile Gallé in an art museum in the City of Matsue.

d. Votive Tablets of Izumo Taisha Shrine: Visitors to the shrine writes down their wishes on them, on which a knotted letter is painted.



表題は、『知られざる日本の面影』(ラフカディオ・ハーン)から。山陰を訪れたのは、3回目。松江はいい街だなあ。

○まえかわ・じゅん 折紙創作・研究家。折鶴モノのコレクター。東京生まれで東京在住だが、1年の約1/3は、天文台の仕事のため長野・山梨で過ごす。好きなもの: 阪神タイガース、星空、書店、喫茶店、幾何学的調和。

さい、つくりもんまつの絵画版とでもいうべき、16世紀のイタリア人画家もいる。果物や野菜などを寄せ集めた奇妙な騙し絵風の肖像画ばかりを描いた、ジュゼッペ・アルチンボルドである。意外な結びつきの発見は、人間の認識の基本のひとつなのである(と断言してしまおう)。と、まあ、なんだか大仰な話になってきたが、とにかく、一式飾りは、折紙者であるわたしの琴線に触れまくる。琴線がビヨンビオンと鳴り響いて、うるさいくらいである。自転車部品一式による「伊勢海老」。すばらしい。陶器一式の「昇り龍」。すばらしい。

平田は、さきの町村市合併で出雲市の一部になったが、大きくもなく小さくもない市だ。そんな共同体が、200年以上、連綿とこうした伝統行事を続けている。こうしたことこそが文化の豊かさなのだ(と断言してしまおう)。



平田一式飾り 昇り龍
Hirata Isshiki Kazari: "Rising Dragon"
Made of Crockery

一式飾りの本質は、きわめて「折り紙的」とであると確信しているが、もうすこし折り紙らしい話題がないと『折紙散歩』としては看板倒れになるので、そうした話題も紹介しておこう。

まずは、松江北堀美術館である。松江城の堀ばたに建つ、小さな心地よい美術館だ。そこに「折り紙モノ」が収蔵されている。ネットの掲示板に寄せられた情報で知ったもので、エミール・ガレの工房による、陶器のココット(パハリータ)、つまり、

だまし舟の折り変えによる小鳥である。これは、江戸東京博物館でのアールヌーヴォー展でも展示されていたもので、できがすばらしくよい。じっさいに折ったような感じと陶器の優しさが調和し、絵付けも繊細だ。大きさは、20cmぐらいいで、大き過ぎず小さ過ぎず、レプリカをつくれれば、折紙者の多くが欲しがるのではないだろうか。なお、アールヌーヴォー(19世紀末から20世紀初頭の、装飾的な建築・工芸・美術の様式。ガレ、ラリック、ミュシャなど)は、日本の浮世絵などの影響が大きいため、あるカタログでは、これを日本趣味のひとつとしていたが、それは解説を書いたひとの間違いで、ココット(パハリータ)は西洋伝承の折り紙である。

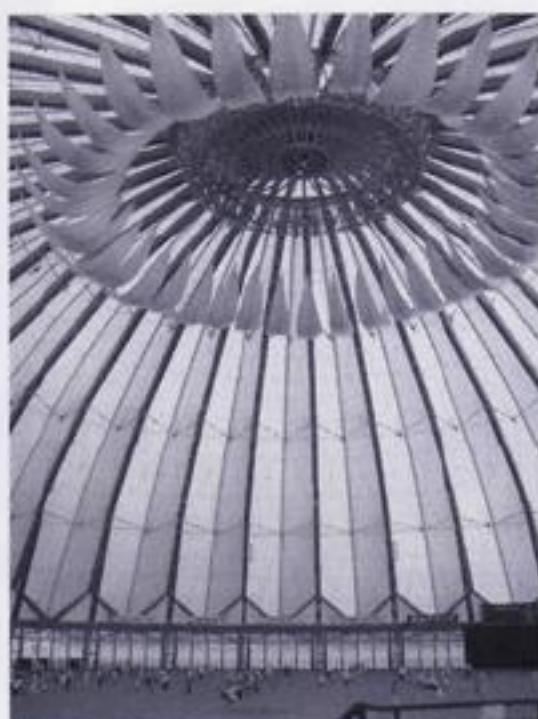
次は、出雲ドーム。これは、一種の折り紙建築である。内部で野球をすることが可能な巨大な空間であるにもかかわらず、構造材が木であるというのがちょっと驚きだ。言ってみれば、ハコモノ公共事業のひとつなのだろうが、巨大な蛇腹折り構造は、折紙者としては見飽きない眺めだった。

出雲大社の結び文の絵馬にも触れておこう。大社では、神無月(出雲では神在月)に八百万の神々が集まって縁結びの会議をするらしい。この号の次の号が出るころには、これらの絵馬が会議の資料になるのだろう。なお、結ぶことに男女の縁を見るのも、メタファーであり、見立てである。世の中は見立てに満ちている。

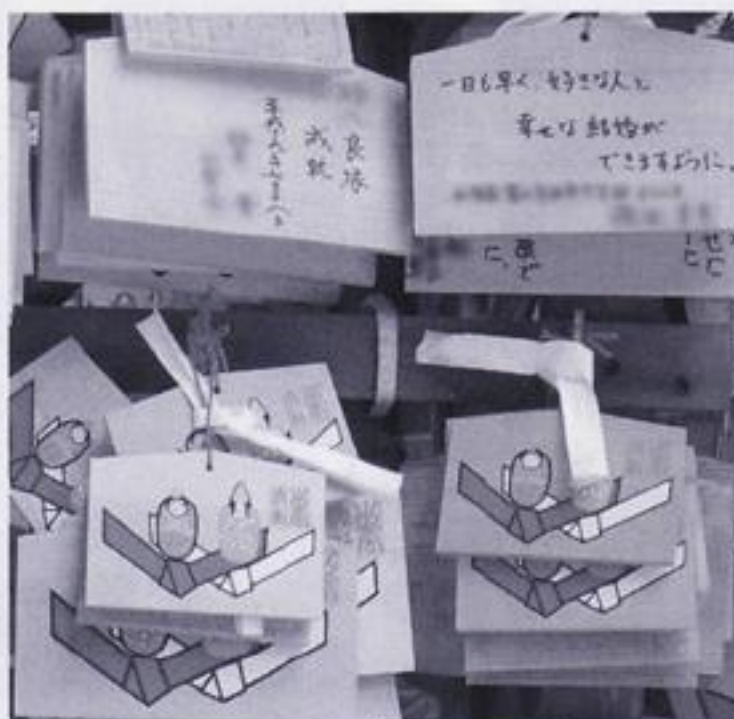


平田一式飾り 自転車部品一式
伊勢海老

Hirata Isshiki Kazari: "Lobster" 出雲ドーム
Made of Bicycle Parts



Izumo Dome Stadium



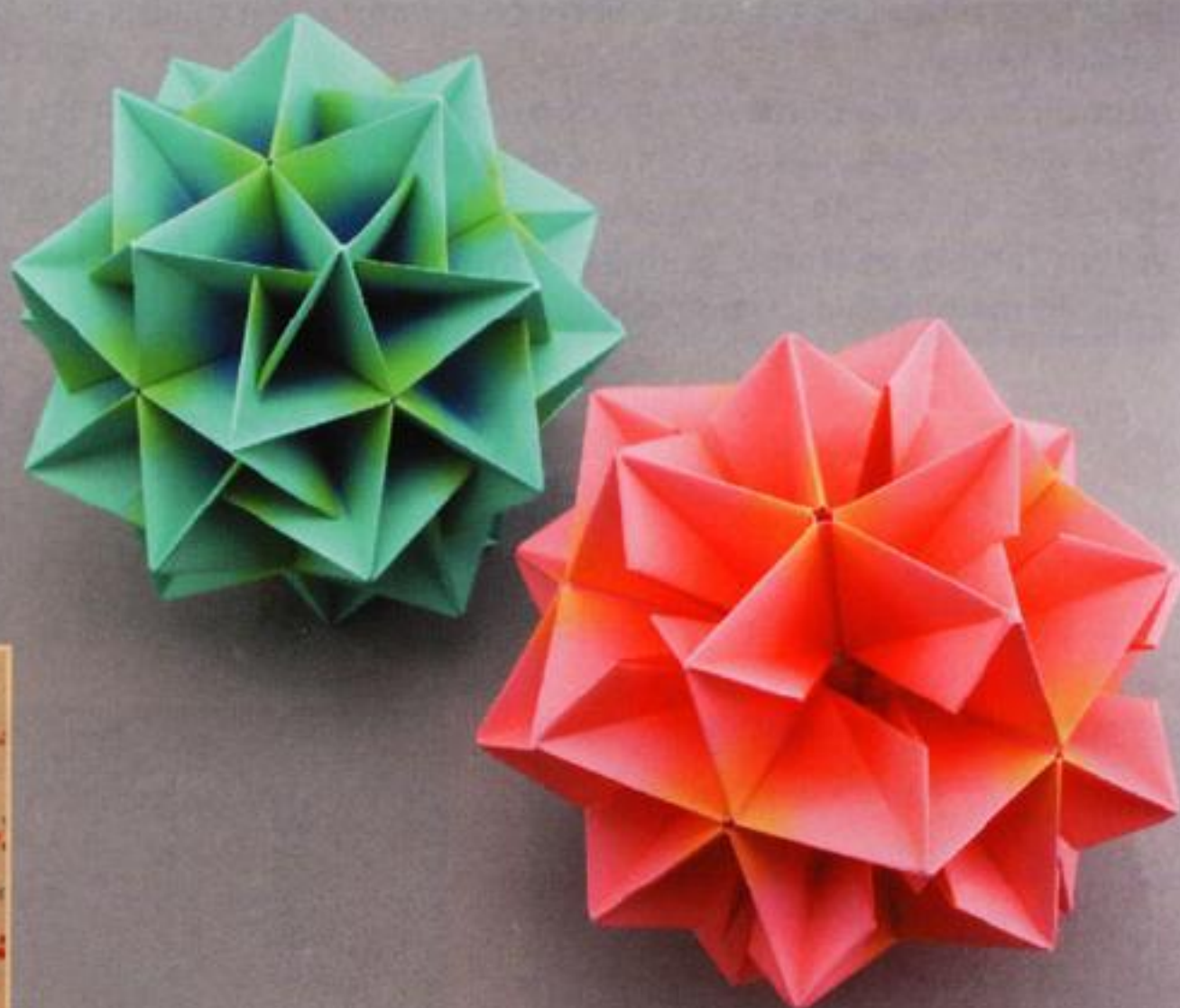
出雲大社の絵馬
Votive Tablets of Izumo Taisha Shrine

■夏のコンベンションも無事終了、凄まじかった暑さも少しずつやわらいでいます。
ヒートアップしていた時に見落としていたことを、再発見する瞬間も多いのでは？

「寒桜・標準タイプ」「寒桜・中割りタイプ」
作：布施知子 (P.4)

Chinese Primrose (A Standard Type)
Chinese Primrose (A Reverse Fold Type) :
Fuse Tomoko

■伝承の「にそう舟」から華麗なる変身を遂げたユニットパーツ。部品ひとつひとつのシンプルな構造からは思いもよらない、完成した瞬間の意外性に圧倒されます。ユニットの醍醐味を存分に味わうことができる作品です。



「クッキー型の箱」「キャンディー型の箱」
作：やまぐち真 (P.8)

A "Cookie Box" A "Candy Box":
Yamaguchi Makoto (P.8)

■「ものを包む」ことの楽しさを、常に新たな切り口で演出してくれる山口氏のパッケージ。ふた部分の大きさの調整感覚をつかめるようになると、スムーズな組み上がりが実現します。開け閉めの動き自体もやみつきになりそう？

おりがみはうす賞
Origami House Award

「ボディビルダー」作：小松英夫
Bodybuilder: Komatsu Hideo

本作は、私にとって初めて本格的に取り組んだ蛇腹作品です(44等分)。おりがみはうす賞の本来の主旨からは少し外れているかもしれない本作に賞をいただいて恐縮しています。ありがとうございました。



第1回JOAS創作折り紙コンテスト受賞作品 The First JOAS Origami Model Design Contest Awardees

■以下、受賞者からのコメントと併せて掲載します。

JOAS賞・人気投票賞
JOAS Award, Popularity Award

「カベ」作：堀口直人
Bullpen Catcher: Horiguchi Naoto

投票ありがとうございます。
次は誰が作ったかわからないようなものを応募できるよう、頑張ります。



「イグアナ」作：ベン・マラー
Iguana: Ben Muller



第11回吉野一生基金招待者作品より Models by the 11th Yoshino Issei Fund Visitors

■今年の招待者は技巧派ぞろい。とどまるところを知らない新世代エネルギーを見せつけてくれたMuller氏、そして昆虫作品を中心に徹底的な微細加工が魅力のSirgo氏。会場に集結した最先端の作品群をご覧ください。



「ウデムシ」作：マヌエル・シルゴ
Amblypygi: Manuel Sirgo



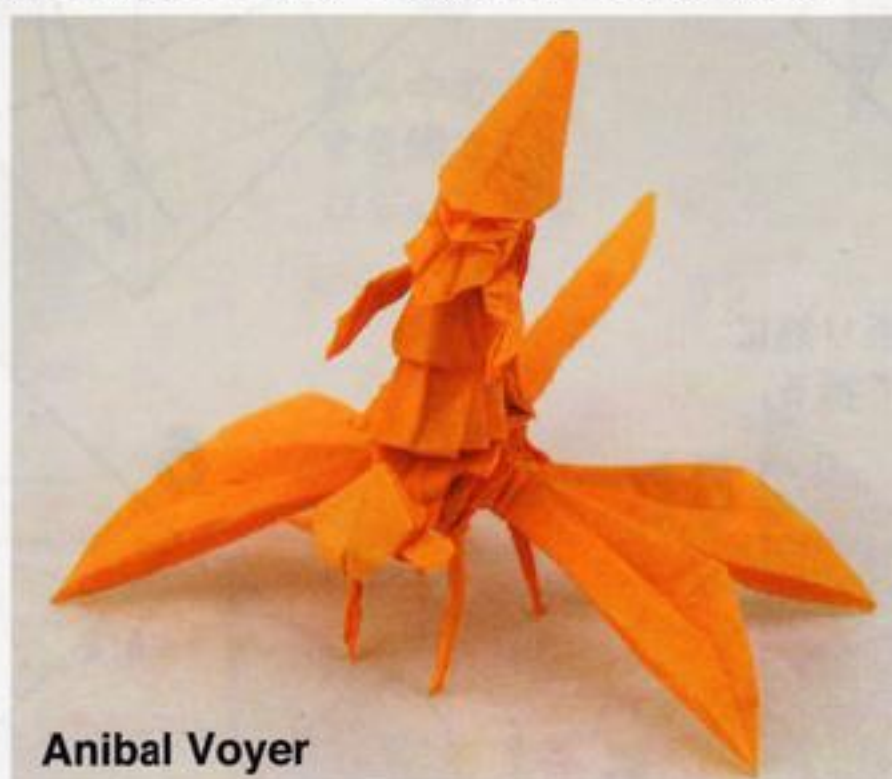
「バイオリンムシ」作：マヌエル・シルゴ
Violin Beetle: Manuel Sirgo

第13回折紙探偵団コンベンション一般展示作品より From the Open Exhibits at the 13th Origami Tanteidan Convention

■意表を突くインサイドアウト配色、複雑でも重苦しく感じさせないデザイン処理、繊細かつ大胆きわまりない立体配置。これまで思いもよらなかったことが実現されてゆく様子を目の当たりにしつつも、また来年にはこれ以上の驚きがあるはず、とついつい期待してしまいます。



Miyajima Noboru



Anibal Voyer



Lee, Jae-Goo



Kawasaki Toshikazu



Yamamoto Katsuhiro



Kakami Hitoshi

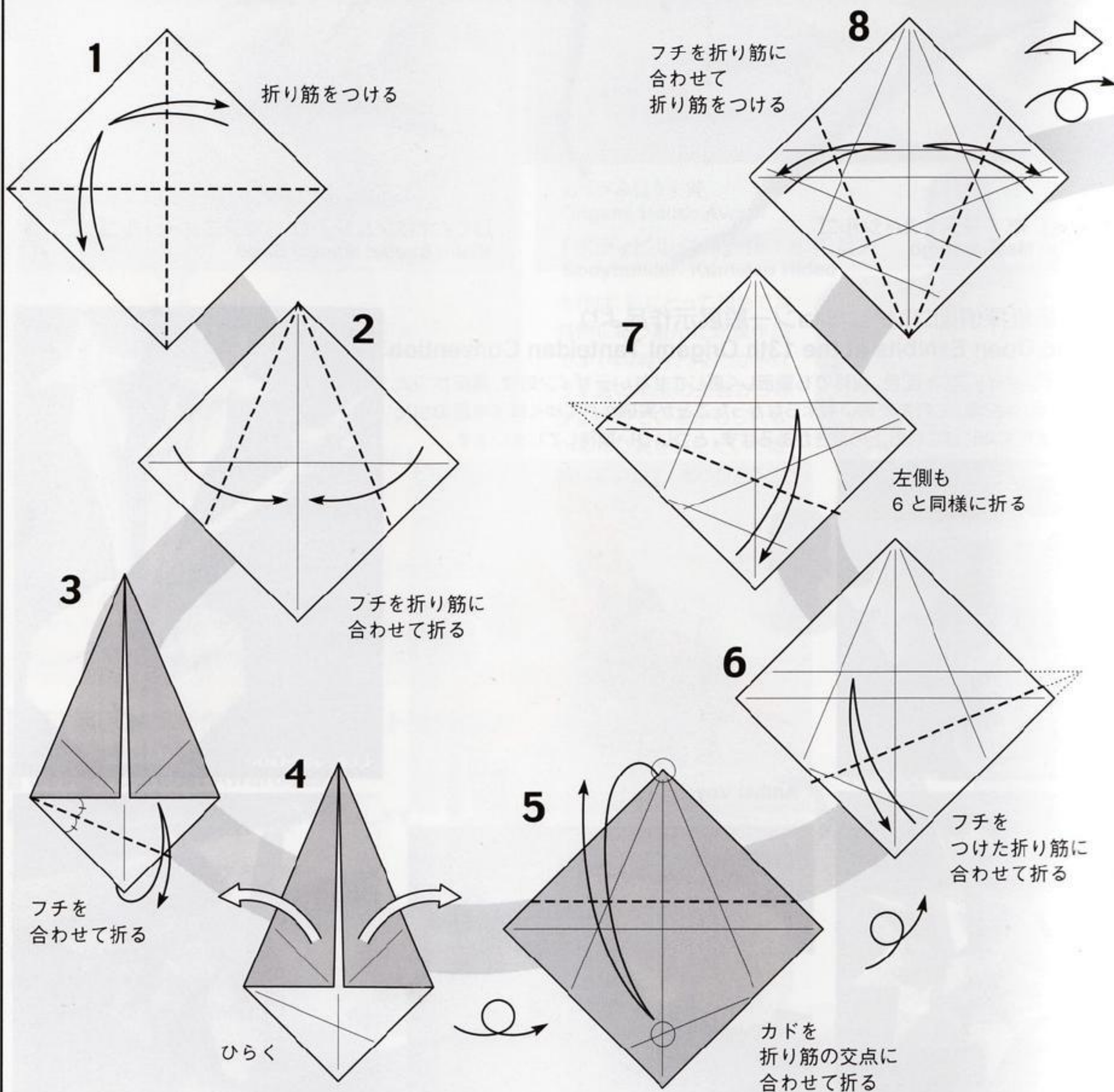
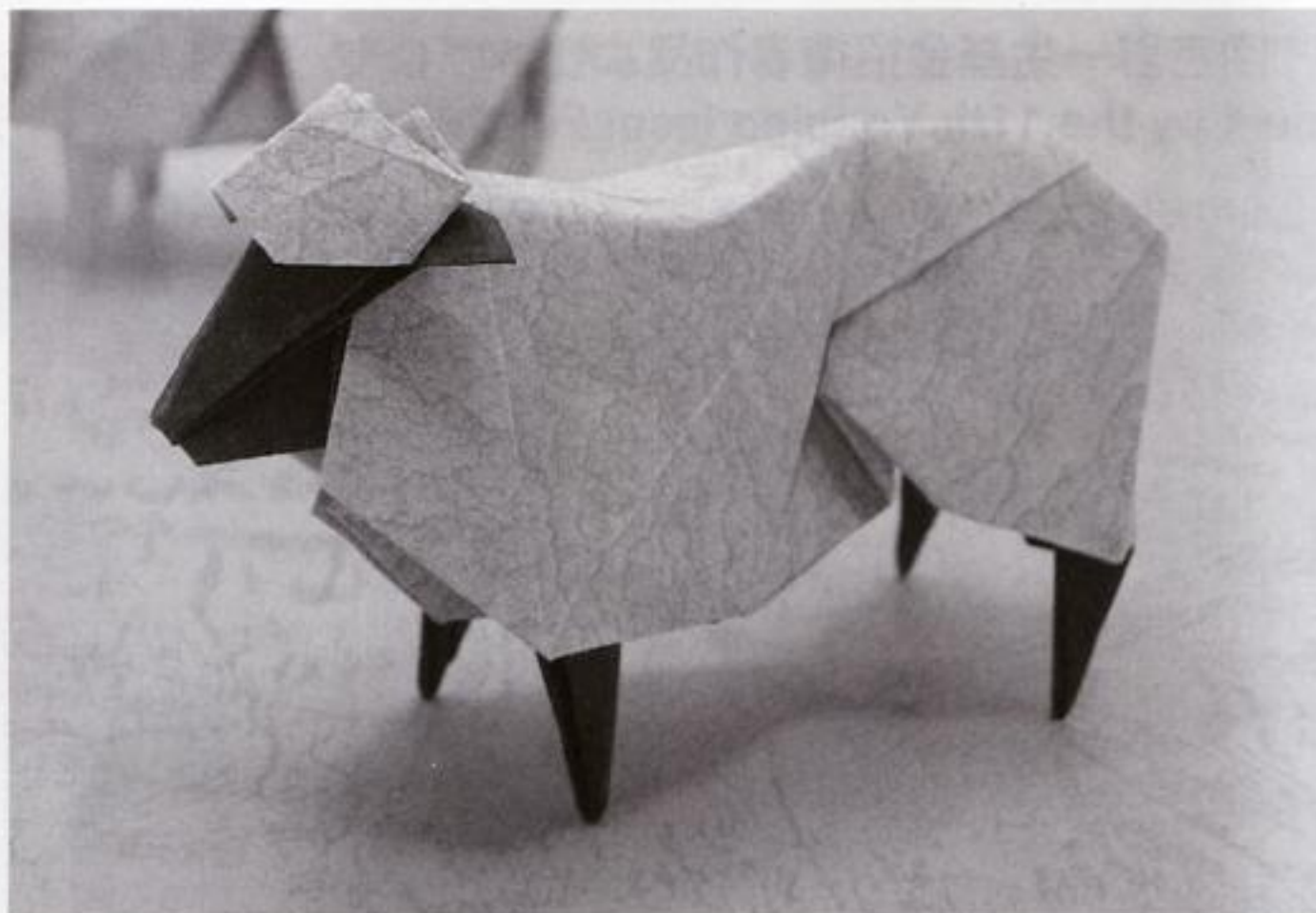
ひつじ

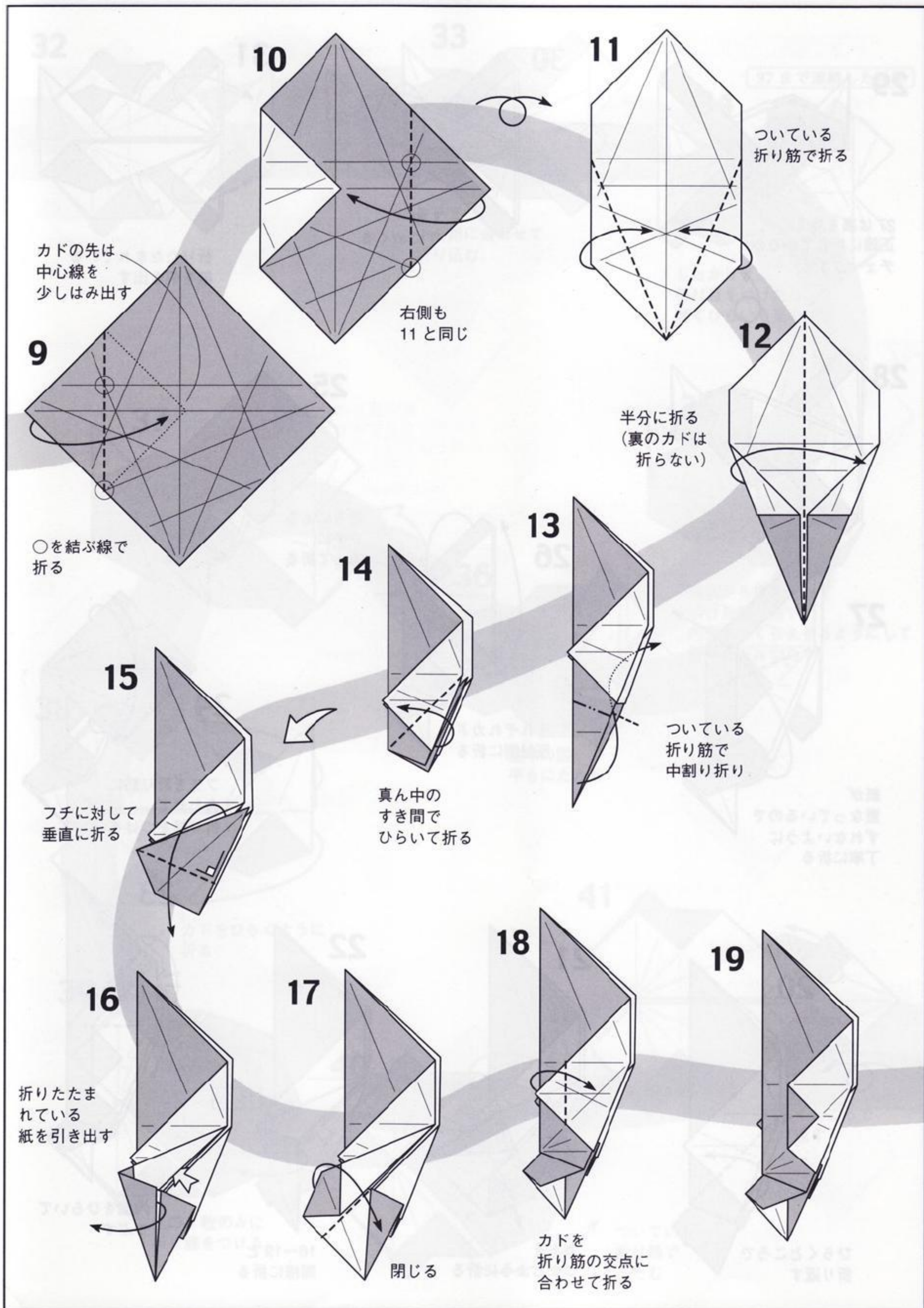
Sheep

小松英夫

Komatsu Hideo

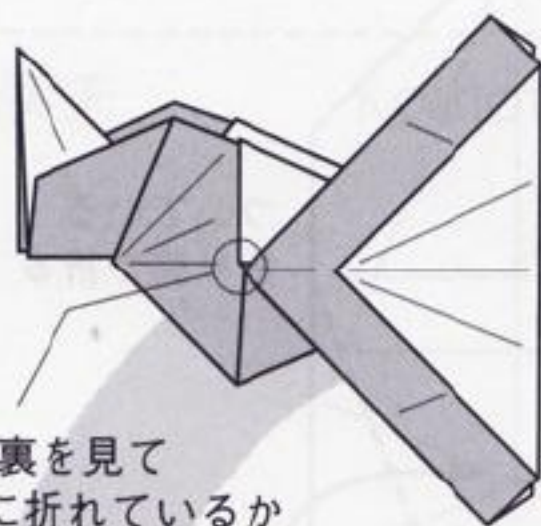
design: 2005.07
diagrams: 2006





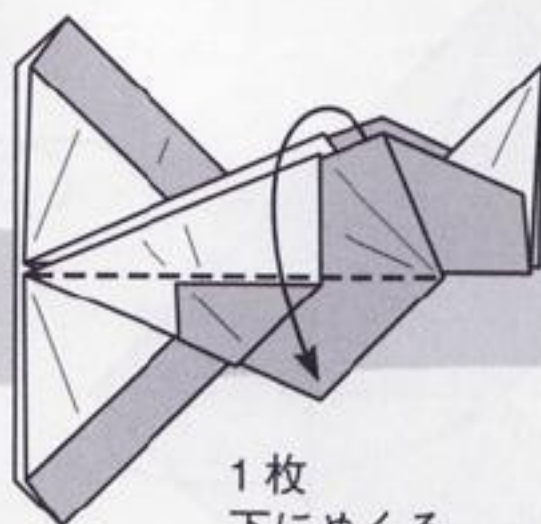
29

27 は裏を見て
正確に折れているか
チェックする



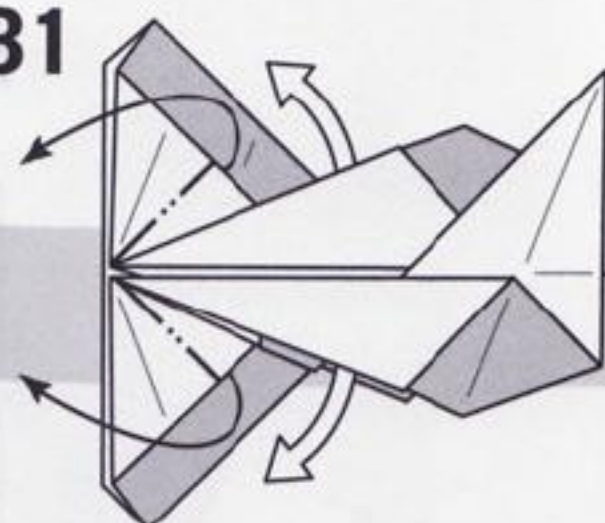
30

1枚
下にめくる

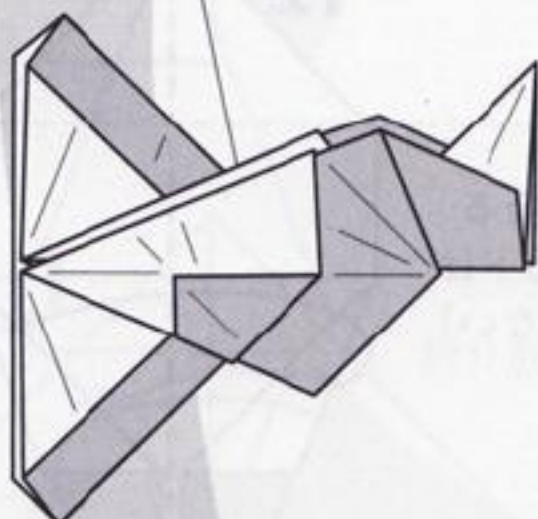


31

折りたたまれている
紙を引き出す

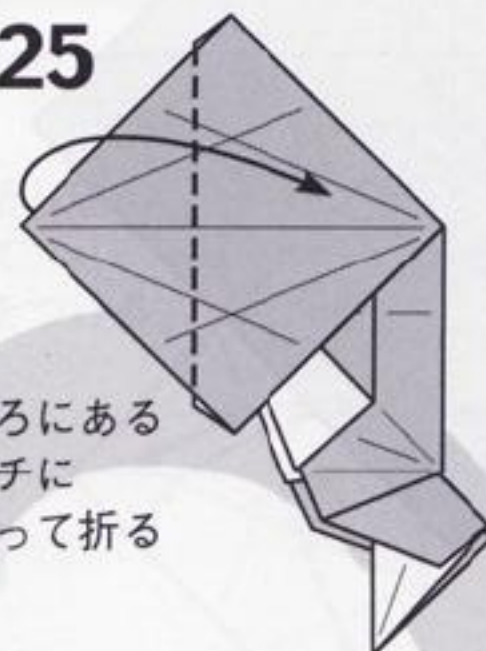


28



25

後ろにある
フチに
沿って折る



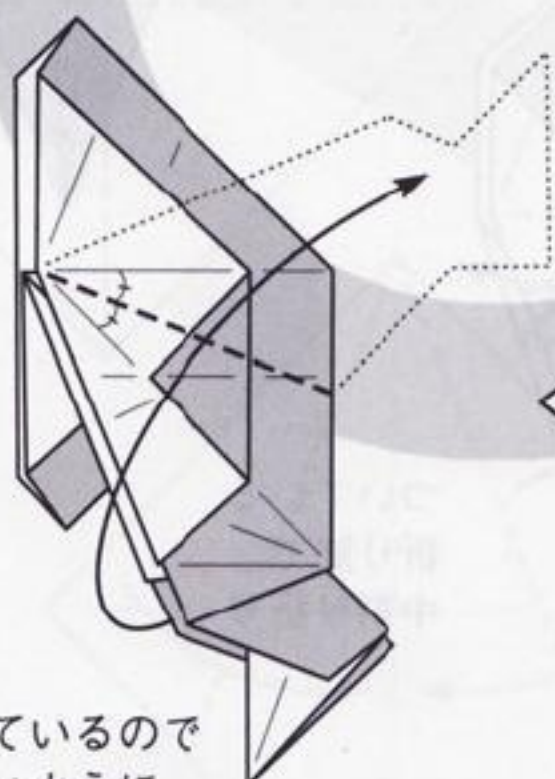
26

それぞれカドを
反対側に折る



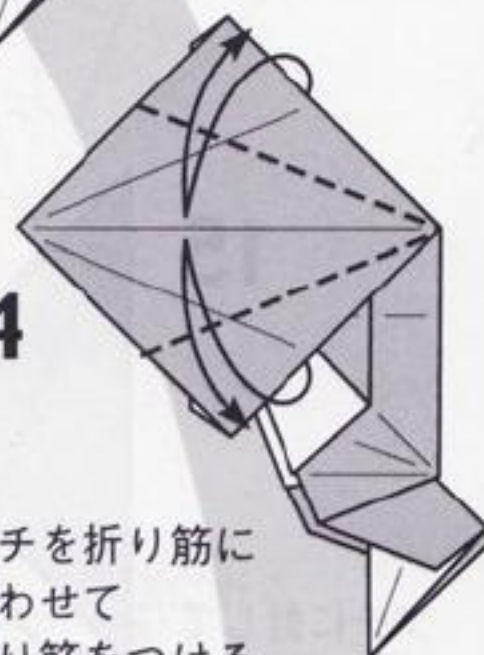
27

紙が
重なっているので
ずれないように
丁寧に折る



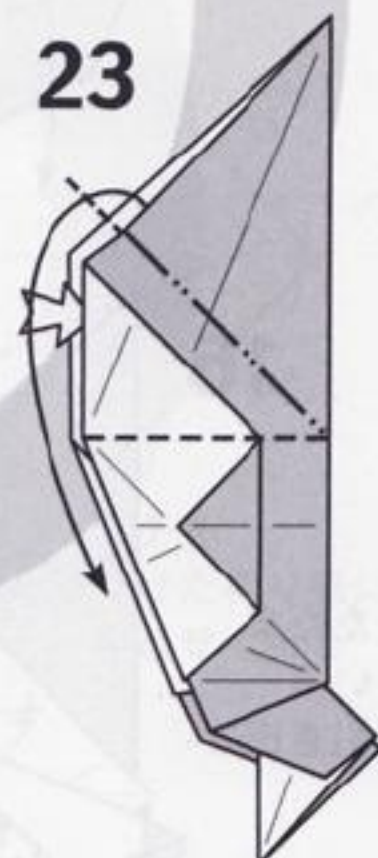
24

フチを折り筋に
合わせて
折り筋をつける



23

内側をひらいて
つぶす



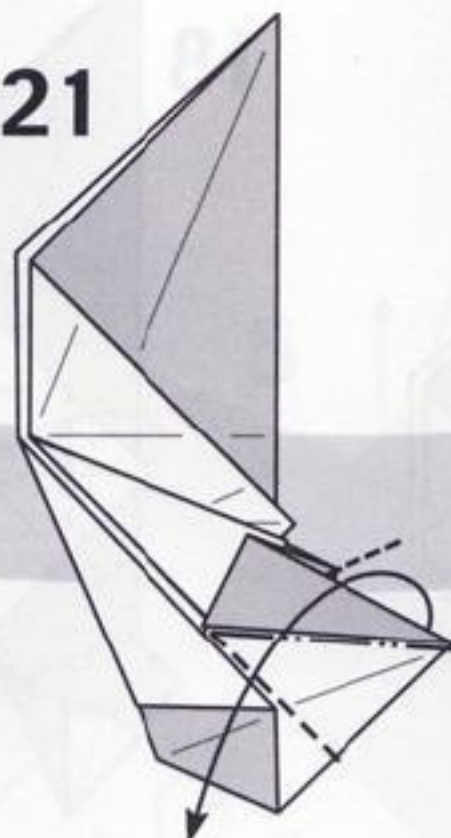
20

ひらくところで
折り返す



21

カドを
つまむように折る

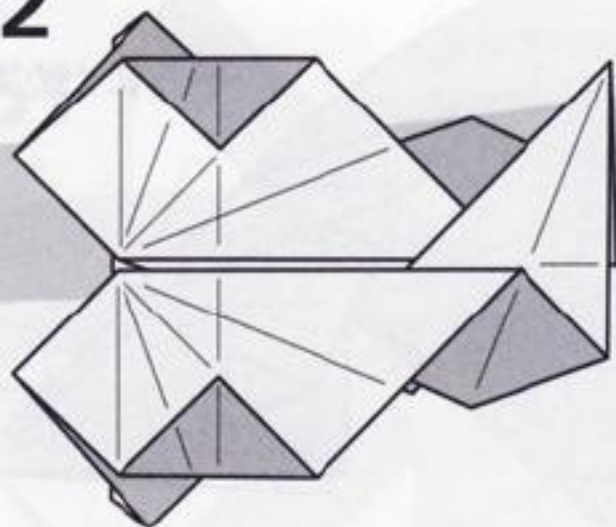


22

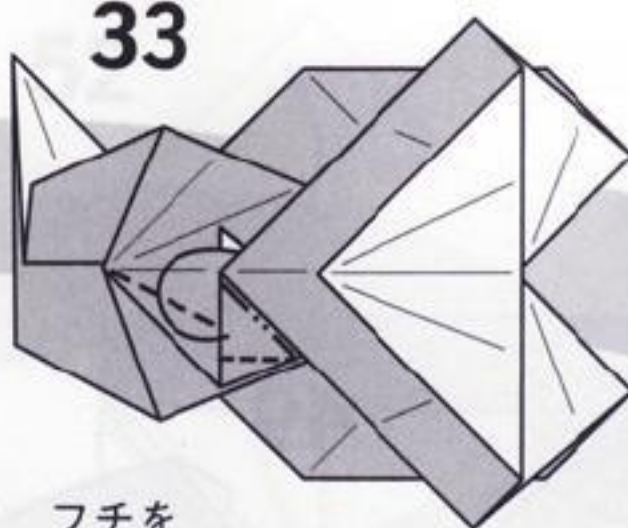
16~19 と
同様に折る



32



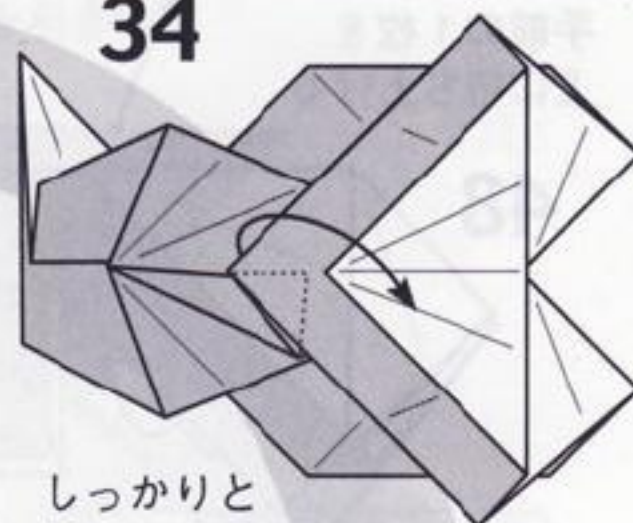
33



フチを
中心線に合わせて
折り込む

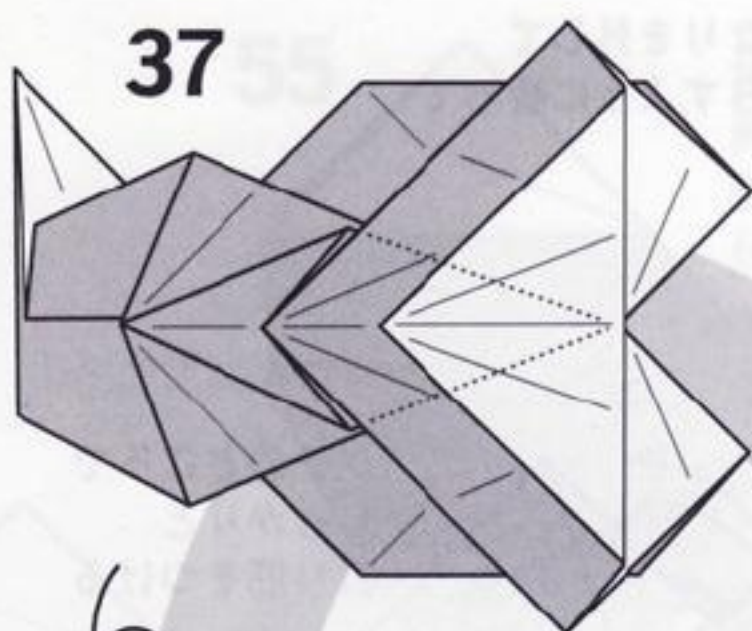
37 まで連続した手順

34

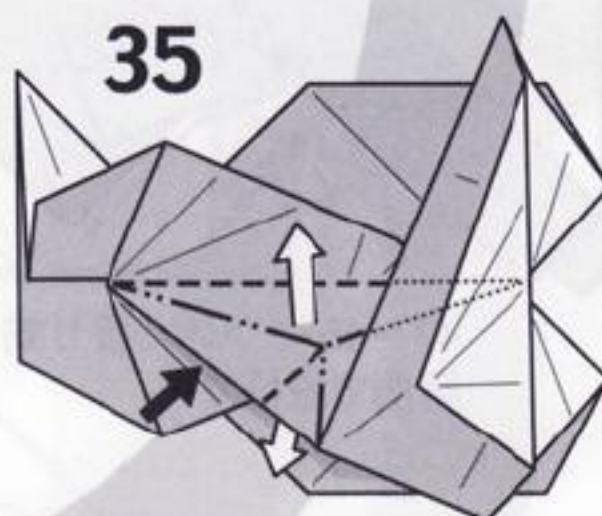


しっかりと
折り目をつけたら
軽くひらいて見る

37

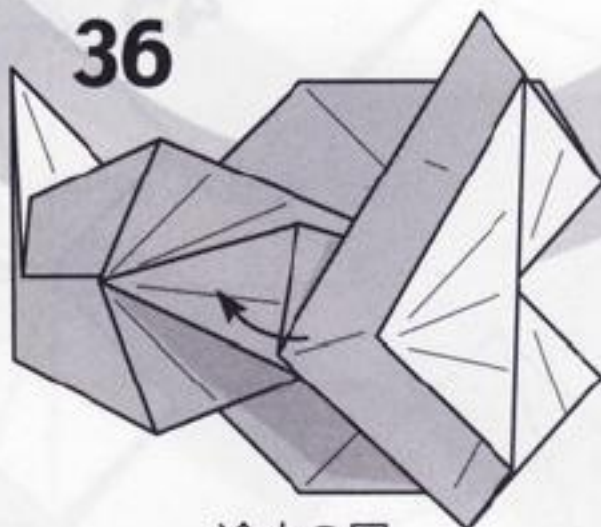


35



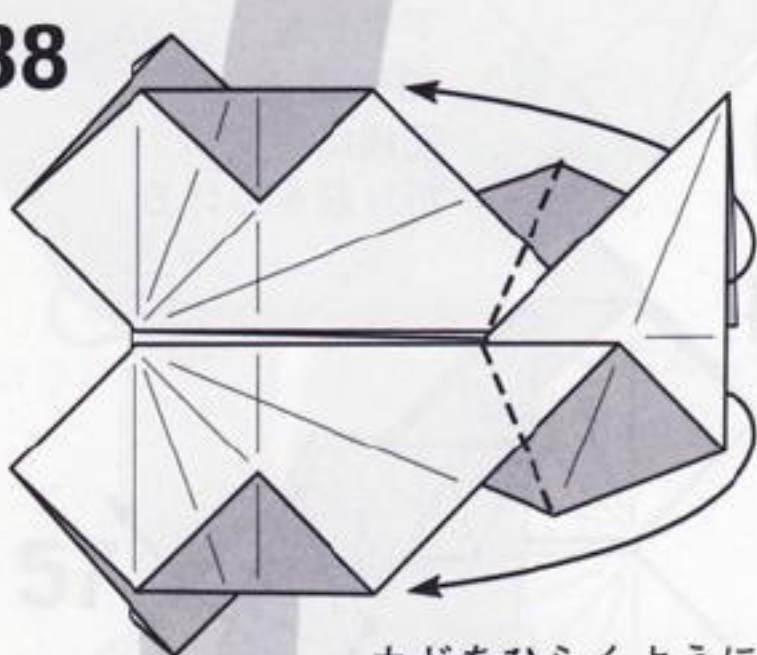
裏側から指を入れて
つけた折り筋で
内側をふくらませるようにして
折りたたみなおす

36



途中の図
平らにたたむ

38



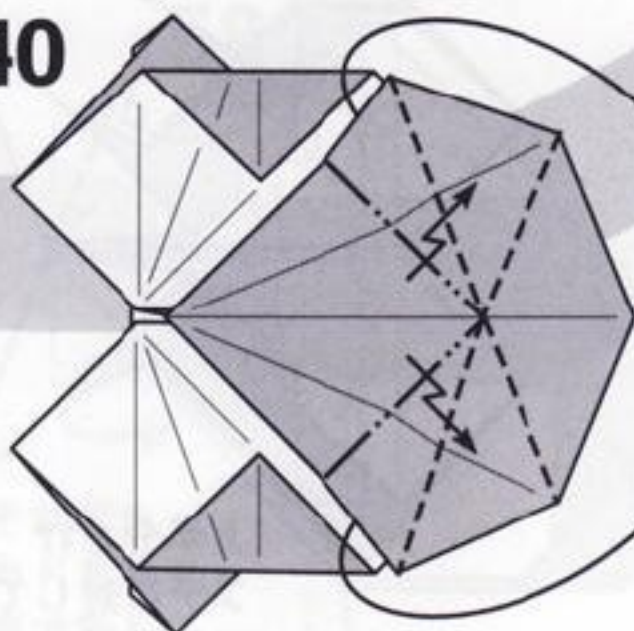
カドをひらくように
折る

39

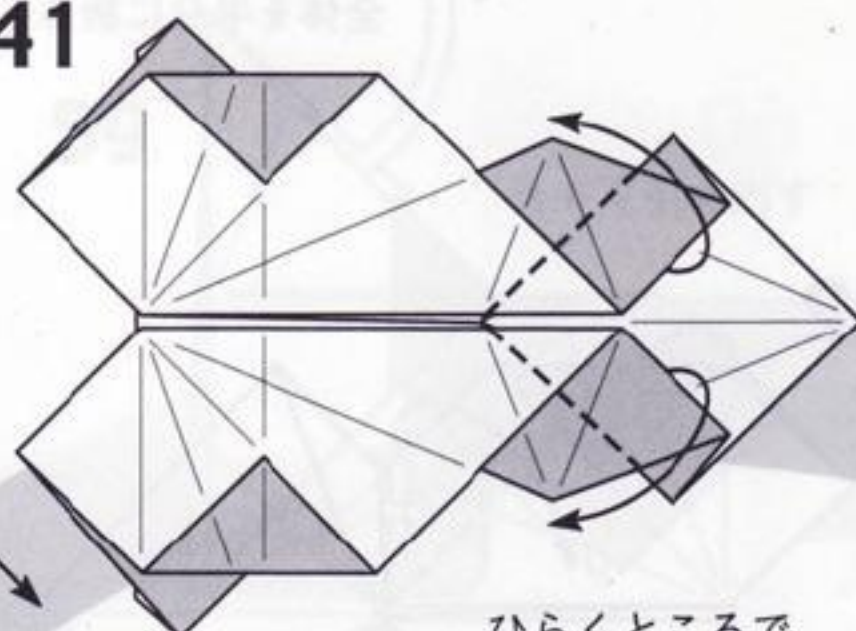


上の1枚のみに
折り筋をつける

40



41



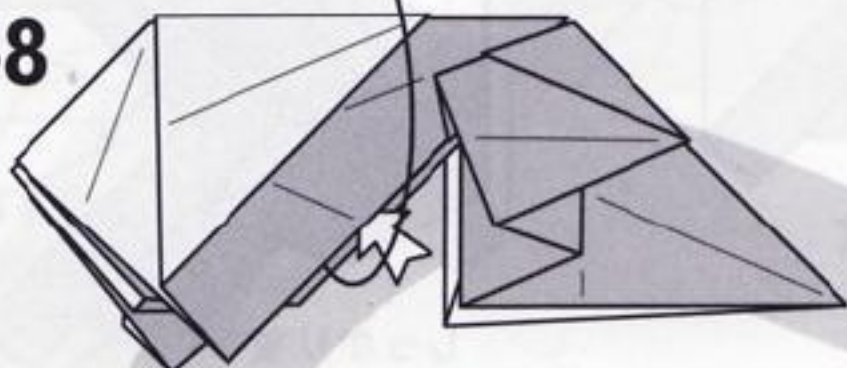
ひらくところで
折り返す

ついている
折り筋で
たたむ

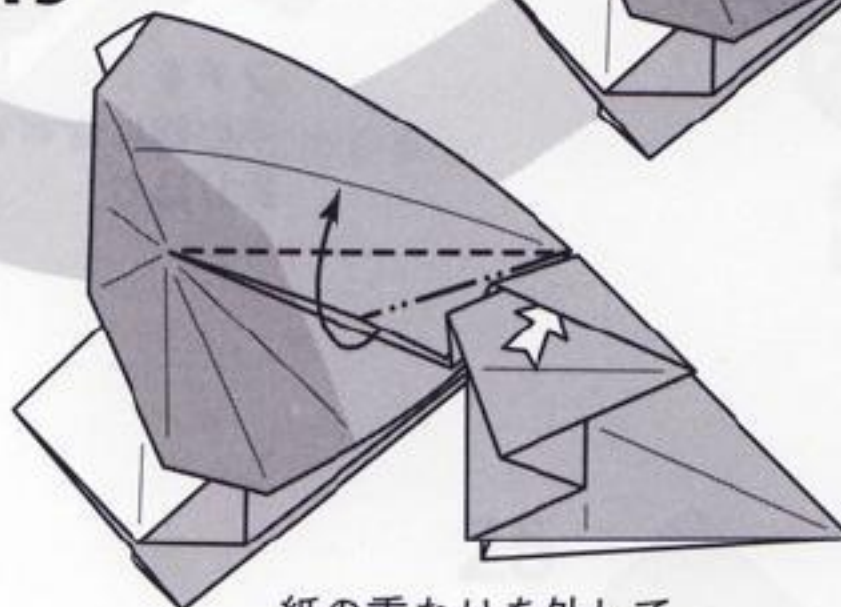
51 まで連続した手順

手前の 1 枚を
上に持ち上げる

48

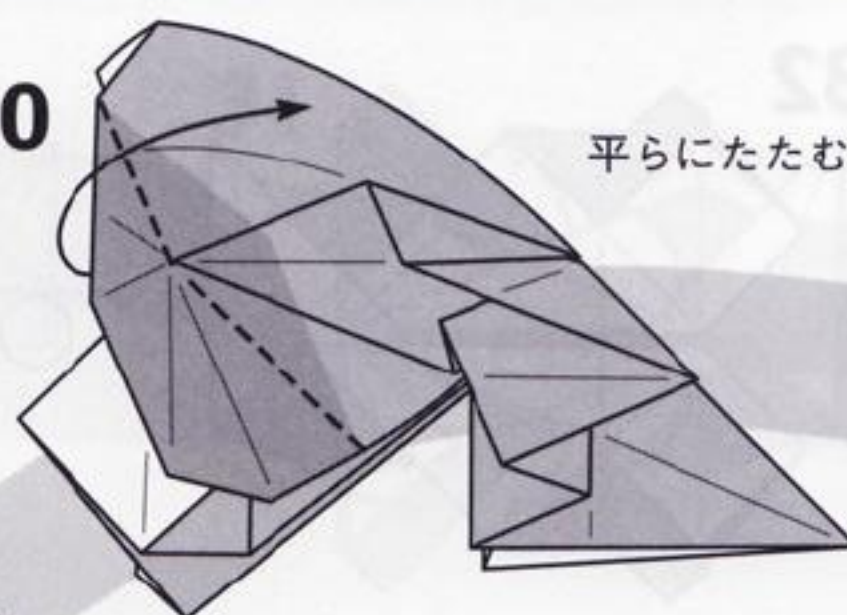


49



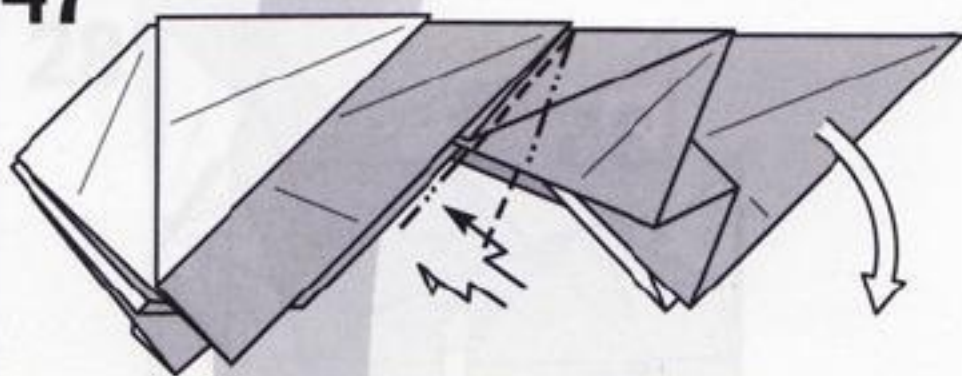
紙の重なりを外して
上にずらすように折って
つぶす

50



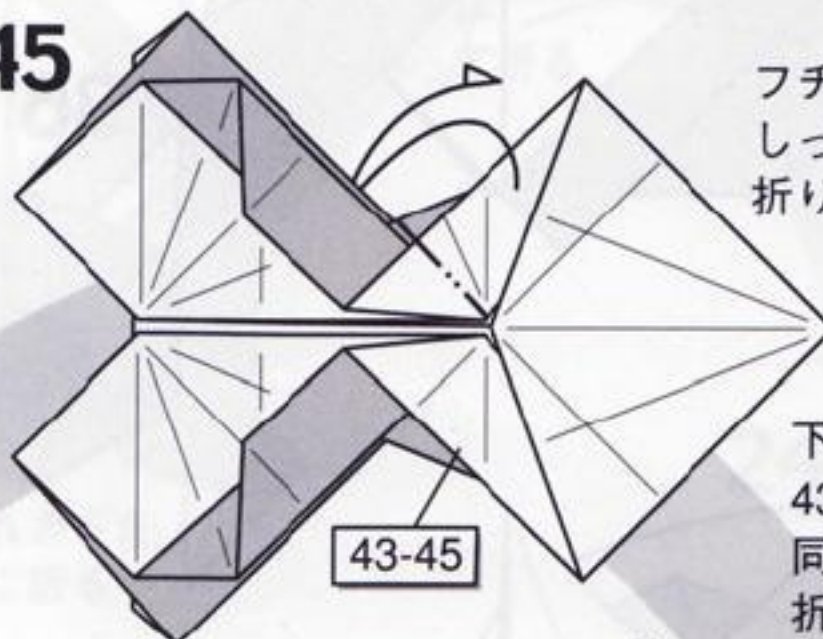
平らにたたむ

47



43~45 でつけた折り筋を使って
両側で段折り

45

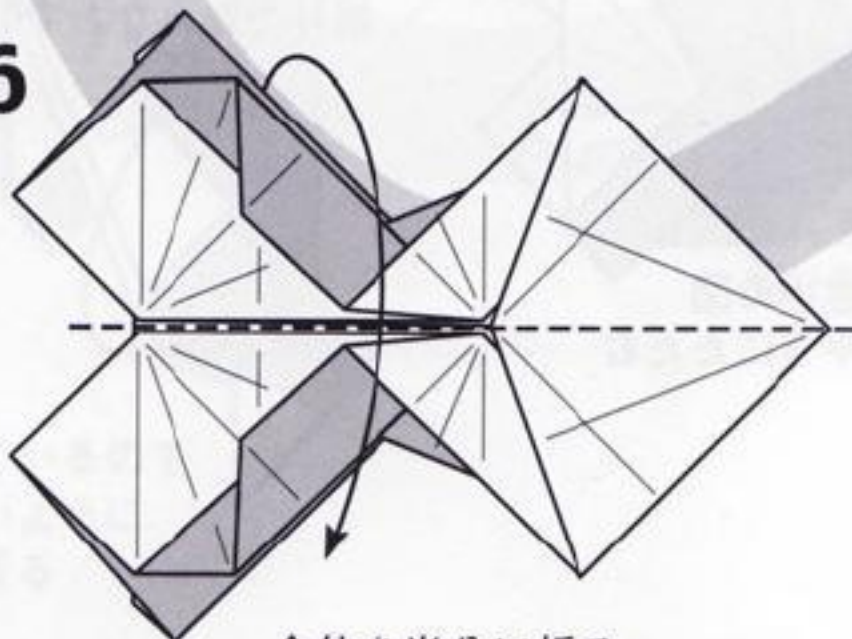


フチのところで
しっかりと
折り筋をつける

下半分も
43~45 と
同様に
折り筋をつける

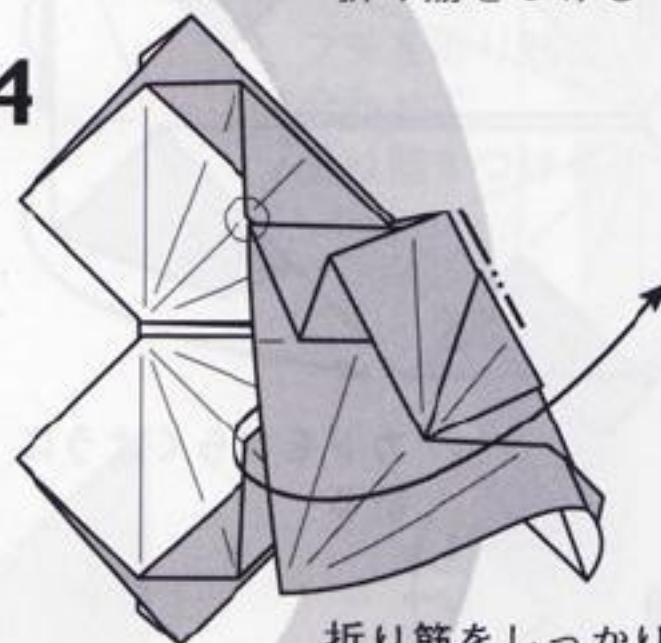
43-45

46



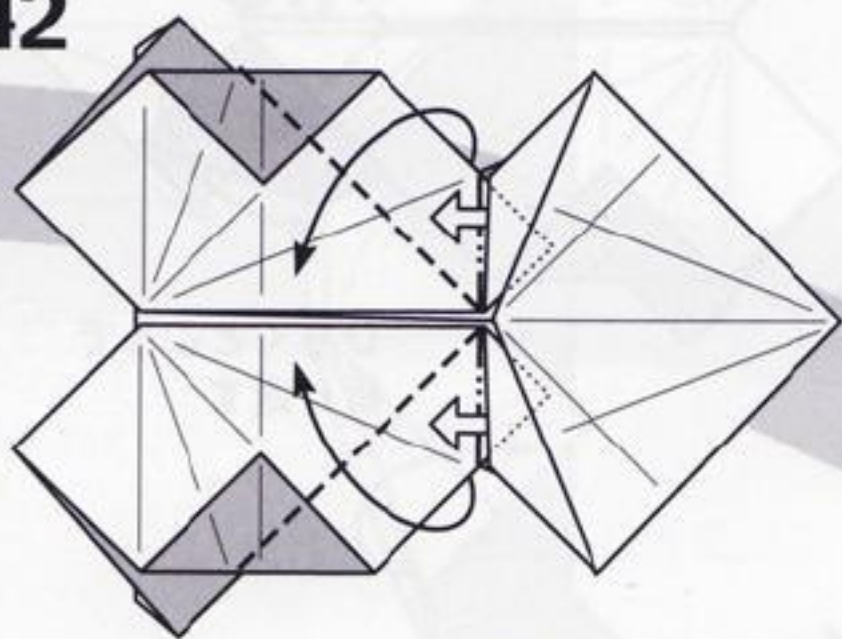
全体を半分に折る

44



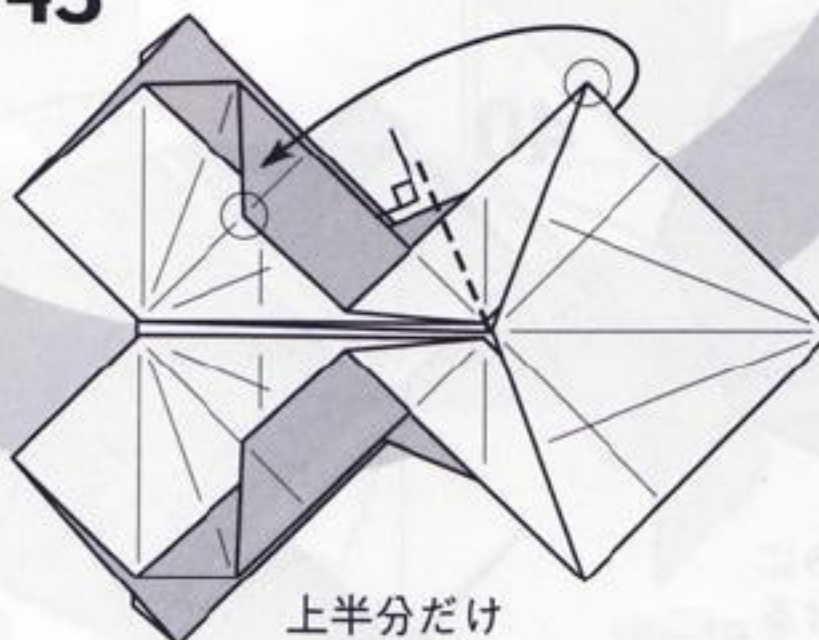
折り筋をしっかりと
つけて戻す

42



右側から紙を引き出しなが
裏にあるフチに沿って折る

43



上半分だけ
フチに対して
垂直に折る

51

裏側も 48~50 と
同様に折る

48-50

45°

52

カドを引き出す

53

57 まで連続した手順

軽くひらいて
内側を見る

55

折り返したカドを
押し込むように
沈め折り
(closed sink)

54

カドを折り返す

56

ひらいたところを
閉じる

57

53-56

裏側も 53-56 と
同様に折る

59

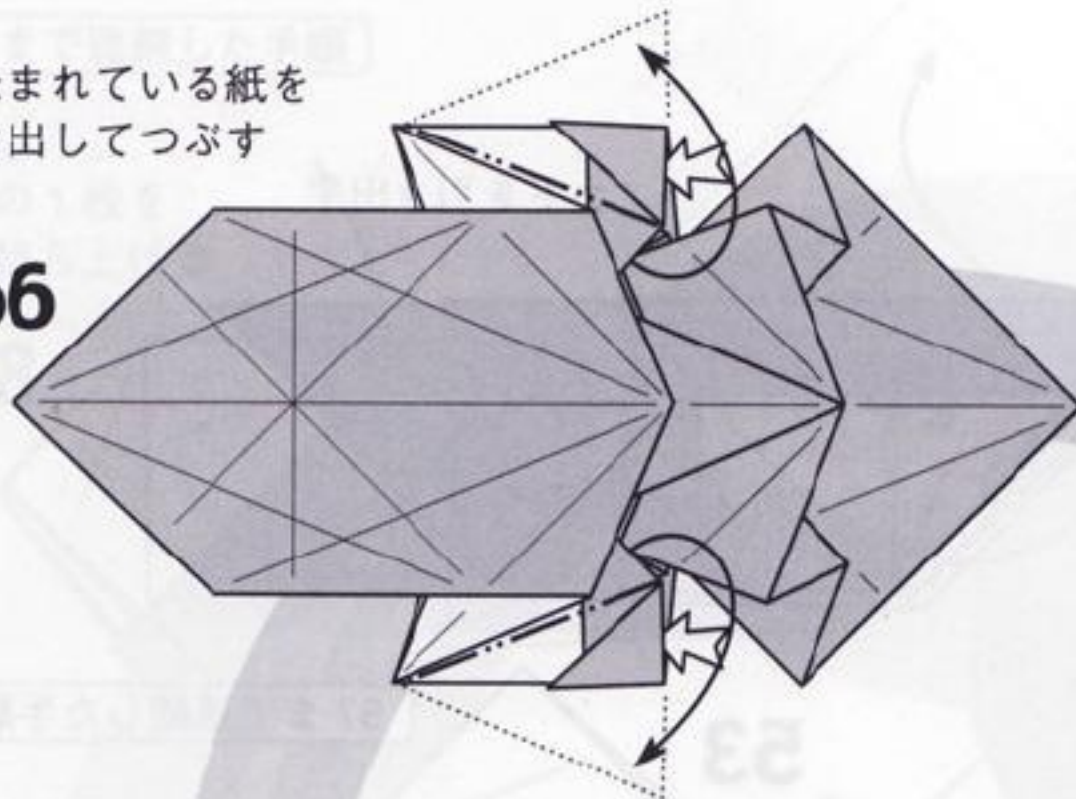
カドを引き出す

58

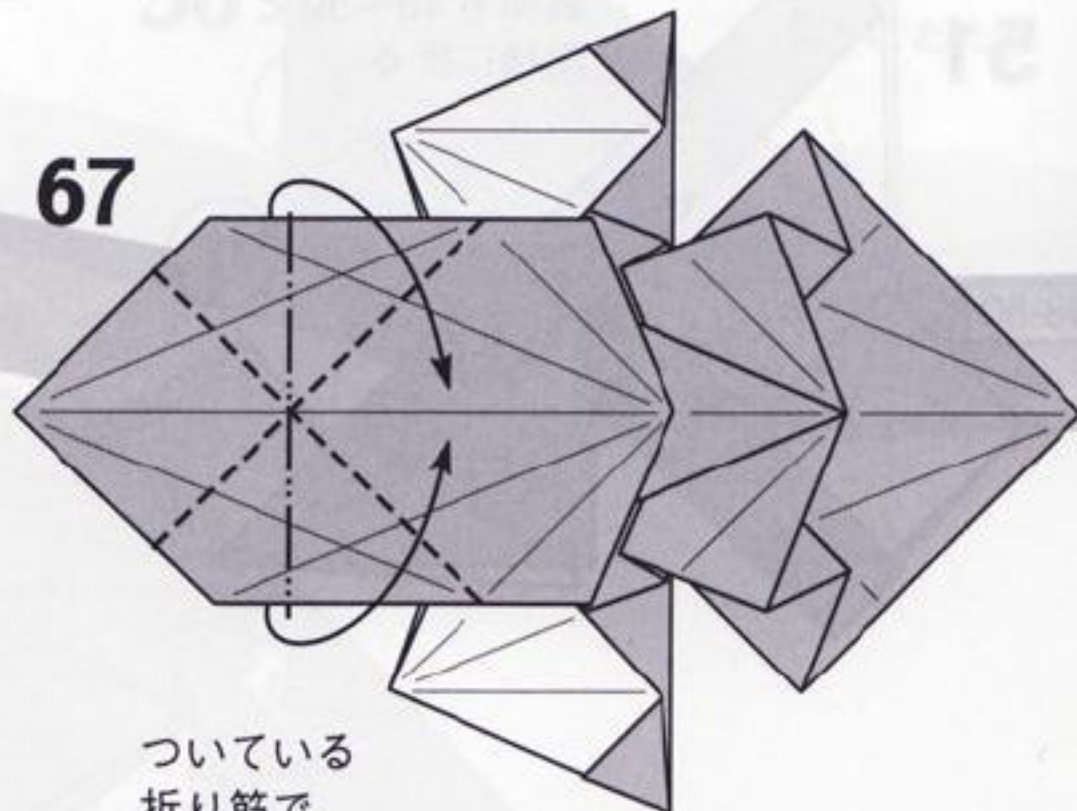
それぞれ
カドを結ぶ
線で折る

たたまれている紙を
引き出してつぶす

66

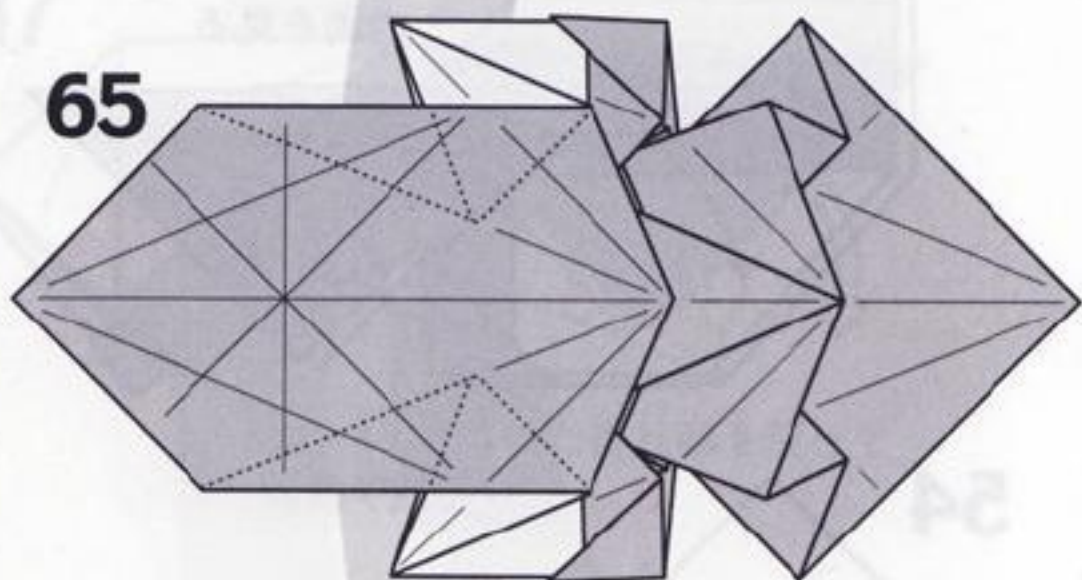


67

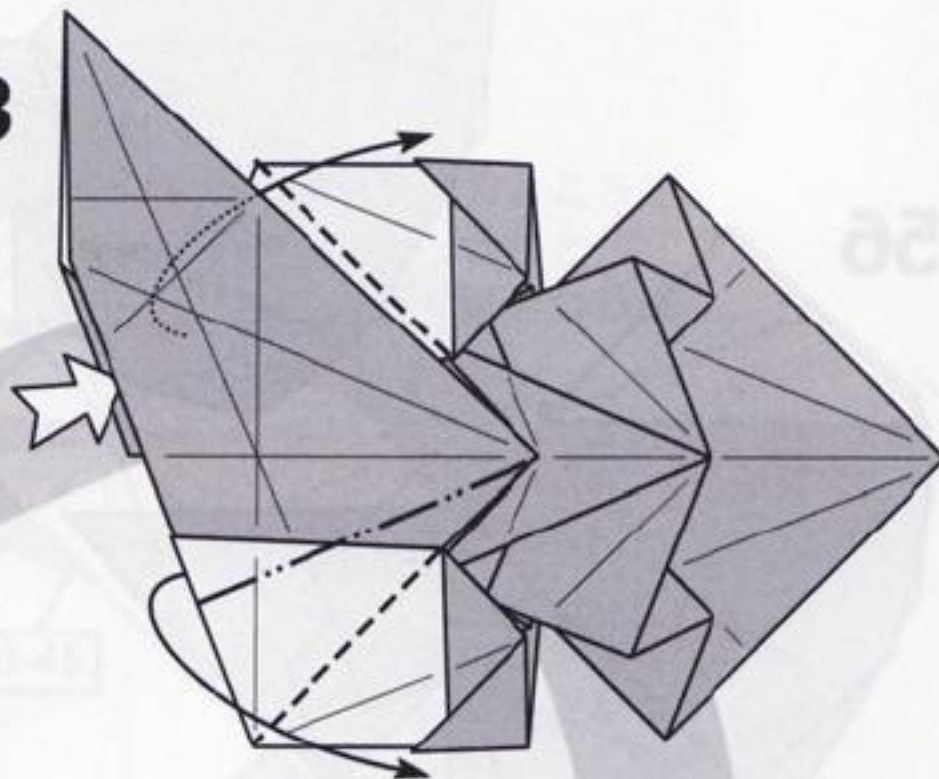


ついている
折り筋で
折りたたむ

65

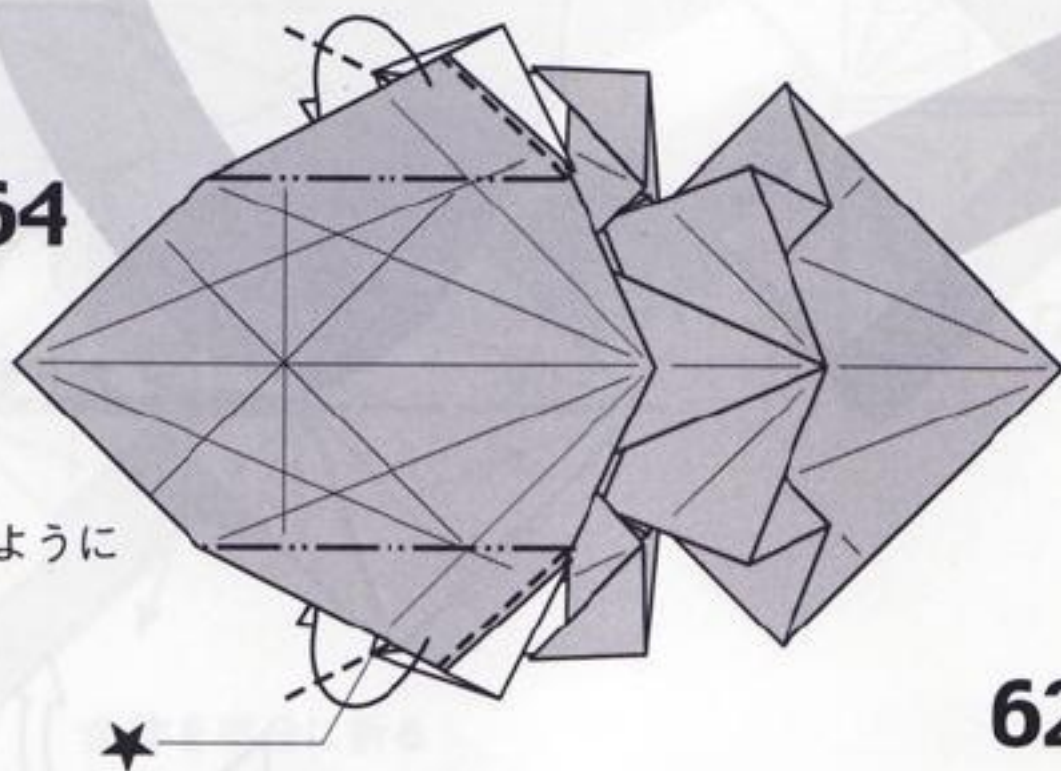


63



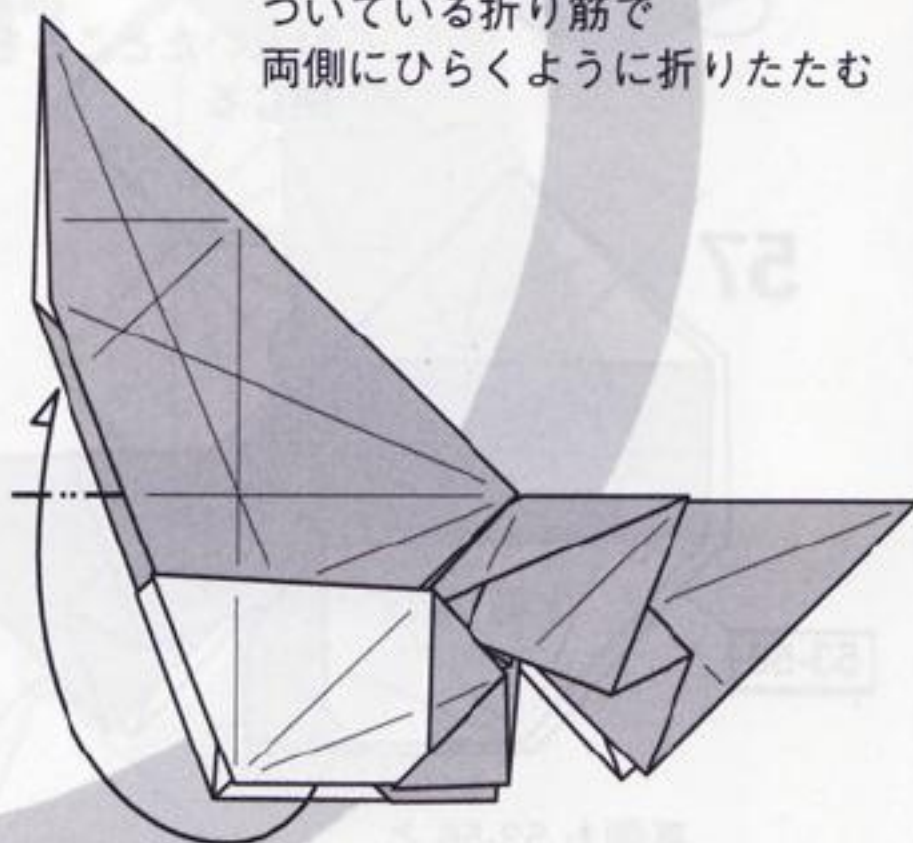
ついている折り筋で
両側にひらくように折りたたむ

64



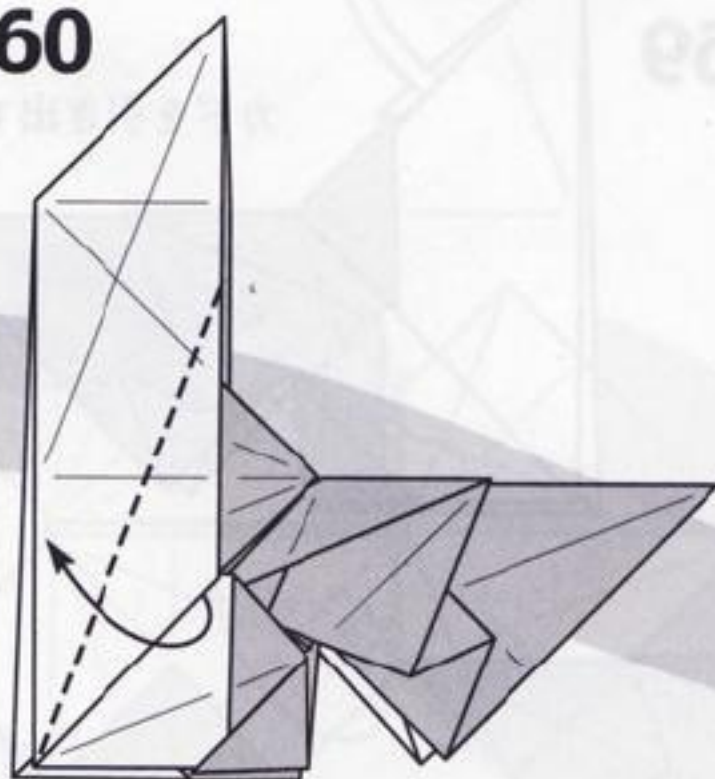
★のカドを
半分にするように
折り込む

62



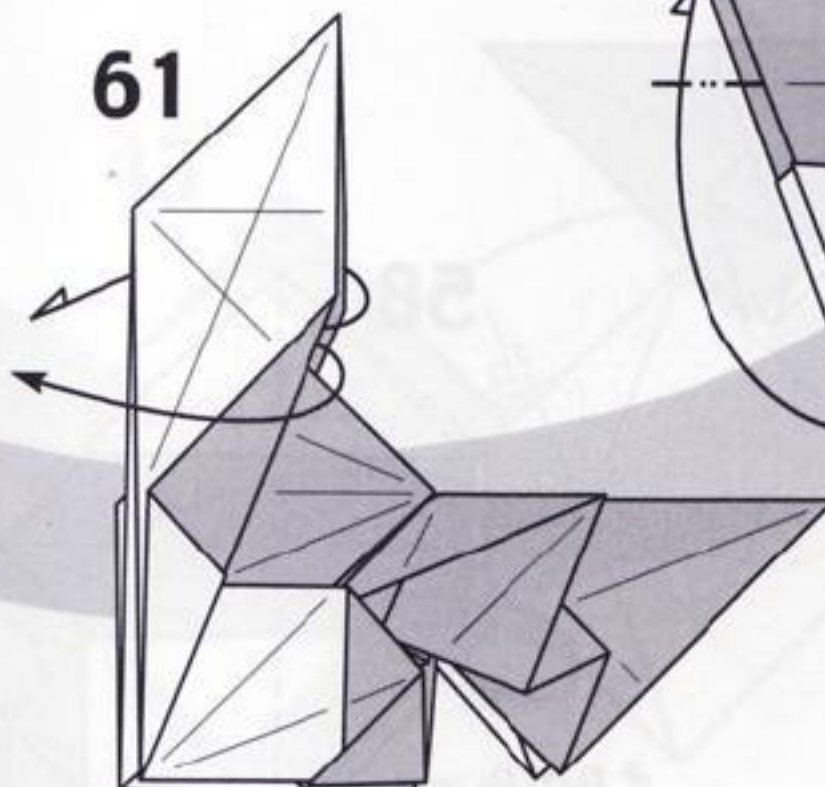
全体を真ん中でひらく

60



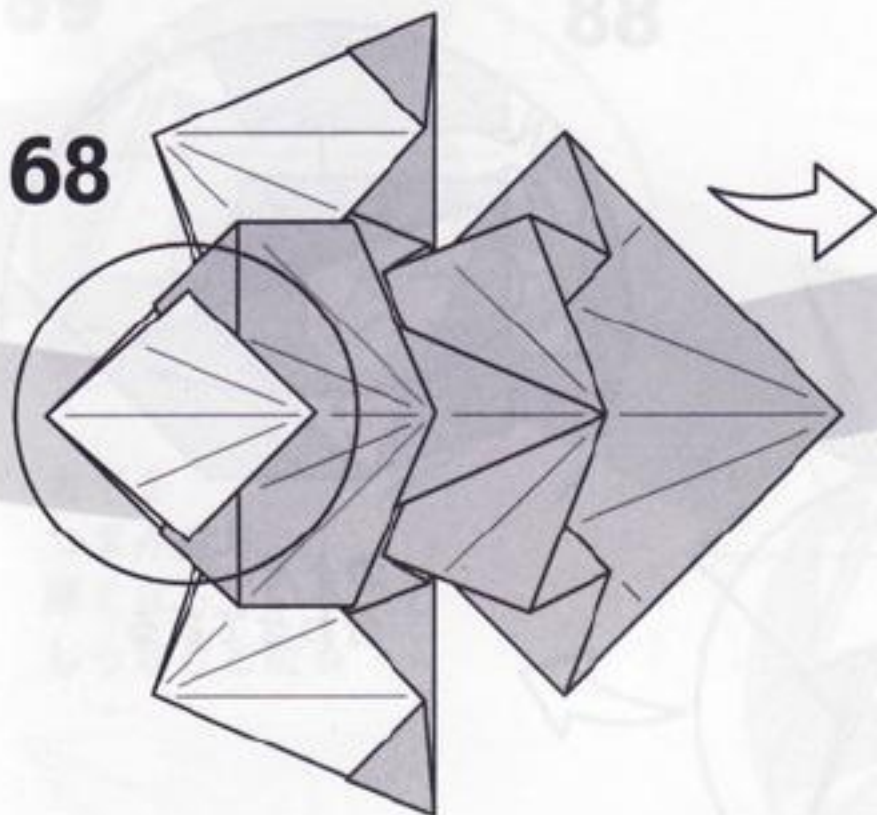
フチを合わせて折る
向こう側も同じ

61

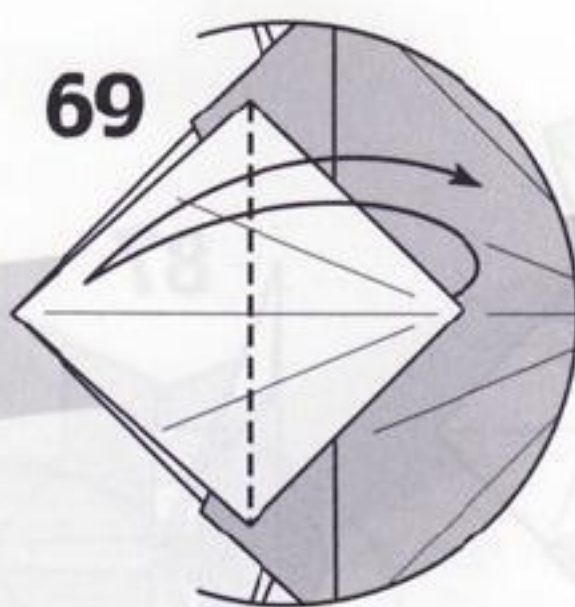


かぶせるように
ひらく

68

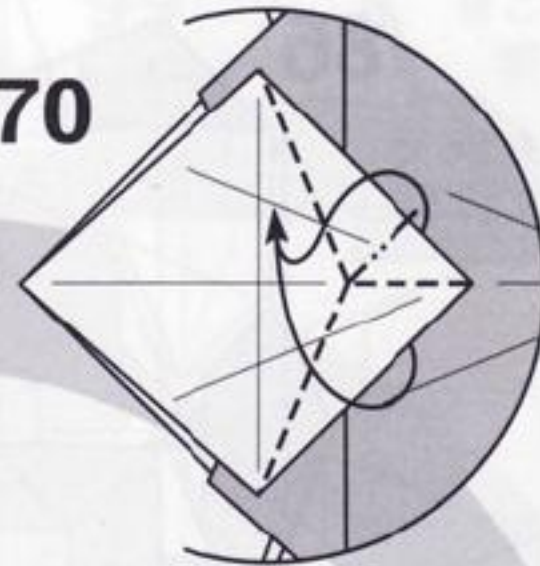


69



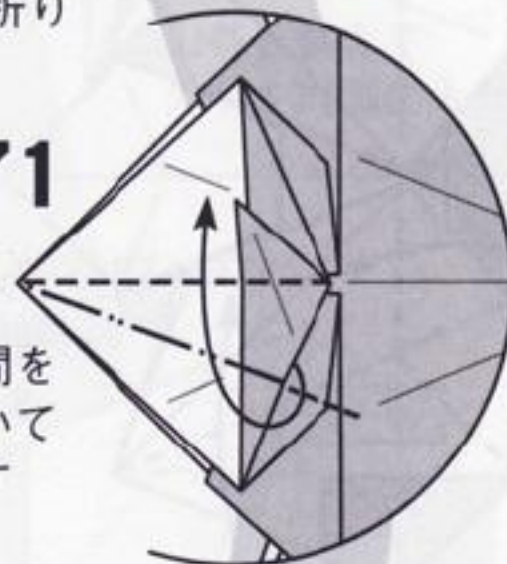
上の1枚に
折り筋をつける

70



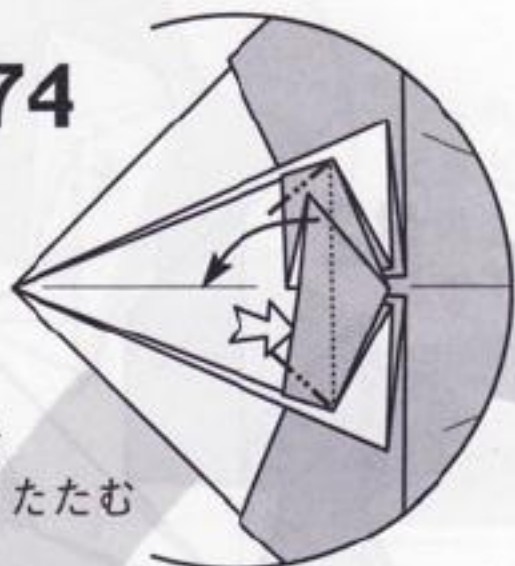
つけた折り筋に
合わせるように
カドをつまみ折り

71



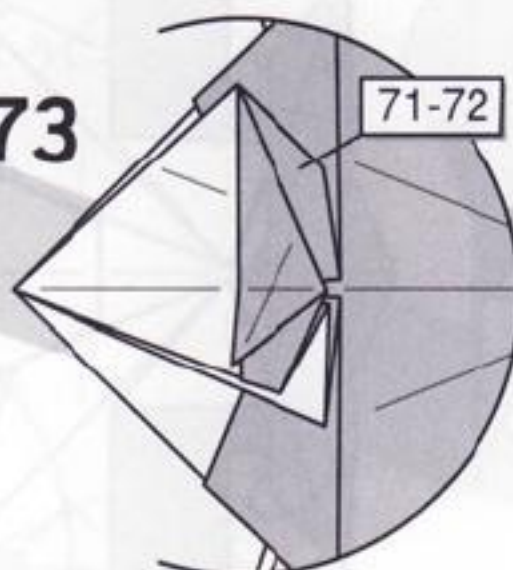
すき間を
ひらいて
つぶす

74



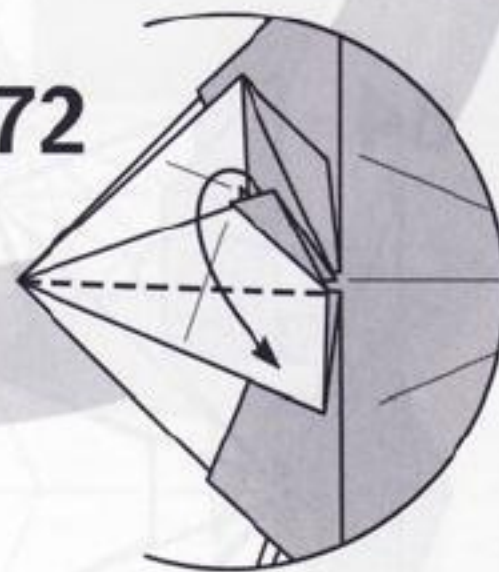
カドの内側を
ひらいて折りたたむ

73

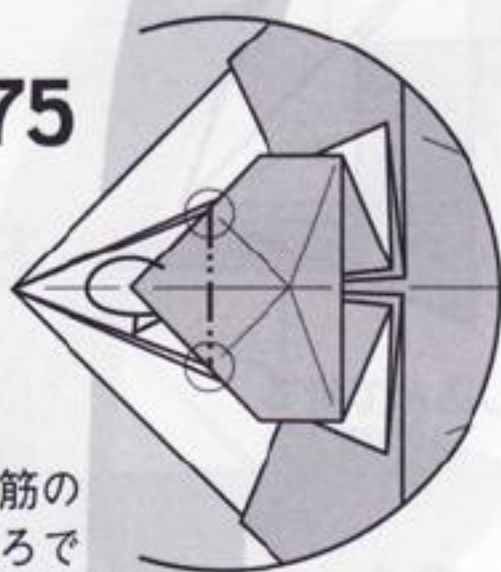


上側も 71~72 と
同様に折る

72

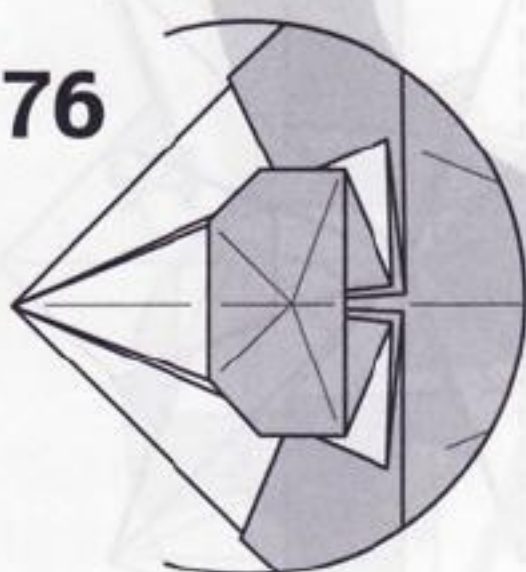


75

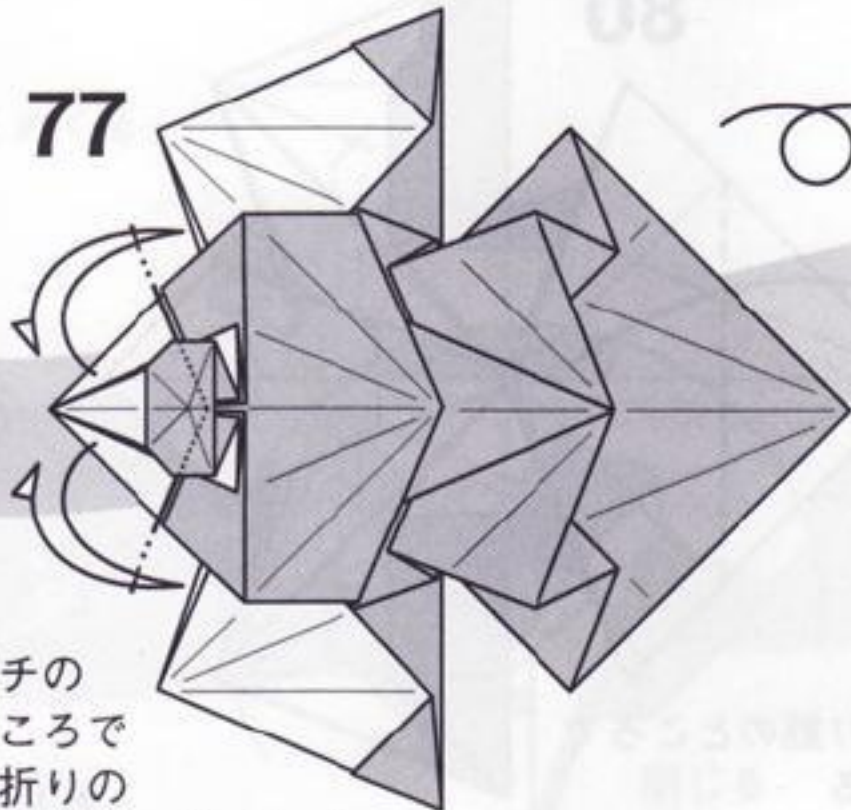


折り筋の
ところで
内側に折る

76

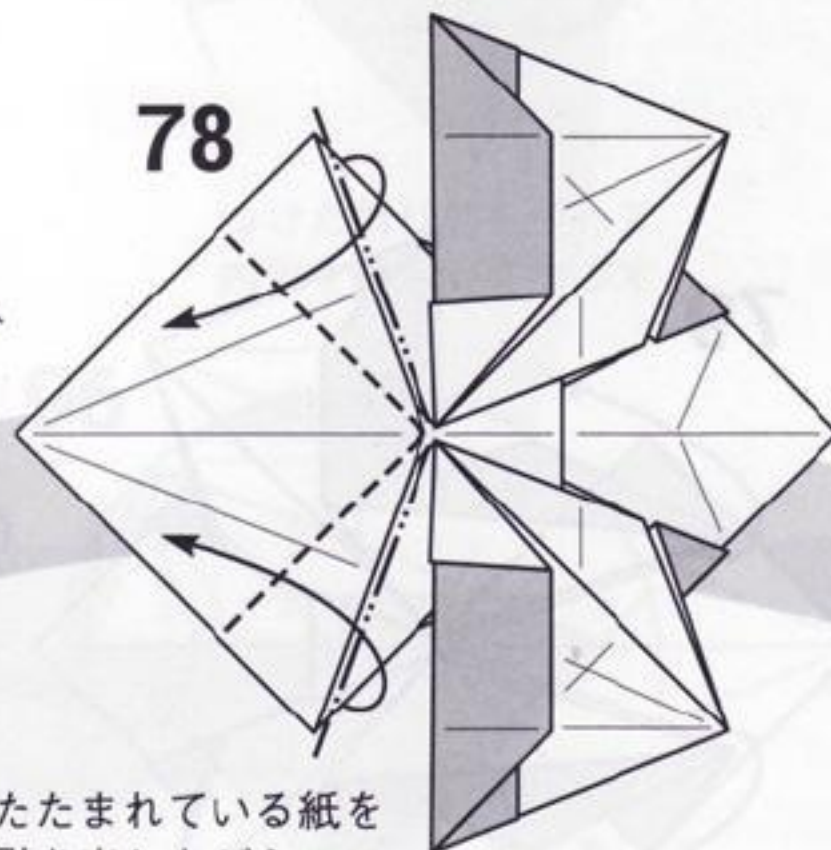


77



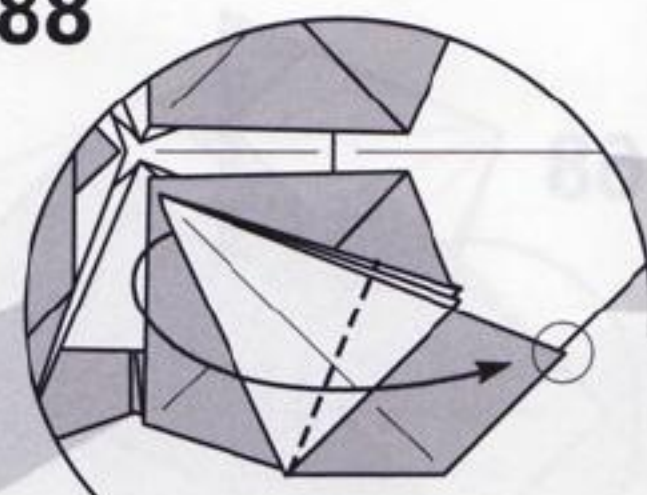
フチの
ところで
山折りの
折り筋をつけておく

78



たたまれている紙を
引き出しながら
折ってつぶす

88



カドを○に
合わせて折る

87



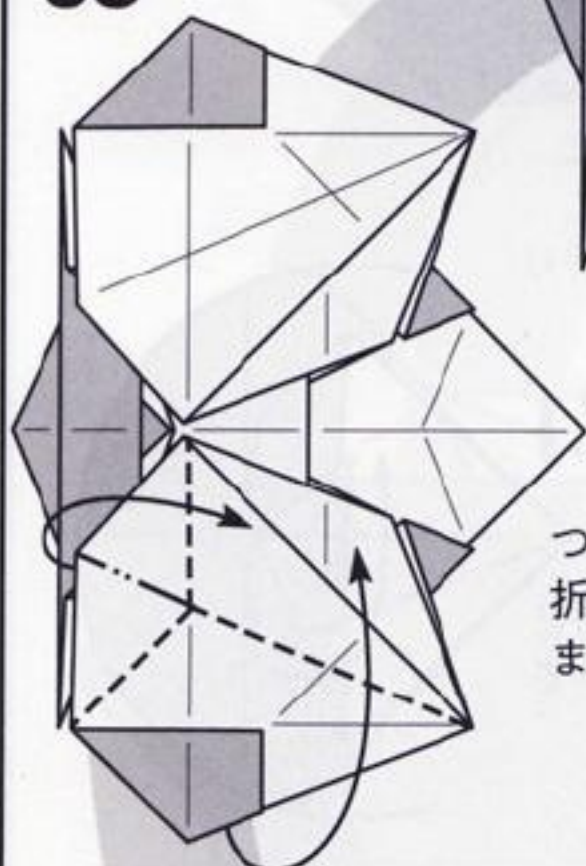
カドを折り返す

86



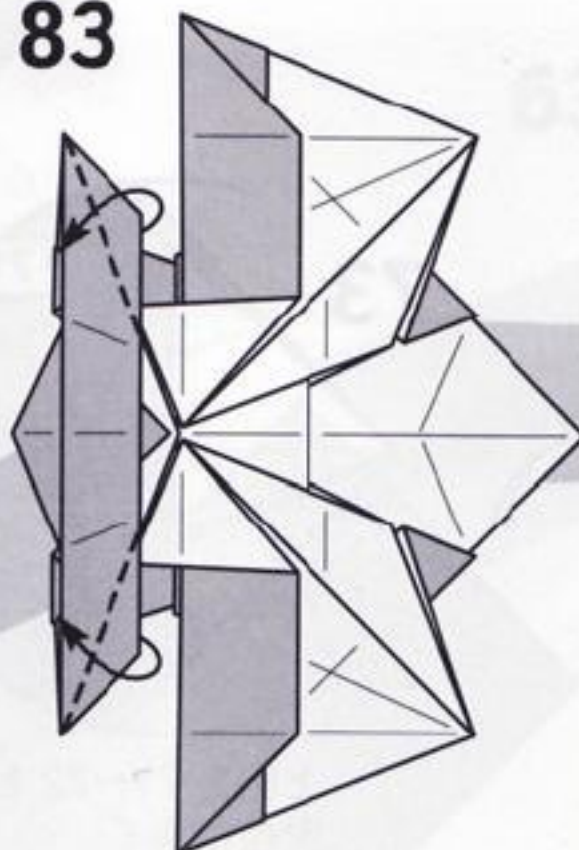
上側も 85 と
同様に折る

85



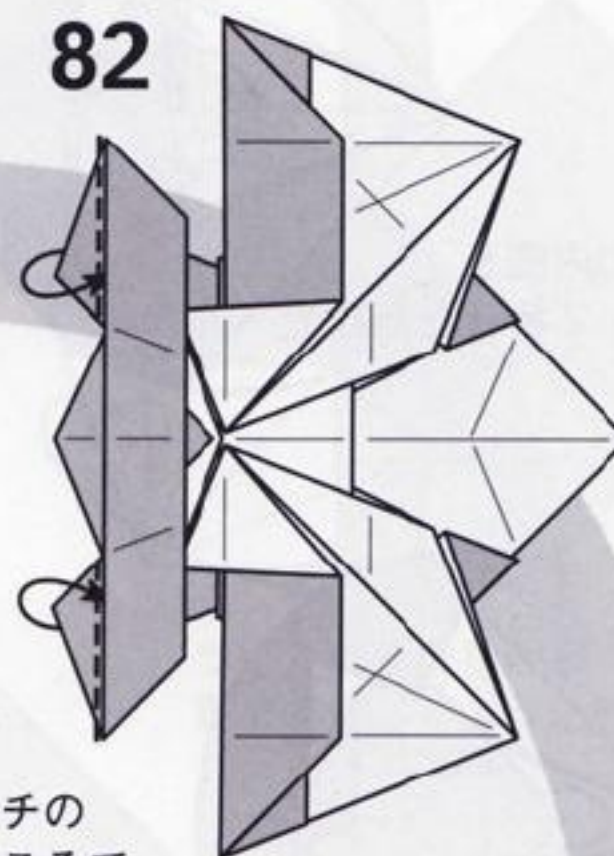
ついている
折り筋を使って
まとめる

83



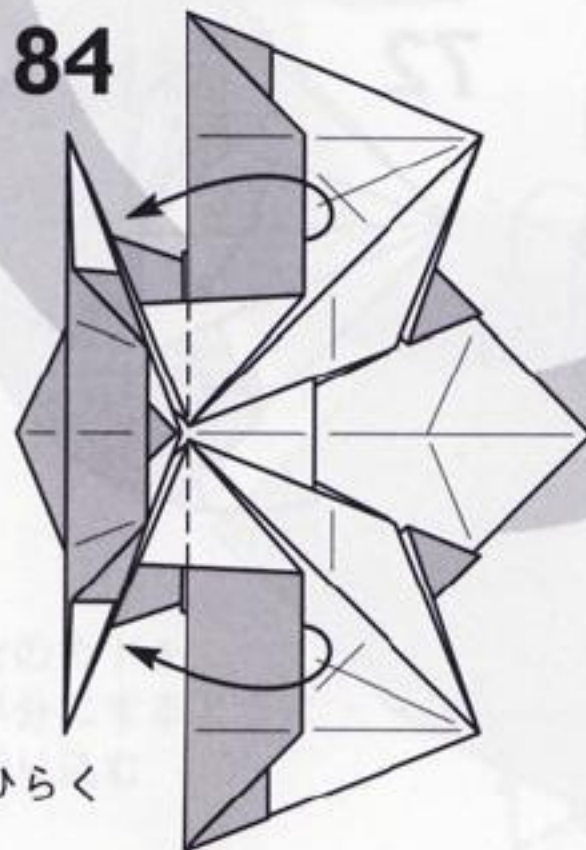
カドを半分に折る

82



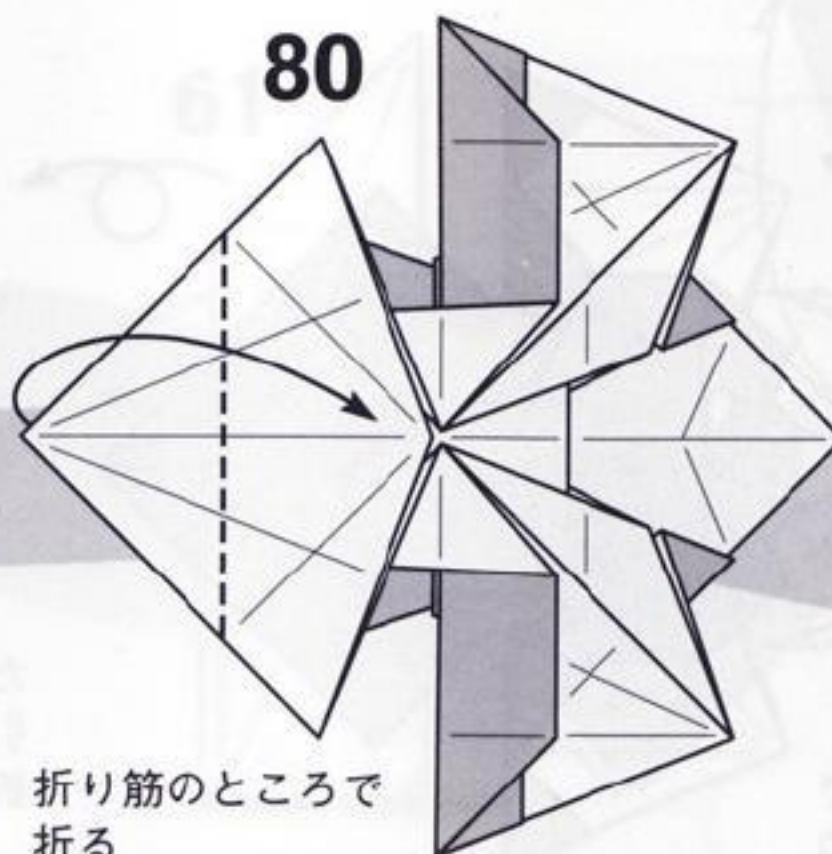
フチの
ところで
すき間に差し込んで折る

84



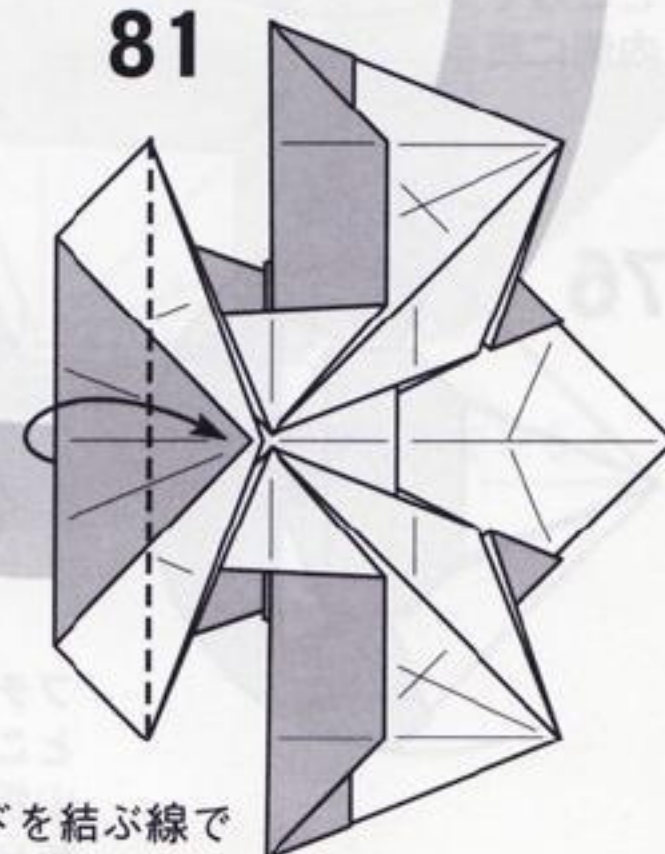
ひらく

80



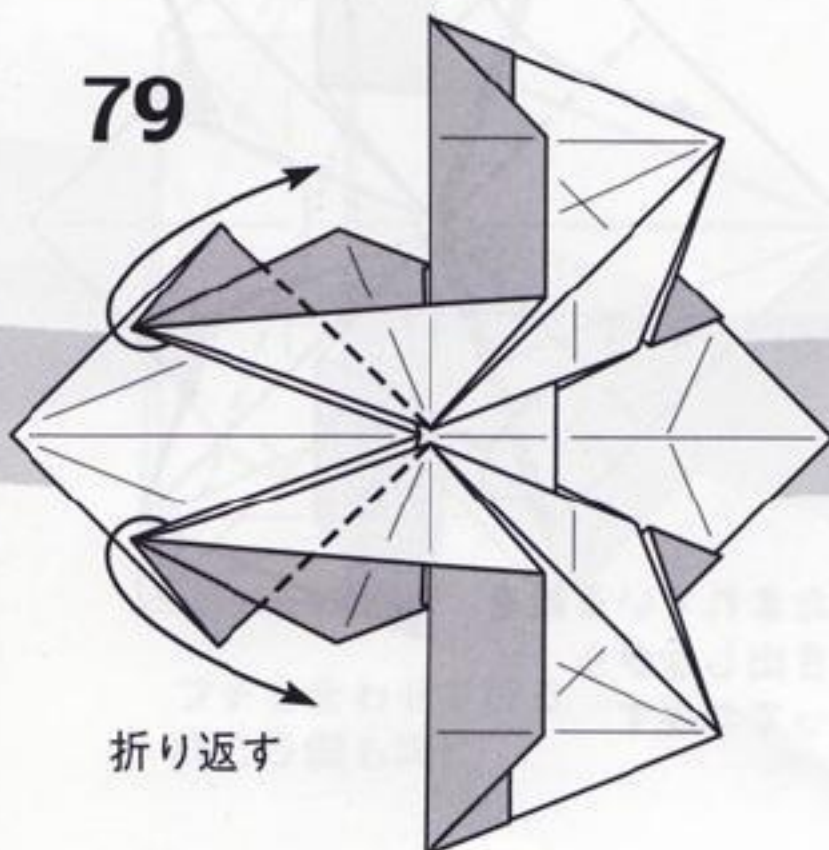
折り筋のところで
折る

81



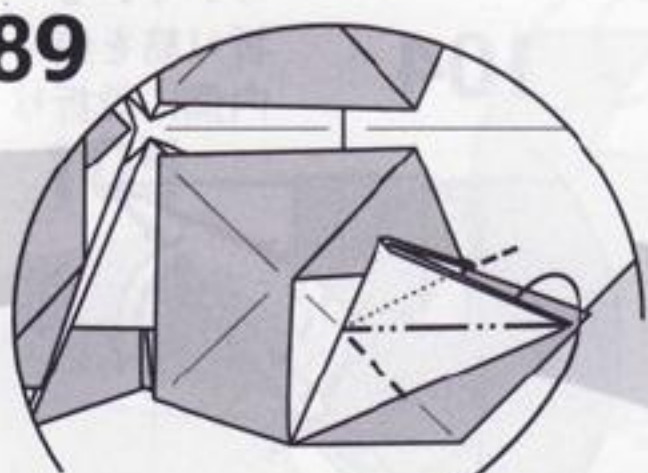
カドを結ぶ線で
折る

79



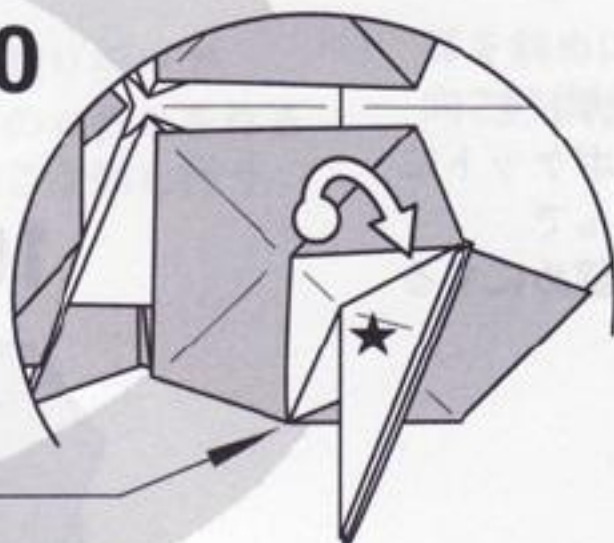
折り返す

89



カドを
つまみ折り
厚くなっているので
しっかりと折る

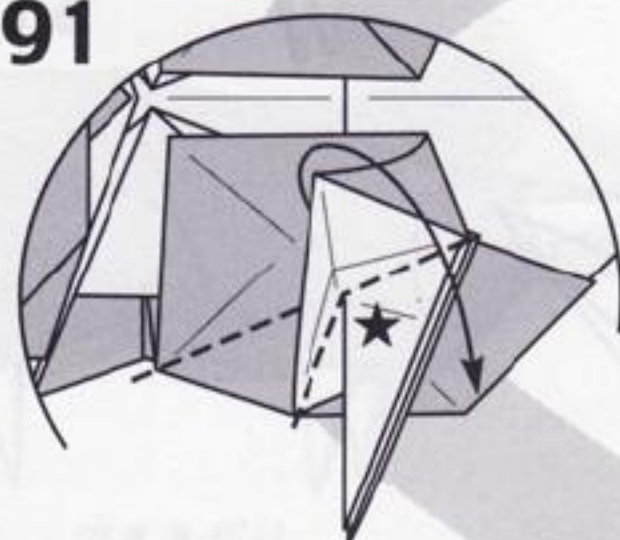
90



※ここが
破れやすい
ので注意

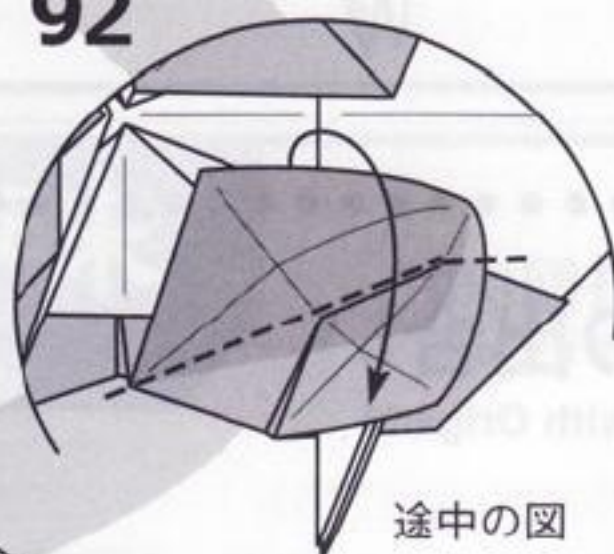
★のところを
動かないように押さえて
白矢印のように
1枚をひっぱり出す

91



つられて
起き上がった部分を
★の上にかぶせるように
折ってたたむ

92



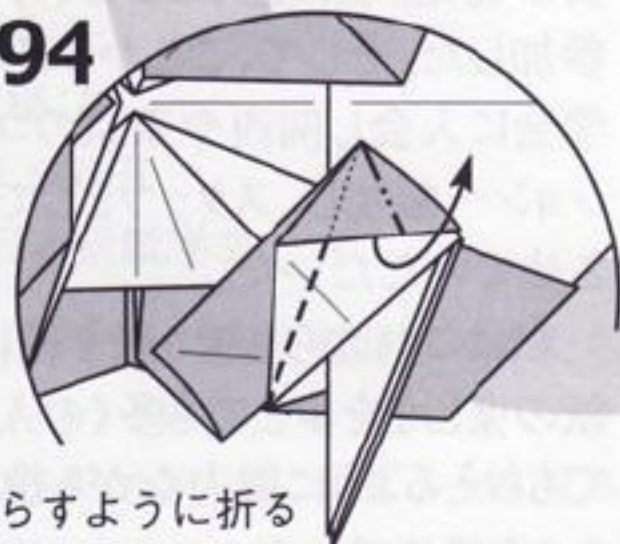
途中の図

93



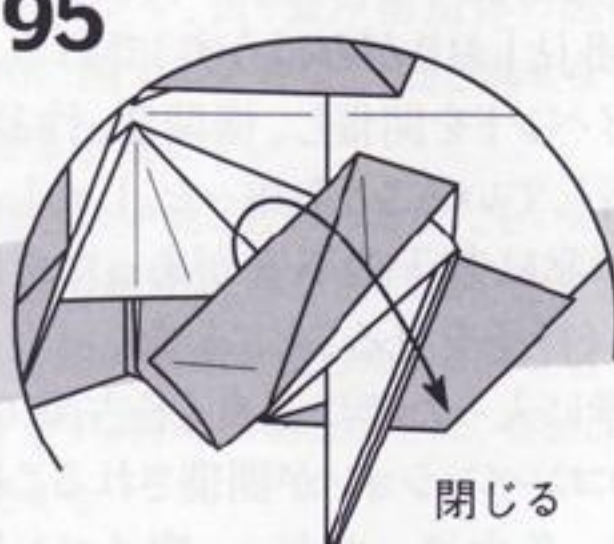
かるくめくる

94



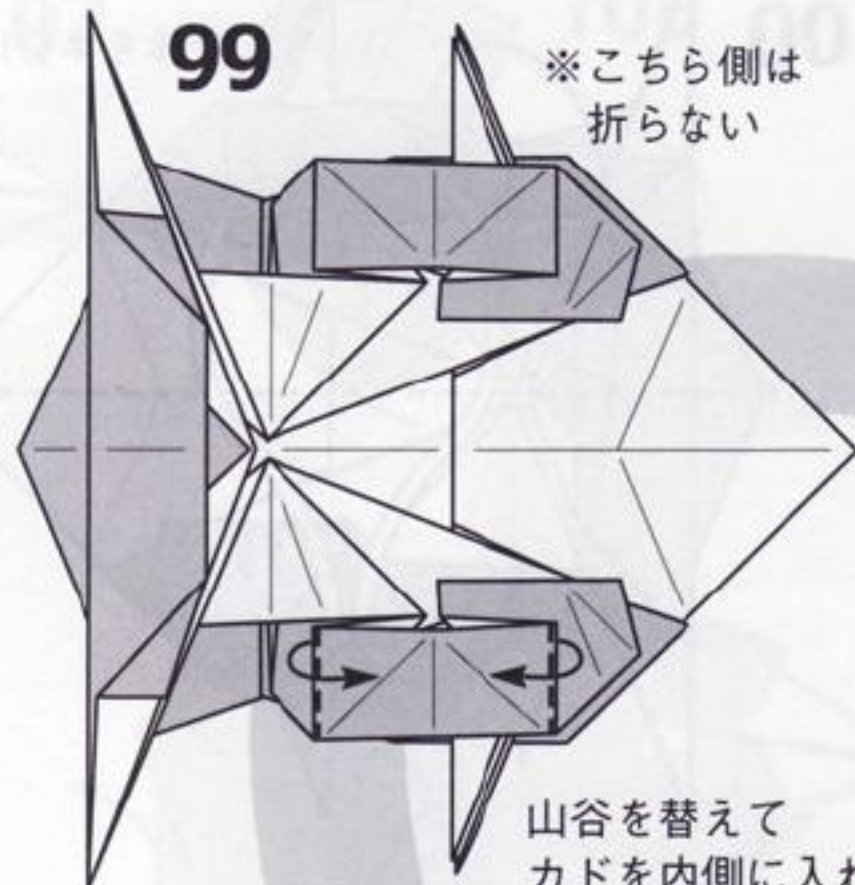
ずらすように折る

95



閉じる

99



※こちら側は
折らない

山谷を替えて
カドを内側に入れる

98



上側も 87~97と
同様に折る

87-97

97



つけた折り筋を使って
内側をひらいてつぶす

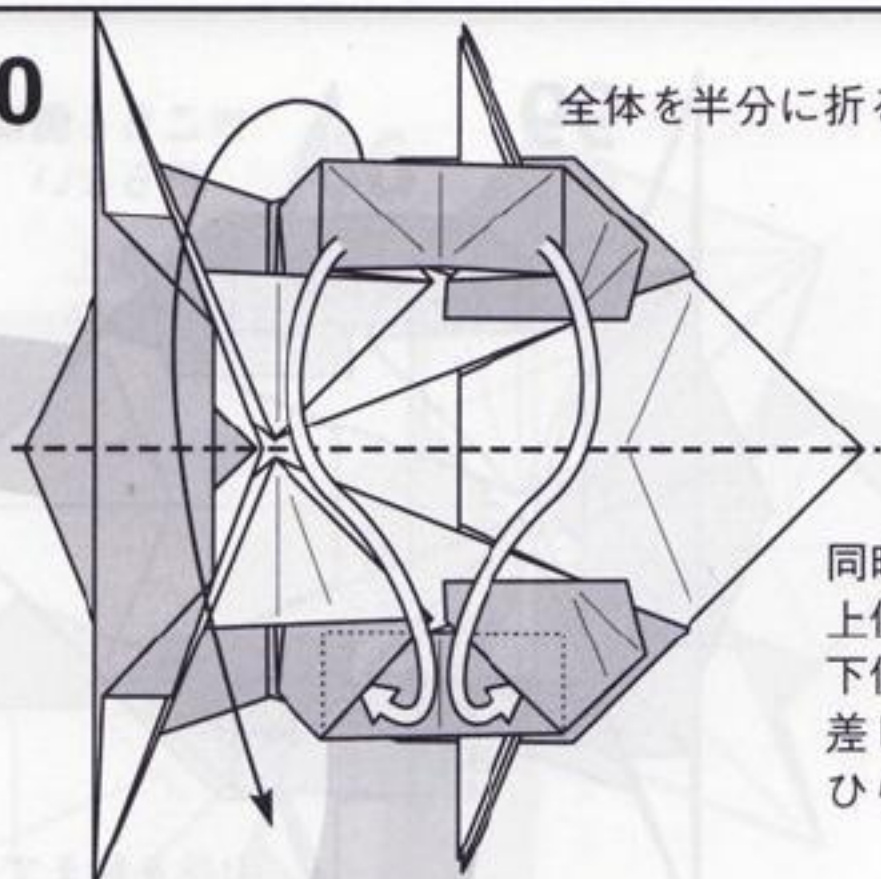
96



カドを○に
合わせて
折り筋をつける

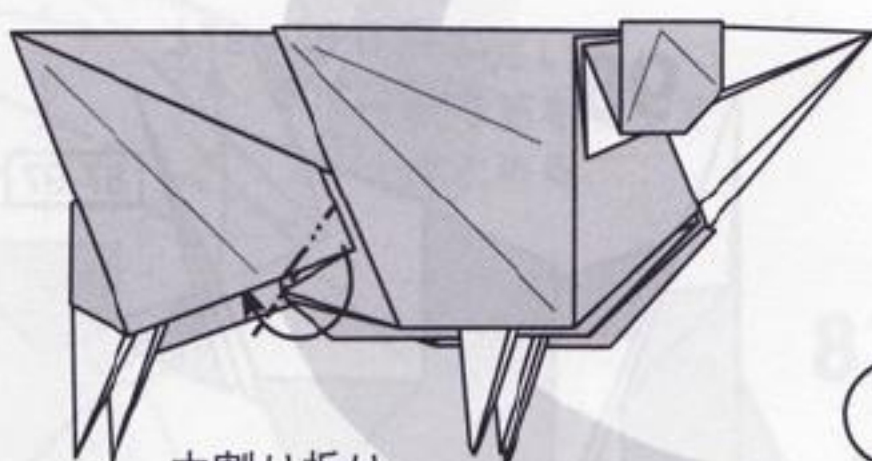
100

全体を半分に折る



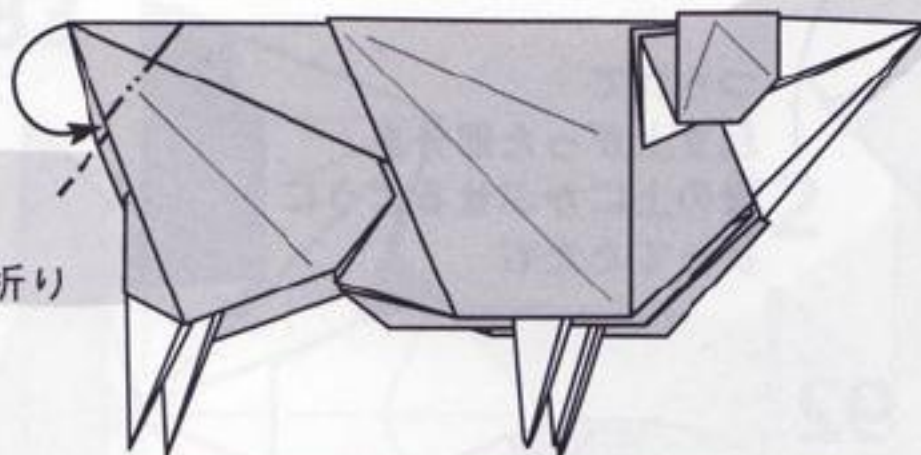
同時に
上側のカドを
下側のポケットに
差し込んで
ひらき留めにする

101



中割り折り
向こう側も行う

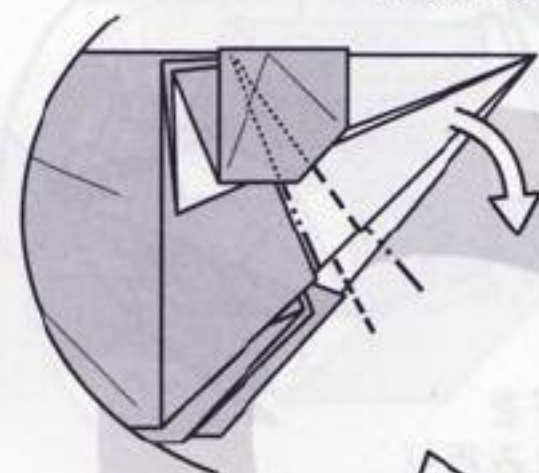
102



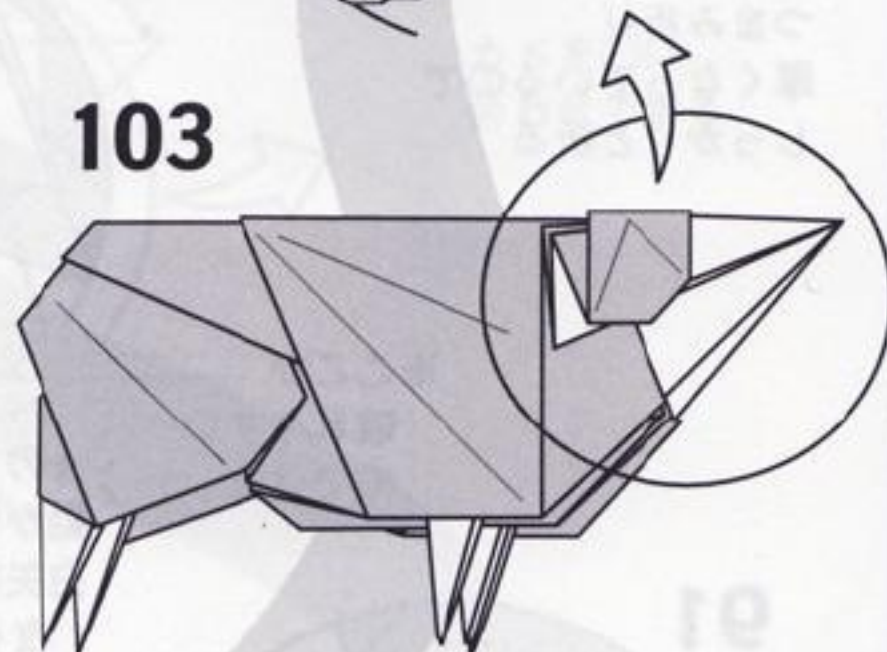
中割り折り

104

ついている
折り筋を使って
内側に段折り



103



Orisuzi ("Fold-Creases")

折り紙との出会い

How I Acquainted with Origami

田中幹人

Tanaka Mikito

両親の話では私は物心ついた頃には既に折り紙で遊んでいたという。現に私自身も4歳の頃には折り紙を弄っていたという記憶がある。

5歳の頃、通っていた幼稚園での工作で折り紙の作品を発表した。シンプルな平面作品ではあったが一応創作(?)作品であった。

小学生時代は家にあった伝承折り紙の本を見たり、新しく買ってもらっては折り図を見ながら折っていた。その中でもとても気に入っていたのは、川畑文昭氏の『おりがみランド 恐竜のおりがみ』である(ちなみに一番最初に両親に買ってもらった本である)。

中学生時代の3年間は部活など

で、折り紙に触れる機会が少なくなった。

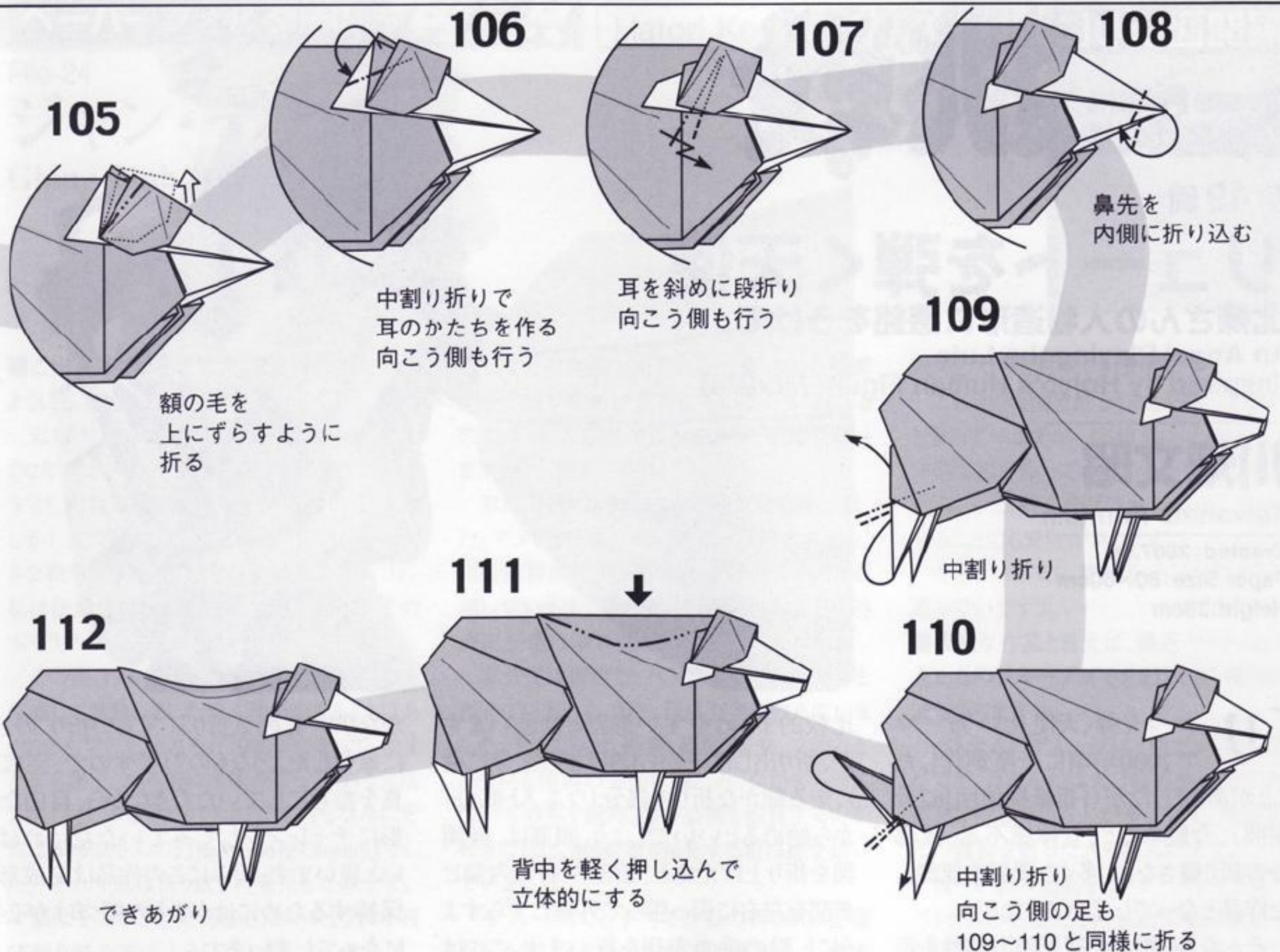
高校生になり、偶然「TVチャンピオン 折り紙王選手権」を見た。この時放送された作品群を見て、鳥肌が立つほど感動した。これをきっかけに再び折り紙をやり始めた。それからはインターネットを使い、折り紙について調べてみた。すると、とあるWebサイトに辿りついた。「折紙探偵団」と「おりがみはうす」である。各地でイベントを開催し、機関誌、作品集を発行していることを知った。しかし、この頃の私は若干の不安があったため、しばらく様子を見ることにした。

大学に入った年に運良く名古屋で折り紙のコンベンションが開催されることを知った。多少迷ったが、一度イベントに

参加してみたいという気持ちがあったため、参加を決意した。そして当日、テレビで見たことがある方、本の著者で名前をよく存じていた方々に実際にお目にかかることができ感動した。

翌年の1月、折紙探偵団東海友の会が発足。私は迷うことなく月例会に参加した。そして、ここから日本折紙学会に入会し関西や東京のコンベンションへ参加し、スタッフとしても活動させていただいた。

私はこれからも折り紙を続け、折り紙の楽しさを少しでも多くの人に知ってもらえるように微力ながら役に立てたらと感じている。



折紙三昧 ⁽³⁸⁾

Origami-Zanmai (This Origami and That)

第3回折り紙の科学・数学・教育研究集会

The 3rd Workshop of Origami in Math, Science, and Education

昨年12月の第1回、今年5月の第2回に引き続き、「第3回折り紙の科学・数学・教育研究集会」を、下記の要項で行います。

日程：12月16日(日)10:30から16:00まで(昼食は各自)

場所：JOASホール(東京都文京区白山1-33-8 朝日マンション2F)

設備：ビデオプロジェクター(書画カメラ、PC入力)

参加資格：なし

参加費：500円

主催：日本折紙学会

会は、研究者の発表と質疑というかたちで行われます。第1回と第2回では、ミウラ折りやフラクタル折り紙、コンピュータによる折り紙解析、折り紙の数学定理、教育への

応用などの発表が行われました。成果の一端は、年度末の会員配布資料(『ミウラ折りの発見と科学』(三浦公亮))にもなっています。

また、第2回では、折り紙を用いた幾何図形の作図法に関して、参加者全員による自由討論を行い、活発な意見交換がなされました。

今回も、コンピュータによる折り紙シミュレーションや、折り畳み構造体の医療への応用に関する発表など、聴き逃せない内容になる予定です。

堅苦しい会と思われるかたもいるでしょうが、折り紙が好きであれば(そうでなくても?)、知的刺激を受けること請け合いの集まりです。興味のあるかたは、ぜひご参加ください。

なお、前回に引き続き、発表者を公募しま

す。特別な資格(会員であるなど)は必要ありません。発表をご希望するかたは、11月16日までに、電子メールにて、下記項目をご連絡ください。郵送でも受け付けますが、できるかぎり電子メールでお願いします。応募が多数の場合などには、時間の調整をしていただくこともありますので、ご了承ください。

○発表者応募要項

◇メールの表題：第3回OSME研究集会 発表希望

◇内容：氏名、連絡先、発表タイトル、発表概要(200文字まで)、発表予定時間(30分以下としますが、交渉に応じます)

◇連絡先：webman@origami.gr.jp

前川 淳 Maekawa Jun

展開図折りに挑戦

Crease Pattern
Challenge!

第49回

リュートを弾く天使

北條さんの人物造形に感銘を受けて

An Angel Playing the Lute
(Inspired by Hojyo's Human Figure Models)

川畑文昭

Kawahata Fumiaki

Created: 2007.08

Paper Size: 80×80cm

Height: 38cm



「リュートを弾く天使」というテーマで2000年頃に一度創作したことがありますが(『折紙探偵団』62号参照)、今眺めると、立体感不足、翼部分の折り難さなど、多くの課題を認識した作品となってしまいました。

そんな中、新たな造形の方性を示してくれたのが、北條高史さんの一連の人物造形群です。北條さんのそれらの作品に感銘を受け、技巧的にも重要な位置付けである「蛇腹折り」を用いて、新たな「リュートを弾く天使」を創作しました。

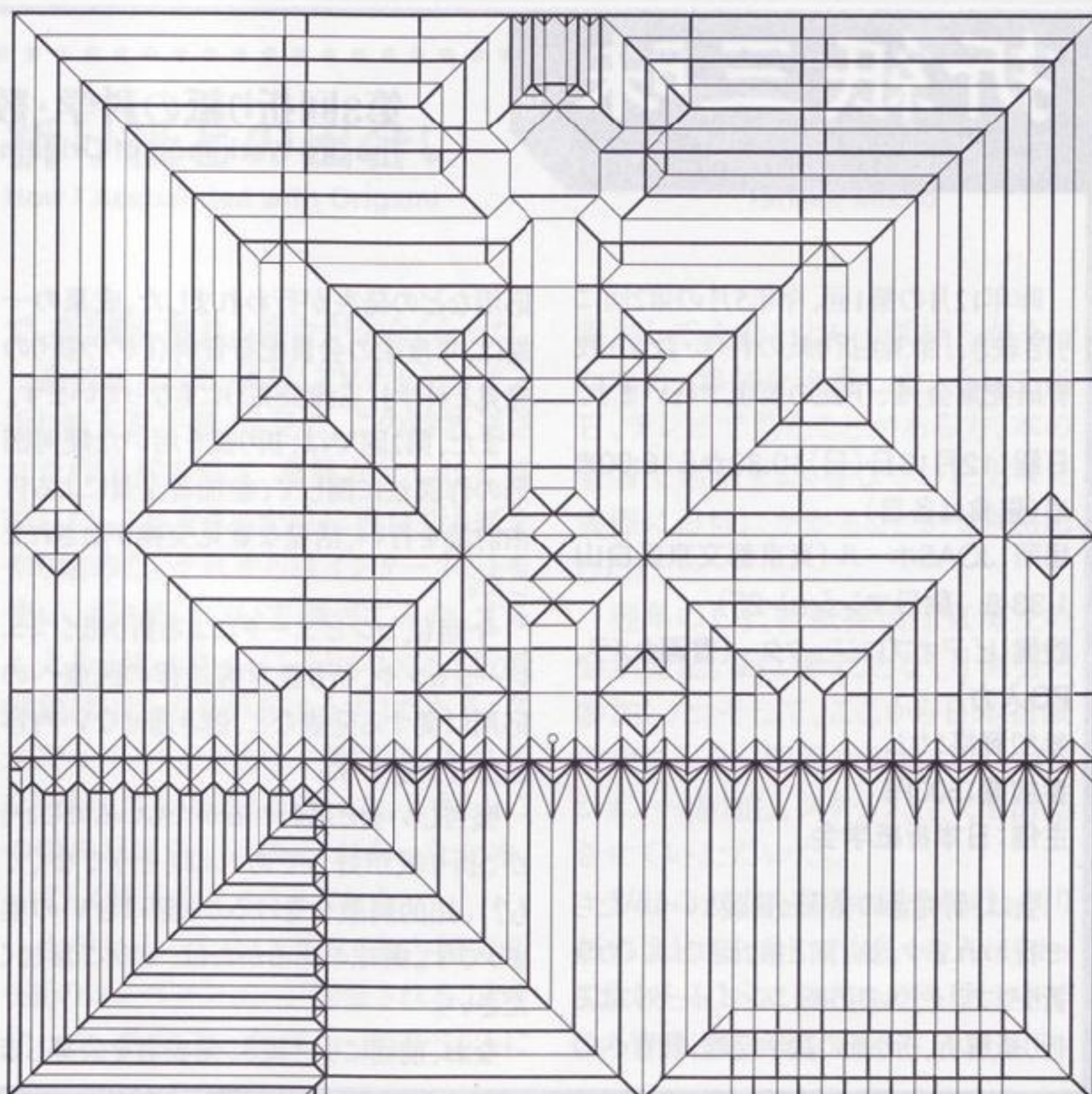
リュートは、洋ナシを半分に切ったような胴体と、とても繊細で大変美しい音色をもつ琵琶に似た古楽器ですが、その形がとても魅力的で、西洋の古い絵画にもよくモチーフとして登場しています。

リュートを折り出すのに、蛇腹折り構造が大変役に立ちました。リュートの胴体の裏側は、細い木を何枚も貼り合わせて半球状に造られています。蛇腹折りでも折り畳まれた「ひだ」をずらすことによりその立体的な造形ができるからです。

展開図の説明ですが、下半身は、リュートを折り出す都合上、左右非対称となっています。展開図の左下部がリュート、その右にある残り2/3部分がスカートになります。結果、スカートも左右非対称の出来上がりとなりますが、これが意外に作品に躍動感を与える結果となりました。展開図の通り折っていただ

比較的まとめやすい形だとは思いますが、折り出しは下から1/3ほどの部分に横に走る細かな折りの部分(ウェスト部分)から始めるといいでしょう。頭部は、展開図を折り上げたあと、頭部左右の内側ヒダ部を左右に引っ張って外側にずらすようにし髪の毛の表現を行います。ここは

かなりの「雰囲気折り」(「ぐらい折り」のさらに進化したようなもの?)ですので、完成写真を参考にさせていただきながら、自由な造形にチャレンジしてみてください。因みにこの作品は完成形を保持するためにはかなりの糊づけが必要になってしまいます。



File-24

ジャン・ディン

Giang Dinh

ジャン・ディン(Giang Dinh):1966年
ベトナム・フエ生まれ。現在はアメリカ・
ワシントンDCの建築事務所に勤務し
ている。バージニア州在住。



■ご出身はどちらですか。また、折り紙はどのようにして始めたのですか。

私はベトナムで生まれました。私が小学生の2年生か3年生のとき、1973年か74年ごろですが、両親が折り紙の本を買ってくれました。しかし、ご存知のように当時のベトナムでは大きな戦争があり、1975年に終戦したときには、私は伝承作品をいくつか覚えてただけで、その本も失われてしまいました。

その後、1989年に家族で渡米し、私は学校を卒業して就職しましたが、折り紙をすることはありませんでした。ところが1996年になって、たまたま本屋で、20年前に両親が買ってくれたのとまさに同じ本を見つけたのです。(ちなみにそれは本多功さんの『The World of Origami』でした。)それで私は折り紙を再発見したのです。

私はその本と笠原邦彦さんの本を買い、再び折り紙を折るようになりました。そして、OrigamiUSAがあるのを知って入会し、コンベンションに参加するようになりました。また、ロバート・ラングさんなどさまざまな人の書いた本を見ながら折っていましたが、次第に作品のアレンジをするようになり、1998年ごろから創作を始めました。

■どのような折り紙作家から影響を受けていますか。

OrigamiUSAのコンベンションでは、エリック・ジョワゼルさんやバンサン・フロデュレルさんなど素晴らしい人たちの素晴らしい作品から刺激を受けていますが、もっとも印象深かったのは吉澤章さんとデイブ・ブリルさんの本です。彼らは紙を「彫刻」しているように感じました。



▲▶ OrigamiUSAでの展示作品より

■あなたの作品を見ていると、東洋的な要素と西洋的な要素が混在しているように感じますが、ご自身ではどのように意識していますか。

私はベトナムとアメリカで建築を勉強しました。アメリカに来たのは23歳のときですから、自分は西洋人であるよりも東洋人であると意識しています。私の中にはベトナムの文化的遺産が受け継がれています。

私の父は画家で、ベトナムの大学で芸術を教えていました。また、母は文学を教えていました。そこで私は、絵画、彫刻、音楽、文学などあらゆる種類の芸術に親しみ、なかでも禅についての本を読み、禅の芸術を鑑賞するのが好きでした。実際、折り紙をする前は絵を描いていました。

そういったことすべてが私の折り紙に影響を与えていると思います。現代彫刻から、絵画やグラフィックデザインまで、さまざまなものからインスピレーションを得ています。もちろん、ほかの折り紙アーティストの展示を見て、あるいは吉澤さんの展覧会のカタログのような写真を見て、学ぶことも多いです。ただし、本を見て折ることはあまりないのですが。

■どのように創作をしているのですか。また、今後はどのような作品を創作したいですか。

ある考えを持って創作するときもありますが、ただ紙を直感的に折って遊ぶという場合もあります。私の作品のほとんどには決まった基準や比率がなく、折るたびに少しずつ違うものができます。シンプルで立体的な形で、題材の本質をとらえるように心がけています。禅の絵画では一筆で対象の形をとらえますが、それと同じように、単純化された形で精神性を

表現したいと思っています。

これからも抽象的な作品を作ってゆきたいと思っていますが、より建築に近づけて、幾何学的な形を作ってみるのも面白いかもしれません。また、鋳金などほかの技法と組み合わせることにも興味があります。

そうはいつでも、複雑な作品もすばらしいと思っていますよ。

■複雑な作品と言えば、最近ベトナムに若い人たちのグループができましたが、彼らとは交流がありますか。

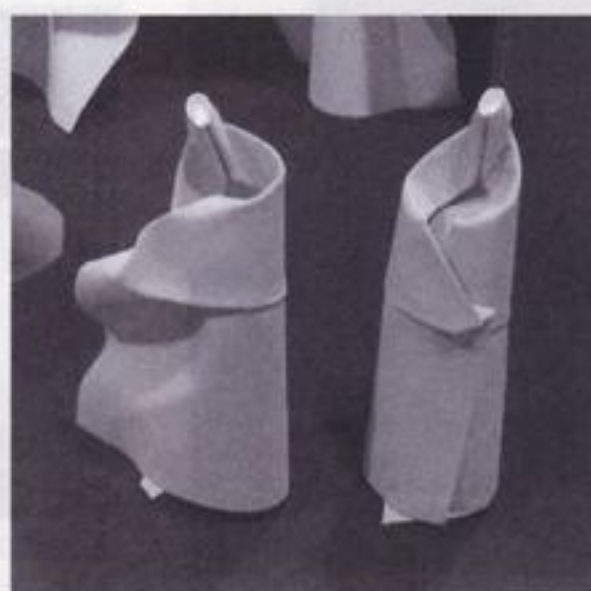
ベトナムのグループはできてからまだ2年ほどです。ほとんどはまだ高校生や大学生で、複雑な作品を折る人が多いです。神谷哲史さんの龍神を折った人も数人います。

彼らが私の名前をインターネットで見つけ、ベトナムの名前だということで私に連絡をとろうとしたようですが、それができずにいるうちに、私がたまたまインターネットで彼らのフォーラムを見つけ、何か手助けができるかと思い参加しました。折り紙の歴史や技法を教えたり、有名な折り紙作家を紹介したりしています。

グループではちょっとしたコンテストも行っていて、これまでにマイケル・ラフォースさんとデイブ・ブリルさんといった人に「審査員」になってもらいました。次のコンテストの審査員はエリック・ジョワゼルさんの予定です。彼らのコメントは若い作家にとって大いに学ぶところがあると思います。

また、British Origami Societyから彼らの作品を雑誌で紹介したいと頼まれたときには、私は仲介役となって、写真を送ったり通訳をしたりしました。そういうわけで、私はグループの「年寄り」会員であると同時に、コンサルタント

でもあると思います。私自身がベトナムに帰ることはほとんどないのですが、若いメンバーが私の母国に折り紙を広めるのを手伝いたいと思っています。彼らの中からはきっとすばらしい折り手や作家が出てくると思います。



Rabbit Ear つまみおり Information



▲一生基金招待者のマヌエル・シルゴさん

▲一般参加で来日したBOSの会長ジョン・ホームウッドさんにはBOSの歴史を語っていただいた。(今号「過去の折り紙に学ぶ」参照)左は通訳の羽鳥公士郎さん

講演会

吉野一生基金で来日したシルゴ氏を始め、興味深い講演が展開された。

▶小松英夫さんはJOAS図書館構想について、始まりから現在までの進行などが語られた



▶吉野一生基金招待者のベン・マラーさんと通訳のジューン・サカモトさん



▶自分の蔵書三五〇冊以上をJOAS図書館に寄贈した本位田穂美さん



▶小学生の頃から参加している森末圭君のとても落ち着いた講習風景



▲11月のフォールディング・オーストラリアのコンベンションに招待されている木下剛さん

◀東洋大学でのコンベンションでは会場はこんな方なくては成り立たない我らの比嘉佑典顧問

第13回折紙探偵団 コンベンションレポート

橘 基

今年、東京の探偵団コンベンションに初参加した。以下は折り紙ビギナーから見たコンベンションの様相である。

場所は恒例となった東洋大学。参加者は350名近くで、今年も、欧米、韓国、オーストラリアなど海外から多数の参加があった。マヌエル・シルゴ氏は今回の招待者で、展示室には彼の精巧な昆虫作品が膨大に並べられ、他を圧倒する勢いだった。同じく招待者で若手のベン・マラー君はというと、典型的な折り紙好き少年の印象で、シャイな中に鋭さを感じさせる一面があった。

2日目から教室受講。あらかじめ展示された作品を見て、霞誠志さんの「金魚すくゑあ」と宮本真理子さんの「ねずみ」が取りたかったが、早々に完売。それでも木村良寿さんの「カメくん」や、川崎敏和さんの折り紙理論の話はとても楽しかったし、立石浩一さんの女子大での折り紙講義の話などは「準備にどれだけ時間かかったんだろう」などと同業者的発想を浮かべつつ、興味深く聴かせていただいた。

そして3日目も教室三昧。布施知子さんの「三角箱」に始まり、初音みね子さんの軽妙な語り口によるバラエティーもの。午後はアメリカのジャネット・イエールさんの「キャンディー袋」や、川村みゆきの「ジオスフィア」、そして最後は勝田恭平君の「トイレマーク」(彼の「みなさん、コンベンションの締めがこんなので良いんですか?」には笑った)。もう満腹。

教室以外で今年はコンテストも行われ、「スポーツ」というお題で海外からも含め力作が寄せられていた。誰の作品かが分からないよう名前が伏せられ、最後に作者が発表される趣向が面白かった。

それにしても小学生から年配の方まで、なんという年齢層の広さ。こんな集まり他にあるのかな。皆折りながら、しゃべりながらとても良い顔をしている。当初自分なんかに参加しても……と怖々であったが思いのほか楽しい会だった。ボランティアを含めたスタッフの方々ご苦労様でした!



▲折り紙理論の川崎教室



▲右はスペインのアニバル・ボイヤーさん
左は通訳で苦労された立石浩一さん





▲先が楽しみな子供たちががんばっている

▲珍しい若い女性の参加者

▲韓国のOh, Kyu-Seokさん



▲ドイツから5年連続参加のシャイな海間君



▲堀口さんJOAS賞ゲット

Snap Photograph by Matsuura Eiko, Kamiya Satoshi



▲新世代のささみ(宮本宙也)教室



▲何処でもおりがみ新世代勝田恭平さん(右)と森末圭君(左)



▲懇親会のゲーム伝承作品折りで苦戦する堀口さん(左)と館さん(右)



▲最年少者と参加のマシュー・ガードナーさん(左)と関西友の会の坪さん



▲海外組とエキスカッション。河口湖の和紙人形美術館で、前列左から2人目が山口さんと親交のある人形作家高木栄子さん

▲常連の黒川紀男さん(左)と中学になって親抜きで参加できるようになった藤井幹大君、右はNOAで折り図など制作で活躍している藤本祐子さん

◆ 韓国コンベンション報告 宮本真太郎

7月21・22日に行なわれた第2回韓国折紙コンベンションに招待作家として参加してきたので、その報告です。

このコンベンションは韓国伝統工芸協会主催のイベントの一部で、昨年第1回では山口真さんと宮島登さんが招待作家として参加されています。そして今年は私と安西真さん…偶然にも両者ともTVチャンピオン1回戦敗退者。去年との差を感じざるを得ませんがきっと気のせいです。

1日目、実は私は飛行機の関係で前日入りできず、会場に着いた時には既に安西さんの講演が終わりに差し掛かった所でした。会議室のような立派な1室が講演会場だったのですが、日本のコンベンションのような折紙教室は無く、講師1人が折紙教室と講演をその1室のみでやるという形態をとっていました。これは参加人数が20名程度と少なく、主催している会自体の体制が日本のように整っていないためだと聞きました。

この日のプログラムは安西さんの講演で終了。私は安西さんに案内されて展示室を見て回りました。どうやら2名程、力を持った作家がいるようで、彼らの躍動感のある馬や飛行機作品の数々は十分世界に通じるレベルだと思いました。また、展示作品の半数近くが10代からの若手によるもので、オリジナルでレベルが高い物も数多くありまし



▲会場に展示されたライフサイズの麒麟の前で左から二人目が同じ招待者の安西真さん。その右隣が筆者

た。それらの作品のほとんどが所謂「キャラクター物」で、多くの作品が神谷哲史さんの影響を受けているように見受けました。それを裏付けるかのように展示室ではボロボロに使い込んだ神谷本を持って回っている小学生がいましたし…。また、韓国独自だと思った作品がいくつかありました。それらの作品は「切って貼る」という、ある方面から見れば「邪道」な作品なのですが、見栄えは良くこれはこれで1分野になるのではないかと感じました。(オリジナルキャラクターを折る…自己完結作品。切り貼りしているがコレはコレで凄い。)

2日目は午前中に韓国の講師による講演があり、「パンダの指人形」や「複葉機」を習いました。そして午後は私の講演でしたが、もちろん通訳を交えた講演など初めて



▶作品の展示会場は終日見学者で賑わっていた



で、その上、原稿を用意しないタイプなので通訳の方にはかなり負担がかかってしまいました。申し訳ない…。講習はイルカをやりましたが特殊な折り方をする作品でこちらも大変でした。ただ、参加者は非常に熱心であきらめずに付いてきてくれました。

こうして2日間の韓国コンベンションは終わりました。まだ発足したばかりで課題は多いと思いますが、非常に熱心なので、成長していくことでしょう。

最後に、お世話になったスタッフの方々や、通訳もしてくれた安西さん(彼は韓国語が話せるのです)、そして招待作家に推薦してくれた山口真さんに感謝します。ありがとうございました。

◆World Origami Days

一昨年、OrigamiUSAが制定した10月24日の「World Origami Day(世界折り紙の日)」。これは、この日に世界中の折り紙愛好家が時と場所を選ばず折り紙のデモンストレーションをして普及させていこうという趣旨のもの。

日本にはNOAが掲げている「おりがみの日」がある。それは11月11日で、世界平和記念日でもある。そこで、昨年からJOASでは10月24日から11月11日の間を「World Origami Days」とすることを提案している。世界の折り紙愛好家に呼びかけ、この期間に折り紙のエキジビションを行い、一人でも多くの人に折り紙に触れる機会をつくり、親しんでもらおうという企画である。まだスタートしたばかりで、今後どのように進んでいくか暗中模索といったところであるが、JOASではこの期間に企画展を開催することになった。内容は、OUSAのコンベンションで展開されている「オリガミ・デザイン・チャレンジ」の応募作品と、今年から始まったJOASの「創作折り紙コンテスト」の応募作

品が展示される。

オリガミ・デザイン・チャレンジとは、ロバート・J・ラング氏の呼びかけで、世界の若手クリエイターを育てる目的で始まった企画だ。毎年一つのテーマでクリエイターから創作折り紙を募集し、OUSAのコンベンションで作品展示をするといったもので、今年で3回目。OUSA展示終了後、ラング氏の厚意でJOASが作品を預かり、今回皆さんに公開する機会を得た。

今、世界中で若手のパワーが炸裂。是非この機会に作品に触れていただきたい。

期間:10月24日～11月11日(予定)

時間:午前10時～午後6時

会場:ギャラリーおりがみはうす

入場無料



▲Joseph Wu



▲Seth Friedman



▲Robert Lang



▲勝田恭平



▼Brian Chan



▼Kenny Baclawski



▼神谷哲史

東京友の会 ※折り紙は各自持参

会場=JOASホール/参加費=500円(中学生以下300円)/講習会=14:00~/研究会=16:00~

●10月6日(土)/JOASホール/講師:市川 学/作品:花のくす玉

●11月10日(土)/JOASホール/講師:未定/作品:未定

東海友の会 ※折り紙は各自持参

●10月20日(土)会場=名古屋芸術大学 西キャンパスG棟204・205/参加費=大人500円(中学生以下は200円)/時間=13:00~16:30/作品、講師未定。

●12月15日(土)会場=名古屋芸術大学 西キャンパスG棟204・205/作品、講師未定。

関西友の会 ※折り紙は各自持参

●10月28日(日)/会場=長岡京市産業文/14:00~17:00/参加費=高校生以上500円/講師:肥下徳志/作品:皿(山田純・作)、サソリ(丸山和宏・作、なるべく24cmの用紙をご用意ください)

静岡友の会 ※折り紙は各自持参

●11月11日(日)会場=「紙友館ますたけ」増武ビル3F/参加費=500円/時間=10:30~12:00/問い合わせ:054-254-4541(増武内 山口16~20時)

名古屋コンベンション 参加受付始まる

第3回折紙探偵団名古屋コンベンションの参加受付が始まりました。参加受付は今号に同封されている申込用紙を使って、郵送またはFAXで申し込みください。詳しい日程等は前号を参照ください。

●会期:2007年11月24日(土)・25日(日)

●場所:名古屋芸術大学西キャンパス

●参加費(折り紙用紙、バッジなど含む)

大人4,000円、学生3,000円(小、中、高、大、専門学校生)

親子割引:大人4,000円+子ども2,000円×

人数分(保護者1名につき小学生以下2名まで適用可)

JOASホール今後の予定

◆10月13日(土)「知子の部屋」布施知子/参加費=2,500円/12:30-16:00

◆11月17日(土)「知子の部屋」布施知子/参加費=2,500円/12:30-16:00

◆12月9日(日)「ある折紙作家の教室」神谷哲史/参加費=3,000円

/11:00-16:00/講習作品「カブトムシ」

■参加の申し込みはFAX(03-5684-6080)か、メールinfo@origamihouse.jp宛でお願いします。これをできない場合は電話でも受けます。上記の予定は講師の都合により変更される場合があります。事前にお問い合わせください(03-5684-6040)。

編集後記

■コンベンションの2日前まで入院した。■病院に行ったことのない私は家族が心配するも、がんとしして病院行きを拒否していた。■ところがそこにN氏が現れ、救急車を呼ばれ強制的に病院に運ばれた。■マガジン104号の入稿直前だった私は「帰してほしい」と医師に訴えたが聞き入れてくれない。■医師は「少し遅れたら昏睡状態だった」と言う。■結果は劇症1型糖尿病で3週間の入院。■命の恩人N氏に感謝。■医師の言う「一病息災ということもあるから」という言葉を受けて安心とも言えぬ中で、死ぬまでこの病に付き合っていくことにしよう。(や)

ホームページ

折紙探偵団 <http://www.origami.gr.jp/>
団員パスワード/Pyramid(大文字・小文字別)

折紙探偵団

2007年9月25日発行 第18巻3号通巻105号
発行所/日本折紙学会

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

Phone & Fax / 03-5684-6080

発行人/前川 淳

編集人/山口 真

編集スタッフ/松浦英子・神谷哲史

デザイン/おりがみはうす

翻訳/立石浩一

発売元/おりがみはうす

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

定価635円(本体605円)

■ORIGAMITANTEIDAN / No.105 / Published on 25, September 2007 by Japan Origami Academic Society, 1-33-8-216 Hakusan Bunkyo-ku 113-0001 Tokyo JAPAN / Cover Photo: "An Angel Playing the Lute" Produced by Kawahata Fumiaki: Photographed by Matsuura Eiko / Publisher: Maekawa Jun / Editor in Chief: Yamaguchi Makoto / Editor: Matsuura Eiko, Kamiya Satoshi / Editorial Design: ORIGAMI HOUSE / Translator: Tateishi Koichi

※このページの商品の取扱いはいすべて おりがみはうす です。日本折紙学会とは別になります。

広告のコーナー



おりがみはうす商品案内

website = <http://www.origamihouse.jp/>

E-mail = info@origamihouse.jp

ATTENTION! : This advertisement is for Japan-internal use only.
For overseas shipment, please refer to the OrigamiHouse Web Site.



第13回折紙探偵団 折り図集vol.13

日本折紙学会 編/2,000円/送料420円
B5判/全256頁/39作品収録

好評発売中!

世界の新作折り図ばかりを集めました。第6回TVチャンピオン決勝戦で神谷氏が折った「ライオン」、本誌『折紙探偵団』に展開図が発表された小笹氏の「翼のあるライオン」、昨年の招待者ニコラス・テリー氏の「ネズミ」、モズリー氏の動くユニット「パルサー」収録。

書籍名/著者・編者	価格(税込)	送料	内 容
神谷哲史作品集 神谷哲史 著 山口 真 編 立石浩一 訳	4,000円	国内一律 1冊 420円 (梱包込)※ 複数冊は 異なります	B5判/全228頁/カラー口絵4頁/19作品収録 超複雑系折り紙の創作活動8年間の集大成。
西川誠司作品集 西川誠司 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,200円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/32作品収録 シンプルからコンプレックスまで幅広く楽しめる本
折紙図鑑「昆虫1」 川畑文昭・西川誠司 共著 山口 真 編	3,100円		B5判/全196頁/カラー口絵 4頁/17作品収録 '93~'94年の「昆虫戦争」で誕生した作品の記録
折紙図鑑「昆虫2」 ロバート・J・ラング 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,500円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/18作品収録 初心者お断り、世界で一番難しい昆虫折り紙の本
折り紙色紙百花 田中具子 著 山口 真 編	2,500円		B5判/全120頁/カラー口絵8頁/31作品収録 色紙に貼り込んで飾る花の折り紙作品集
面~The Mask~ 布施知子 著 山口 真 編	3,300円		B5判/全200頁/全27作品カラー写真紹介 作者がユニットに出会う前の、お面だけの作品集
空想おりがみ 川畑文昭 著	2,900円		B5判/全180頁/カラー口絵4頁/18作品収録 1995年6月初版発行の恐竜と空想動物の本
第12回折紙探偵団 折り図集vol.12 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作52作品を収録
第11回折紙探偵団 折り図集vol.11 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作55作品を収録
第10回記念 折紙探偵団 国際コンベンション 折り図集vol.10 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作50作品を収録
第9回折紙探偵団 折り図集vol.9 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作45作品を収録

※第1回~第8回の折り図集は全て絶版です

※書籍は郵便の「冊子小包」で発送しております。送料には梱包材代が含まれています

限定版 折紙探偵団Tシャツ

折紙探偵団のロゴが入ったTシャツ。
色は黒のみで布は厚手。

XS, S, M, L, XL 各サイズ 定価 2,000円/2着まで送料500円
※数に限りがありますので、ご注文の際には在庫を確認してください。

商品名	価格(税込)	送料	内 容
恐竜柄おりがみ用紙	1,000円	国内一律 1~2セット 440円	35×35cm/10枚入/70kgの 洋紙に細かい恐竜模様を印刷
恐竜柄おりがみ用紙 折り図つきセット	1,200円		恐竜柄おりがみ用紙+ ドラゴン(北條高史作)の折り図

※紙製品は定形外郵便で発送しております(書籍とは別発送になります)。送料には梱包材代が含まれています

書籍2冊の送料は 530円 / 書籍3冊の送料は 670円 (例外を除く・下記参照)
例外:「折り図集」又は「色紙百花」だけを3冊の場合(例:折り図集9,10と色紙百花1冊)のみ 530円

上記以外の場合はお問い合わせください/書籍と紙製品は別発送となりますのでご了承ください

只今制作中

発行日は未定です。気長に待っていて下さい

小松英夫折紙作品集/小松英夫・著 サブライ図をお楽しみに
北條高史折紙作品集/北條高史・著 あの名作の折り図も掲載予定
折紙図鑑「犬」/佐野康博・著 犬の折り紙第一人者の作品集

本ページに記載していない商品は、現在取り扱っておりません
ご送金頂いてもお送りできませんのでご注意ください

商品の申し込み方法

冊数と料金をよくお確かめの上ご注文ください。

先に**郵便振替**か**現金書留**で料金(商品価格+送料)をお送り下さい。入金を確認後、商品を発送させていただきます。ご希望の商品名と連絡先の記入(郵便振替の場合は振替用紙の「通信欄」に記入)をお忘れのない様お願いします。

郵便振替番号 **00120-9-715400**

加入者名 **おりがみはうす**

※折紙探偵団の購読申込みとは別の口座です。くれぐれもご注意ください。

※郵便振替用紙は郵便局備え付けのものをご利用ください。

※現金書留の場合は左記の住所へお送りください。

※商品のお届けは通常、送金から約1週間~10日です(お盆・年末年始等を除く)。



ギャラリー **おりがみはうす**

〒113-0001 東京都文京区白山1-33-8-216

TEL:(03) 5684-6040 FAX:(03) 5684-6080

E-mail: info@origamihouse.jp 10時~18時 日・祝休

■商品を複数ご注文の場合は、送料が変わってきます。電話又はメールでお問い合わせください。

広告有効期限:2007年11月25日

ガイドラインが入っていて折りやすい

着物友禪



折り上がった
作品付き

4柄の着物が折れます



¥400
(税抜き)

着物専用の 和紙千代紙



株式会社トーヨー

ホームページ <http://www.kidstoyo.co.jp>

●写真は印刷ですので実際の商品とは色などが違う場合があります。
※表示価格には消費税は含まれておりません。※内容・デザインは一部変更になることがあります。
本社 〒120-0044 東京都足立区千住緑町2-12-12 TEL03-3882-8161
大阪支店 / 名古屋営業所 / 福岡営業所 / 札幌出張所 / 松山出張所